

北越北線関係発掘調査報告書

みや だいら 遺 跡
宮 平
むし かわ 城 跡
虫 川
なか の やま 遺 跡
中 ノ 山

1995

新潟県教育委員会
財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

北越北線関係発掘調査報告書

みや だいら 遺 跡
宮 平
むし かわ 城 跡
虫 川
なか の やま 遺 跡
中 ノ 山

1995

新潟県教育委員会

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

上越線六日町駅から中魚沼・東頸城両郡を經由し、信越本線の犀潟駅に至る北越北線は、現在平成9年の開通を目指して着々と工事が進められています。地域住民にとっては昭和7年の「鉄道敷設の請願」以来、待望の鉄道であり、地域社会の発展に貢献するものと期待されています。また、関東地方と北陸地方を最短距離で結ぶ鉄道として重要な位置づけがなされ、沿線地域はもちろんのこと、両地方の経済・文化の交流が活発になるものと予想されます。

新潟県教育委員会では、北越北線の建設にともない、昭和48年以来6か所の発掘調査を日本鉄道建設公団と協議を行って実施してきました。

本書は日本鉄道建設公団から新潟県教育委員会が委託を受けて実施した「宮平遺跡」・「虫川城跡」・「中ノ山遺跡」の発掘調査の記録です。

調査の結果宮平遺跡では、平安時代と中世の集落の一部が明らかになり、虫川城跡では郭跡の他に中・近世の墳墓の埋葬形態が明らかになりました。また、中ノ山遺跡では中世の浜集落の生業に製鉄が伴うものであることが判明するなど、幾多の新しい事実が発見され、学術的な成果を得ることができました。

中頸城郡の考古学的調査は、昭和初期から行われ、数多くの報告がなされていますが、東頸城郡の考古学的調査は日が浅く、今後の調査成果の蓄積が待たれるところです。本書が今後の地域の歴史研究に多少なりとも寄与するところがあれば幸いです。

終わりに、多大な御協力と御援助を賜った浦川原村・大潟町及び両町村教育委員会、また、計画から調査実施に至るまで格別の御配慮を賜った日本鉄道建設公団に対して、ここに心から謝意を表します。

平成7年3月

新潟県教育委員会

教育長 本 間 栄三郎

みや 宮 だいら 平 遺 跡

例 言

1. 本報告書は新潟県東頸城郡浦川原村大字横川字宮平240番地ほかに所在する宮平遺跡の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は地方鉄道新線北越北線の建設に伴い、新潟県が日本鉄道建設公団から受託し、昭和63年度に実施した。調査主体は新潟県教育委員会(以下、県教育委員会と略す)であり、調査面積は2,628㎡である。
3. 整理は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下、埋文事業団と略す)が県教育委員会から受託し、平成6年度に報告書作成にかかる整理作業を行った。
4. 出土遺物と調査にかかる資料はすべて県教育委員会が保管している。遺物の註記は、宮平遺跡の「宮」とし、出土地点または遺構名等を併記した。
5. 本書の方位は真北であり、磁北は真北から西偏約7度である。掲載した図面のうち、既製の図面等を使用したものについては、それぞれの原図の出典を記した。
6. 遺構・遺物の実測図、写真は原則として一括した。遺物番号は一連の通し番号を付し、写真図版もすべてこの番号を使用した。
7. 文中の註は脚註とした。引用文献は著者と発行年を〔 〕で文中に示し、巻末に一括して掲載した。
8. 本報告書の第Ⅰ章・第Ⅱ章には、虫川城跡の序説(調査に至る経緯)、遺跡の環境(遺跡をとりまく地理的環境、周辺の遺跡と歴史的環境)を含めて記述した。
9. 石器の石材鑑定では、河内一男氏(県立教育センター地学研究室)に御教示を賜った。
10. 炭化種実の分析、¹⁴C年代測定は、バリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。(第Ⅴ章)
11. 本書の作成は、調査事業団調査課調査第一係が行った。本文の執筆は第Ⅴ章を除いて、第Ⅰ章が戸根与八郎(現県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長)、第Ⅱ章1が佐藤正知(調査事業団主任調査員)、第Ⅱ章2が木村康裕(現県教育庁文化行政課埋蔵文化財係文化財調査員)、他は高橋保雄(調査事業団主任調査員)である。編集は高橋が行った。
12. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大な御教示と御協力を賜った。厚く御礼申し上げる。(敬称略)

赤田哲郎・浦川原村教育委員会・浦川原村立下保倉保育園・岡本郁栄・長壁健蔵
亀倉 康・坂井秀弥・佐藤俊幸・鈴木栄太郎・秦 繁治・望月正樹・横山勝榮

目 次

第 I 章 序 説	1
1. 調査に至る経緯	1
第 II 章 遺 跡 の 環 境	3
1. 遺跡をとりまく地理的環境	3
2. 周辺の遺跡と歴史的環境	5
第 III 章 調 査 の 概 要	9
1. 遺跡の位置と立地	9
2. 調査の概要	10
A. 調査の経過	10
B. 調査方法	11
C. 調査体制	13
D. 整理作業と体制	13
第 VI 章 遺 跡	14
1. 層 序	14
2. 遺 構	16
A. 掘立柱建物	16
B. 井 戸	18
C. 土 坑	19
D. 溝	22
E. 不明遺構	23
3. 遺 物	25
A. 縄文土器	25
B. 石 器	25
C. 土 師 器	26

D. 須 惠 器	27
E. 珠 洲 焼	27
F. その他の陶磁器	28
G. その他の遺物	28
第 V 章 自然科学の分析調査	33
1. はじめに	33
2. ¹⁴ C年代測定	33
A. 試 料	33
B. 測 定	33
C. 結 果	33
3. 種実同定	33
A. 試 料	33
B. 方 法	34
C. 結 果	34
4. 考 察	34
第 VI 章 ま と め	36
1. 土器について	36
2. 遺構について	37
3. SE 13の ¹⁴ C年代測定の結果について	38
《要 約》	39
《参考・引用文献》	40

挿 図 目 次

第 1 図	北越北線計画路線図	1
第 2 図	遺跡周辺の地形分類図	4
第 3 図	遺跡の位置と周辺の遺跡	6
第 4 図	宮平遺跡周辺の地形図	9
第 5 図	宮平遺跡調査風景	11
第 6 図	宮平遺跡調査対象範囲とグリッド設定図	12
第 7 図	小グリッド模式図	12
第 8 図	宮平遺跡基本層序と沢地部分土層堆積図	15
第 9 図	SE 13出土の炭化種実遺体	35

表 目 次

第 1 表	周辺の遺跡一覧	7
第 2 表	宮平遺跡遺物観察表(1)	29
第 3 表	宮平遺跡遺物観察表(2)	30
第 4 表	宮平遺跡遺物観察表(3)	31
第 5 表	宮平遺跡遺物観察表(4)	32

図 版 目 次

図 面	
図版 1	宮平遺跡遺構配置図図版
図版 2	遺構個別実測図 SB 4 SB 35
図版 3	遺構個別実測図 SB 22 SB 23 SB 24
図版 4	遺構個別実測図 SE 11 SE 12 SE 13 SE 15 SE 16 SE 18
図版 5	遺構個別実測図 SK 5 SK 6 SK 7 SK 9 SK 19 SK 20 SK 25 SK 27 SK 28
図版 6	遺構個別実測図 SK 29 SK 32 SK 34 SD 1 SD 2 SD 3

- 図版 7 遺構個別実測図 SD 10 SD 33 SX 17 SX 21
図版 8 遺物実測図 縄文土器 石器
図版 9 遺物実測図 土師器 須恵器
図版10 遺物実測図 珠洲焼 瀬戸美濃焼 唐津焼 越中瀬戸焼 伊万里焼

写 真

- 図版11 遺跡周辺の空中写真 宮平遺跡遠景
図版12 宮平遺跡近景 3Eグリッド土層断面 G~H列グリッド沢地部分土層断面
図版13 A~E列グリッド全景 A列グリッド付近 E5グリッド付近
図版14 F列グリッド付近 G5グリッド付近 G~H列グリッド付近
図版15 SB4柱穴1土層断面 SB4完掘 SB22~24完掘 SB22完掘 SB23完掘
SB24完掘 SB35完掘
図版16 SE11土層断面 SE11完掘 SE12土層断面 SE12完掘 SE13土層断面
SE13完掘 SE15土層断面 SE15完掘 SE16土層断面 SE16完掘
図版17 SE18土層断面 SE18完掘 SK5土層断面 SK5完掘 SK6土層断面
SK6・7完掘 SK9土層断面 SK9完掘 SK19土層断面 SK19完掘
図版18 SK20土層断面 SK20完掘 SK25土層断面 SK25完掘 SK27完掘
SK29完掘 SK28土層断面 SK28完掘 SK32土層断面 SK32完掘
図版19 SK34土層断面 SK34完掘 SD1土層断面 SD1・3完掘 SD2土層断面
SD2完掘 SD3土層断面 SD10土層断面 SD10完掘 SX21完掘
図版20 縄文土器 石器 土師器
図版21 土師器 須恵器 珠洲焼
図版22 瀬戸美濃焼 唐津焼 越中瀬戸焼 伊万里焼 鉄滓 鍛冶炉窯壁

第I章 序 説

1. 調査に至る経緯

JR 上越線六日町駅から分岐して十日町市、松代町などを経て JR 信越本線犀潟駅(大潟町)に至る総延長60kmの北越北線は、昭和39年に工事線に指定され、昭和43年に六日町から十日町までが日本鉄道建設公団(以下、鉄建公団という)によって工事が着工された。次いで昭和47年には十日町から犀潟までの認可があり、法線発表がなされた。北越北線は新潟県の中でも豪雪地帯である中魚沼郡と東頸城郡を連絡し、この地方の産業・経済の開発と促進を図るとともに、関東地方と北陸地方を最短距離で結ぶ鉄道として極めて重要な位置づけがなされている。しかし、路線は魚沼丘陵と東頸城丘陵を東西に横断するため、全区間の64%がトンネルとなっている。この北越北線は昭和60年2月以降、国鉄新線から地方鉄道新線として認められ、建設は鉄建公団、運営は第三セクター方式の北越急行株式会社となり、平成9年を開業目標に現在工事が進められている。

昭和48年、県教育委員会は十日町駅から信濃川右岸までの法線内の分布調査をし、2遺跡について発掘調査を実施した。この調査結果は翌昭和49年3月に報告書として刊行されている。

昭和50年、県教育委員会は鉄建公団の依頼を受けて浦川原村から頸城村大蒲生田地内までの分布調査を実施した。その結果、浦川原村地内では宮平遺跡と虫川城跡の2遺跡がかかることが判明した。鉄建公団はこの頃すでに各トンネル工事に着工しており、昭和54年県教育委員会に対して霧ヶ岳トンネル(出口)にかかる工事施工法について協議があった。県教育委員会は虫川城跡については支障がないと回答したが、地層の関係から遺構の一部が崩落する恐れがあり、工事のうえからも安全性が保てないという申し入れによって4月24日から28日まで、面積162m²



第1図 北越北線計画路線図(新潟県県民百科事典より)

1. 調査に至る経緯

を対象に発掘調査を実施した。その後、北越北線の工事は国家予算との関係から細々と進められ、途中で中断する年もあった。

昭和60年、県教育委員会に対して鉄建公団より浦川原村から大潟町犀潟間の確認調査の依頼があった。分布調査の結果、既に報告されている宮平遺跡と新たに水久保遺跡(頸城村)の2遺跡が確認された。

同年10月には虫川城跡の法線にかかる部分については、12月に工事を発注するということから、鉄建公団から県教委に対して昭和61年に発掘調査をしてほしいという要望があった。細部協議のすえ、県教育委員会は昭和61年5月19日から6月6日の間で、面積585㎡について発掘調査をすることに決定した。

昭和62年になると鉄建公団は、宮平遺跡と水久保遺跡について発掘調査の要望を出していたが、用地買収等の遅れから発掘調査はできなかった。昭和63年には用地買収が完了したため、宮平遺跡は7月18日から9月27日まで、面積2,600㎡を対象に発掘調査を実施した。

第II章 遺跡の環境

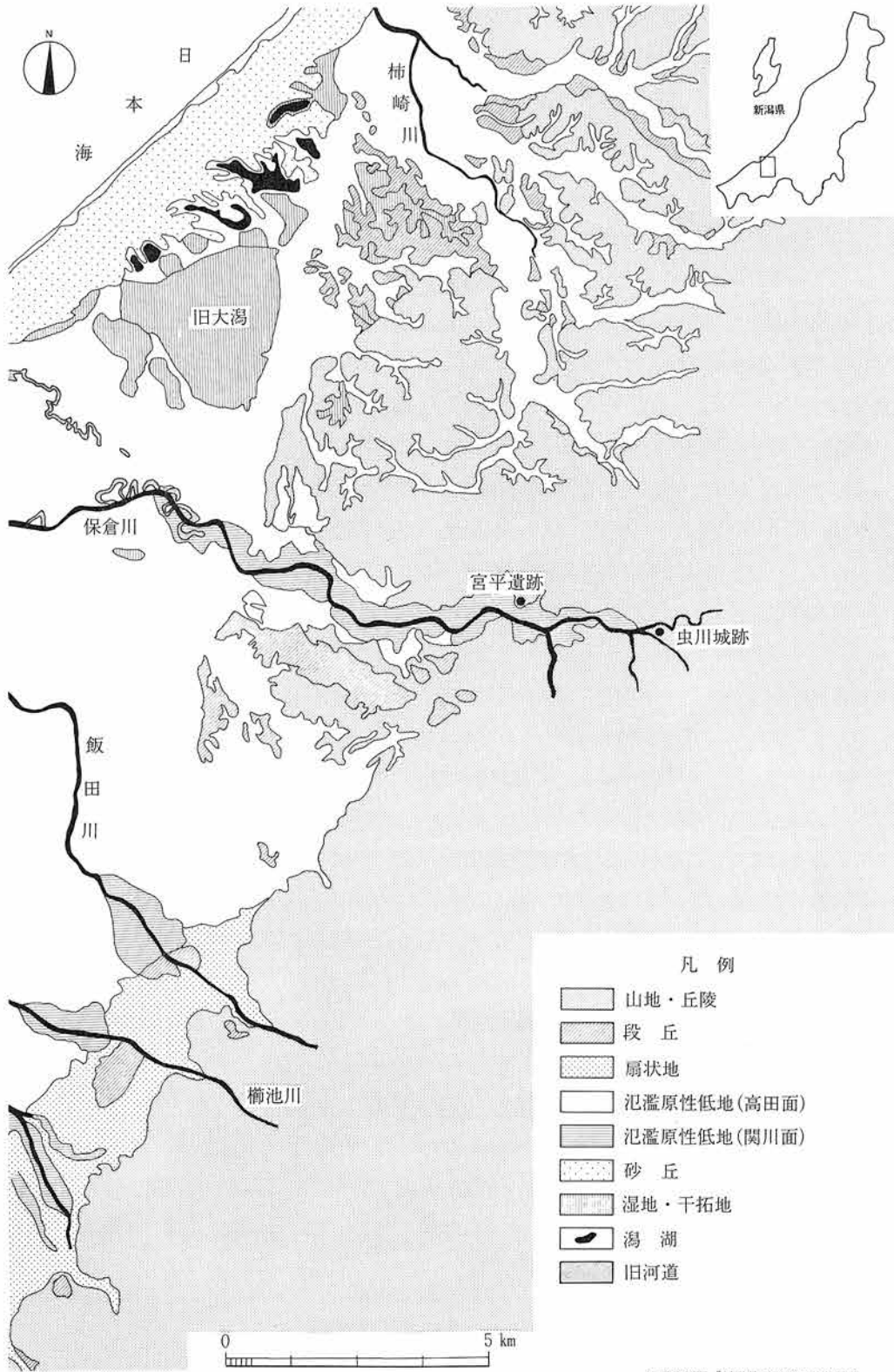
1. 遺跡をとりまく地理的環境

妙高山麓から北に向かって流れる関川を中心に高田平野は開け、それを囲むように東は東頸城丘陵、西は西頸城丘陵、南は妙高火山群が連なっている。宮平遺跡及び虫川城跡が所在する東頸城郡浦川原村は、高田平野の東方に位置し、東頸城丘陵の西端にあたる。浦川原村は、ほぼ東西に貫流する保倉川流域の沖積地を除くと山地及び丘陵地が大半を占めている。

高田平野は、関川・保倉川・矢代川・柿崎川及び東頸城丘陵から流れ出す諸河川により形成された沖積平野で、山地から平野に向けて扇状地、氾濫原性低地、海岸砂丘が形成されている。扇状地は、平野の南部及び南東部に形成されているが、宮平遺跡及び虫川城跡の所在する保倉川流域にはみられない。また氾濫原性低地は、扇状地の末端から海岸にかけて広く分布しているが、現河床面からの比高によって2つの地形面に区分される。上位面は高田面と呼ばれ、平野の大部分を占めている。下位面は高田面を侵食した地形面で関川面と呼ばれ、現河川沿いに細長く分布する〔北陸建設弘済会1981〕。この氾濫原性低地では、関川や保倉川・飯田川などの河川の蛇行が著しく、河川が形成した自然堤防や旧河道が随所にみられる。平野北部には、幅0.5～2.5km、高さ10～40m規模の潟町砂丘が直江津から柿崎まで約20kmにわたって延びている。この砂丘は、沖積世に形成された新砂丘と洪積世末期に形成された古砂丘から構成されているが、古砂丘が伏在する砂丘の規模は大きく、新砂丘のみからなる砂丘の規模は小さい〔長谷川1988〕ことが明らかにされている。また、砂丘と保倉川に囲まれた地域は低湿地帯であり、「大潟」など干拓されたものも含め多くの潟湖が存在している。

宮平遺跡及び虫川城跡が所在する東頸城丘陵は、高田平野と信濃川縦谷帯との間に、南南西から北北東に向かって延びる第三系の丘陵である。丘陵を構成する岩石は、主に砂岩や頁岩であり、遺跡の所在する北西部には、寺泊層や椎谷層・西山層が広く分布している。この寺泊層や椎谷層は地滑りを起こしやすく、この地域は日本でも有数の地滑り地帯である〔鈴木1980〕。なお、宮平遺跡は、保倉川右岸の丘陵平坦部に位置しており、標高約34mを測る。また、虫川城跡は、保倉川と小黑川、細野川との合流点に近く、標高約94mの半独立丘陵上に立地している。

1. 遺跡をとりまく地理的環境



第2図 遺跡周辺の地形分類図

地形分類図『新潟県平野部の地盤図集』
(北陸建設弘済会 1981)より作成

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

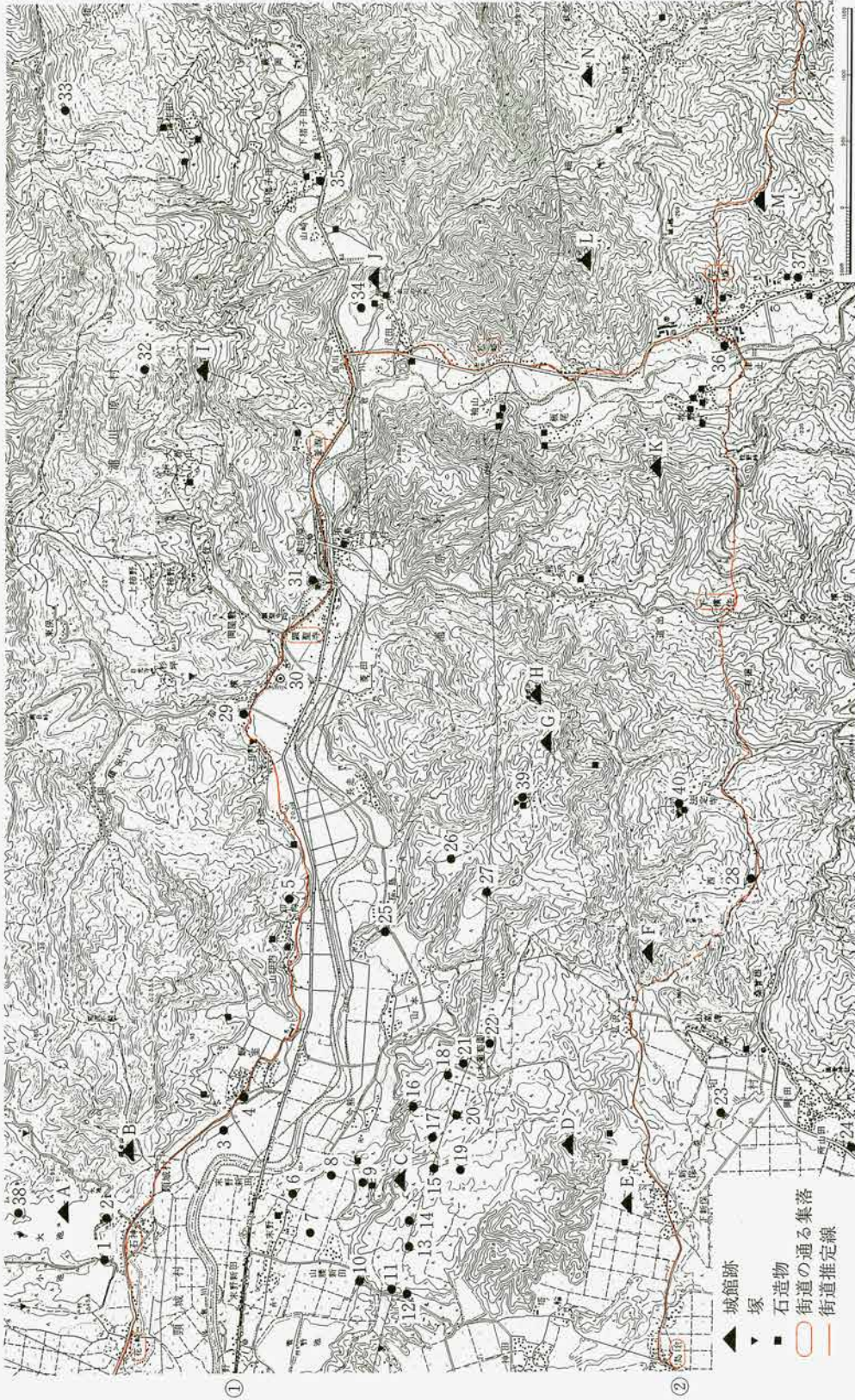
浦川原村周辺の主な遺跡の分布は第3図のとおりである。周辺地域では、分布調査や近年の各種開発事業に伴う発掘調査により、年々多くの遺跡が確認されてきている。当地域では、縄文時代以降の遺跡が分布している。浦川原村の顕聖寺遺跡は古くから知られた縄文時代の遺跡である。この時代の遺跡は、東頸城丘陵と保倉川沿い、高田平野に面した小段丘、丘陵斜面に集中して立地している。また、一部、山地・丘陵の頂や尾根筋にも立地している。浦川原村には現在、弥生・古墳時代の遺跡は確認されていないが、高田平野の南東・南西に古墳群があることは広く知られている。

奈良・平安時代になると、高田平野の微高地に遺跡の分布が広がる。特に、関川流域と板倉町から柿崎町に集中している。当地域で注目されるのは、三和村神田から浦川原村今熊にかけての東頸城丘陵の西端に立地する末野窯跡群である。8世紀から9世紀にかけて操業されたと考えられ、頸城地方最大規模の須恵器窯跡群である。また、その他の遺跡は末野窯跡群の周囲の沖積地に集中して見られ、縄文時代の遺跡の立地とは異なっている。

中世になると、山間地には城館跡・塚・寺院跡・石造物などが多く分布している。山城は、その城歴など不明な点が多いが、その立地から見ると、越後府内(上越市直江津地区)から関東方面へ通ずる街道の要衝に築かれていることに注目できる。また、法定寺跡(浦川原村大字法定寺)・鞍馬寺跡(浦川原村大字岩室)や浦川原村周辺に分布する石仏・石塔群の存在は、当時のさまざまな信仰のあり方を知る上で貴重な資料である。

古代の浦川原村域は頸城郡に属していた。古代の頸城郡の範囲は、ほぼ現在の頸城地方の範囲と考えられる。頸城地方が比較的早くから開けた地域であることは知られているが、頸城郡における越後国府や国分寺の所在について諸説があり〔新潟県1986〕、古代史上の重要地域でありながら、不明な点も多いと言わざるを得ない。古代の浦川原村周辺を見ると、五公郷以木美(『倭名類聚抄』)・式内社の五十君神社(『延喜式』神名帳)がおおよそ三和村付近に比定されている。五公郷の範囲を浦川原村を含めた東頸城郡全域とする説もあるが、史料として遡れるのは室町期であり、旧村名を根拠とするものも見られるなど、範囲の確定については諸説の整理・検討が必要であろう。具体的な資料に欠けるが、遺跡の分布や地形などから、柿崎町から新井市にかけての東頸城丘陵沿いに古代の交通路が想定される。また、丘陵沿いの道に並行する形で柿崎—吉川—朔日峠—有島—熊沢—横住—真光寺—谷—高谷—高尾—宇津保—牧峠というルートで信濃に通じていたという〔浦川原村史編纂室1984〕。

古代末から中世にかけて、浦川原村域は保倉保の保域であった。越後においては、河川の流域に成立してきた保が目立つが、保倉保も保倉川流域に存在していた。また、保倉保は、保倉



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧

1. 塔ヶ崎遺跡	縄文	16. 今熊窯跡Ⅰ	平安	31. 顕聖寺遺跡	縄文	D. 大間城跡
2. 堂山遺跡	縄文	17. 今熊遺窯Ⅱ	平安	32. 焼町遺跡	中世	E. 大間館跡
3. 境原遺跡	平安・中世	18. 下原山遺跡	縄文	33. 山京塚遺跡	縄文	F. 法定寺城跡
4. 大明神遺跡	平安	19. 長峰窯跡1号	平安	34. 馬場遺跡	縄文・平安	G. 家ノ浦城跡
5. 東峯遺跡	縄文	20. 宮分遺跡	縄文・平安	35. 相分け遺跡	縄文	H. 唐野城跡
6. 高畑遺跡	縄文	21. 下原山Ⅱ遺跡	縄文・平安	36. 南田遺跡	縄文	I. 荒城跡
7. 五反田遺跡	平安	22. 原山遺跡	縄文	37. 家之山遺跡	縄文	J. 虫川城跡
8. 坂下遺跡	平安	23. 鴨田遺跡	平安	38. 鞍馬寺跡		K. 江守城跡
9. 立場遺跡	平安	24. 栂屋敷遺跡	平安	39. 法定寺跡		L. 直峰城跡
10. 末野窯跡	平安	25. 北沖遺跡	中世	40. 顕日寺跡		M. ニツ城跡
11. 茨山A遺跡	縄文	26. 稲場遺跡	縄文	A. ふるかんどう館跡		①. 三国街道
12. 長峰窯跡3号	平安	27. 岩室遺跡	縄文	B. 雁金城跡		②. 花ヶ崎街道
13. 長峰西遺跡	縄文	28. 大道遺跡	縄文	C. 櫛形城跡		
14. 長峰窯跡2号	平安	29. 大光寺遺跡	中世			
15. 三口沢遺跡	縄文	30. 宮平遺跡	縄文・平安・中世			

川を境に北方・南方に分かれていた。鎌倉期の状況は不明であるが、南北朝の動乱での当地域の状況は注目される。詳述することは避けるが、直峰城(安塚町)に南朝方の風間氏が拠っていたことや両軍の戦った所として水科・水吉(三和村)、顕法寺城(吉川町)、柿崎城(柿崎町)がみえることはそれを示すものである。また、貞治元年(1362)6月27日、初代越後守護上杉憲顕が天竜寺に「頸城郡五十公郷内保倉北方」を寄進していること〔『越佐史料』巻2—602 1931〕や「五十公郷内欠所分」が憲顕に預置かれていること〔『新潟県史』資料編3—285 1982〕は、上杉氏が魚沼・頸城郡を足がかりに勢力拡大を図ったことと併せて、当地域では注目すべき出来事である。

戦国期には、上杉謙信の関東出陣の道として、当地域に街道が通っていたことが知られている。道筋については明確にできないが、「慶長二年越後国絵図」〔東大史料編纂所1983〕により、街道の通る集落をうかがうことができる。この「国絵図」には誤記や位置のずれなども見られるが、当時の城・集落・川・山などが描かれており、貴重な資料である。主要街道は、府内—黒江村(上越市)—松橋村—森本村—花か崎町—石かミ村(頸城村)—鴨沢村—門前(顕聖寺)村—釜淵村—虫河村(浦川原村)—松崎村—安塚町(安塚町)、府内—真砂新町(上越市)—嶋倉村(三和村)—法定寺村—下横住村(浦川原村)—牧野村—安塚町—細野村(安塚町)—大嶋村(大島村)の二街道で、後世に前者を花ヶ崎街道、後者を三国街道(魚沼街道・松之山街道)と呼ぶようになる。宮平遺跡の所在する大字横川、虫川城跡の所在する大字虫川の集落も描かれている。

横川村は五十公郷に属し「御料所 家弍間 五人」とある。横川村の明細帳に「保倉谷、松野山より高田・今町・柿崎往来」〔浦川原村史編纂室前掲〕とあるように、近世においては街道の分岐点に当たる交通の要衝であった。残念ながら、「国絵図」には横川を通る街道は見られない。

虫河村は五十公郷に属し「藤田扱 家五軒 弍□□」とある。虫川城は直峰城の北側にあり、陸・水の交通の分岐点に立地している。城歴等は不明であるが、戦国期の典型的な山城といわ

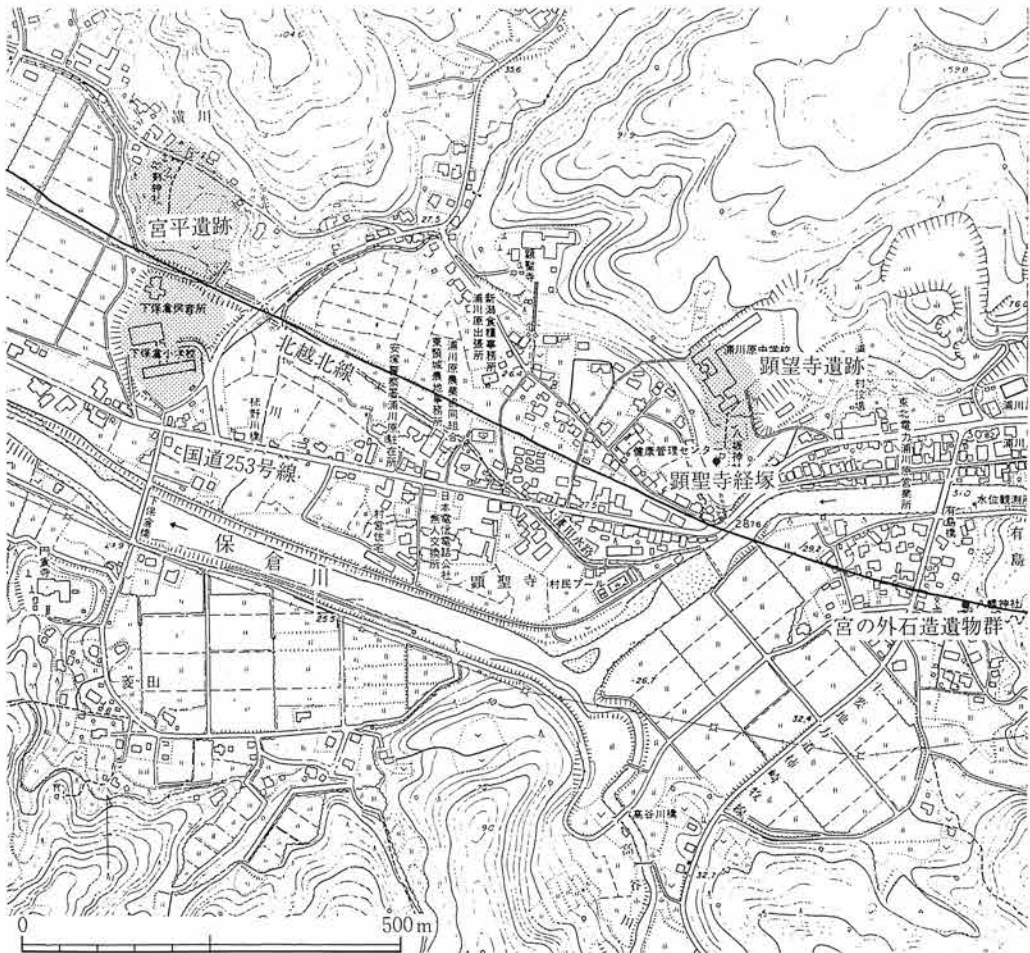
2. 周辺の遺跡と歴史的環境

れる。しかしながら、「国絵図」には見えない。このことは、慶長二年(1597)段階では、虫川城が機能していなかったことを示唆するものであろうか。

第III章 調査の概要

1. 遺跡の位置と立地

宮平遺跡は新潟県東頸城郡浦川原村大字横川字宮平240番地ほかに所在する。大字横川は村内のやや北西寄りにあり、遺跡は横川集落の南側、保倉川によって浸食された谷合いの丘陵平坦面上に位置する。東頸城丘陵の西縁にあたるこの地区は、丘陵が複雑に形成されつつも、標高はおおむね西に低く、東に高い。保倉川はこの丘陵を縫うように小さく蛇行しながら東から



第4図 宮平遺跡周辺の地形図

浦川原村役場作成浦川原村全図
1:5000 昭和46年12月測図

1. 遺跡の位置と立地

西に向かって流れ、村内を過ぎると高田平野に達する。また保倉川は小支谷から流れ込む多くの小河川と合流するが、遺跡の東側で柿野川、西側で猿俣川と合流する。保倉川の沖積面は、横川地区で約500mの幅を持つ、これより東は徐々に幅をせばめ、西は徐々に幅を広げる。遺跡の北側は急傾斜の丘陵がせまり、東・南・西側は沖積面(遺跡の存在した当時は氾濫原と推定される)である。沖積面は西に開け、その中を保倉川が流れる。遺跡から望むと丘陵が西から東にかけて徐々に高度を上げ、ほぼ南に唐野山(271m)、東に保倉川の谷奥部と霧ヶ岳(507m)を仰ぐ。西は丘陵が標高を徐々に下げ、保倉川下流域の高田平野の一部を見る。

遺跡の立地する丘陵平坦面は、南北約350m・標高約33m前後を測り、周辺の沖積面との比高は約10mである。東側の一部に小さな沢が入り込む以外、沖積面とは崖で区切られる。この丘陵平坦面は、東と南に緩く傾斜する。遺跡はかつてこの平坦面上のほぼ全面及び東側の沢地に存在したと推定されるが、^{註1)}南側の半分は明治30年(1897)の下保倉小学校の建設以来、頸城鉄道・下保倉保育園等の建設及びそれに伴う削平のため、ほぼ全壊したものと思われる。北側の半分は明治33年の土地更正図作成時からほとんど改変されていない。今回の発掘調査により、表土から地山までの土の堆積はそれほど厚くないものの、保存状態は良好と推定される。遺跡の現況は、平坦面の西側が杉林、沢地部が水田、それ以外は畑として利用されている。遺跡周辺の文化財として、遺跡より東へ約700mの地点に縄文時代後期を中心とする顕聖寺遺跡、顕聖寺経塚、西へ約500mの地点に中世の大光寺遺跡が存在する。また、遺跡内に存在する剣神社は、棟札から文禄五(1596)年に現在地に遷宮されたことが分かっている〔蒲川原村史編纂室前掲〕。

2. 調査の概要

A. 調査の経過

一部の未買収地を残すものの、取りあえずの発掘調査に支障がないため、事前準備を進めた。プレハブ・トイレ等の設置、器材の搬入、グリッド設定のための基準杭打設及び杭頂標高表示作業等である。

昭和63年7月18日からの発掘調査は、まず草刈り、土層観察用のトレンチ設定を行った。土層観察用トレンチは、法線内の北側とD・E列グリッド境にそれぞれ1本入れ、基本層序を把握した。なお、トレンチを入れた限りでは、遺構・遺物の検出は希薄なものの、縄文時代の遺物が出土し、当初、古代・中世の遺跡と思われたが縄文時代まで遡ることが判明した。その後

註1) かつては調査地の南側の畑地(現下保倉小学校グラウンド付近、第6図参照)でも土器が採集できたという。

の調査は、排土処理場所を沢地部分とした関係で、G～H列の沢地部分の調査を優先することにした。沢地部分は、水田整地時の攪乱や堆積土が厚いこと、しかも遺構・遺物の検出が少ないことが予想されたため、バックホーで上層・中層を掘削した。あわせて、A～B列グリッド(西側)は表土より地山まで土層が薄いため、人力で地山直上まで掘削した。G～H列グリッドの沢地部分の掘削は7月28日終了し、同時にベルトコンベヤを設置し、沢周辺部の遺構確認、沢下層部の遺物包含層の掘削を行った。地山面及び沢上流部からの湧水で、調査は困難をきわめたものの、井戸4基・ピット数基ほかを検出した。遺物は土師器を主体に縄文土器・石器・珠洲焼等が出土した。遺物出土量はそれほど多くないものの、結果として調査区全体では最も多く遺物が出土した地区であった。G～H列グリッドは8月9日に調査を終了した。

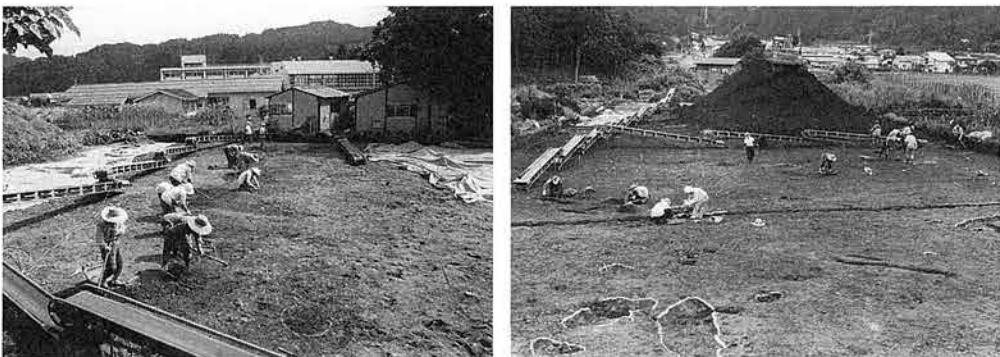
沢地部分の排土は、予想以上に多かったため、E・F列グリッドの東側も排土場所になることになり、引き続きE・F列グリッドの東側の調査に入った。8月10日よりバックホーで地山直上まで掘削し、12日から遺構確認を行った。途中お盆休みを挟み、建物跡3棟・土坑2基・井戸2基及びピット等を検出し、8月31日に調査を終了した。以後西側からの調査を進めA列グリッドは9月8日、C列グリッドは9月12日、D列グリッドは9月14日、E列グリッドは9月21日に調査を終了した。さらに、西側の崖にトレンチを入れ、崖の様子を観察した。西側の崖では遺構・遺物の検出が認められなかった。9月22日には全体清掃・全景写真撮影を行い、ほぼ調査は終了した。

発掘調査で検出された遺構・遺物を多くの村民に見てもらうために、現地説明会を9月23日に行った。当日は農繁期という多忙な時期ながら約30名の参加があった。

現場での後片づけ等は26日で終了し、翌27日には器材を搬出し調査は終了した。

B. 調査方法

調査地は丘陵平坦面上に立地するため、排土置場が限られ、しかも排土搬出の進入路がない



第5図 宮平遺跡調査風景

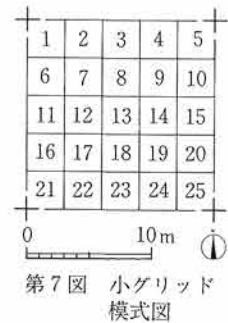
2. 調査の概要



第6図 宮平遺跡調査対象範囲とグリッド設定図

状態である。したがって、調査区内に排土置場を求めなければならないことから、調査順序は沢地部分(G~H列グリッド)、F列グリッド、A~E列グリッドの順であった。調査の終了したF~H列グリッドは排土置場とした。

まず土層観察用のトレンチを入れ、基本層序を把握した。遺構・遺物の密度が希薄なことから、一部人力で地山直上まで掘削したグリッド以外、基本的にはバックホーで表土から地山直上まで掘削した。その後、人力で遺構確認・遺構掘りを行った。あわせて、調査の進行状況により、写真・図面等の記録化を行った。遺構の検出は、地山が黄褐色土または黄褐色泥岩であるため、覆土とは比較的明確に識別できた。しかし、倒木痕が多いことや泥岩層中では遺構の凹凸が激しく、遺構の認定がやや困難であった。したがって、遺構の可能性のあるものは、すべてサブトレンチを入れるか、または半載して判断することにした。遺物の取り上げについては、原則として遺構外のも



第7図 小グリッド模式図

のは小グリッド毎、遺構内ものは遺構毎に取り上げた。

グリッドは、国土地理院の座標系に合わせ、第6図のように法線内の調査区をすべてカバーするように15m方眼を大グリッドとした。グリッドの表示は西から東へA～H、北から南へ1～6とした。大グリッドはさらに3m方眼の小グリッドとし、第7図のように北西隅から1～25の番号を付した。

なお、グリッドのX座標、Y座標は第6図のとおりである。

C. 調査体制

調査は新潟県教育委員会(教育長 田中邦正)が主体となり、以下の体制で実施した。

管	理	管	理	大塚克夫	(新潟県教育庁文化行政課長)
				矢部 亮	(同 課長補佐)
		庶	務	境原信夫	(同 主事)
調	査	指	導	中島栄一	(同 埋蔵文化財係長)
		担	当	高橋保雄	(同 文化財専門員)
		職	員	茂田井信彦	(同 文化財主事)
				田辺早苗	(同 文化財調査員)

D. 整理作業と体制

整理作業は発掘調査時に出土遺物の洗浄と註記を行い、また、検出遺構の確定もある程度済ませておいた。報告書作成にかかる主要な整理作業は、平成6年度に行った。

整理作業と執筆の過程で、埋文事業団職員及び新潟県教育庁文化行政課職員の協力を得た。

整理体制は以下の通りである。

主	体	新潟県教育委員会(教育長 本間栄三郎)
整理・報告		新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 本間栄三郎)
	管	理 藍原直木 (事務局長)
		渡辺耕吉 (総務課長)
		茂田井信彦(調査課長)
	庶	務 泉田 誠 (総務課主事)
	指	導 藤巻正信 (調査課調査第一係長)
	職	員 高橋保雄 (同 主任調査員)
		佐藤正知 (同 主任調査員)

第Ⅳ章 遺 跡

1. 層 序

本遺跡は保倉川により形成された谷合いの丘陵平坦面に立地するものの、調査範囲内では北西側がやや高く、南東側に向かい極めて緩やかに標高を下げる。G列グリッドから東は、沢地部分で水田化されているため階段状になっている。土層の堆積はA～F列グリッドの平坦地は、表土より地山まで約20～50cmと厚さに幅があるものの、大概約30cm程度で薄い。G～H列グリッドまでは、沢地部分のため、上層は水田の整地のため攪乱を受けている。しかし、下層は沢の堆積土で覆われ、約180cmの厚い堆積である。

基本層序はⅠ～Ⅴ層に識別される。以下、Ⅰ～Ⅴ層について説明する。

Ⅰ層 黒褐色を呈する表土・耕作土で約10～20cmを測る。調査区すべてに認められる。

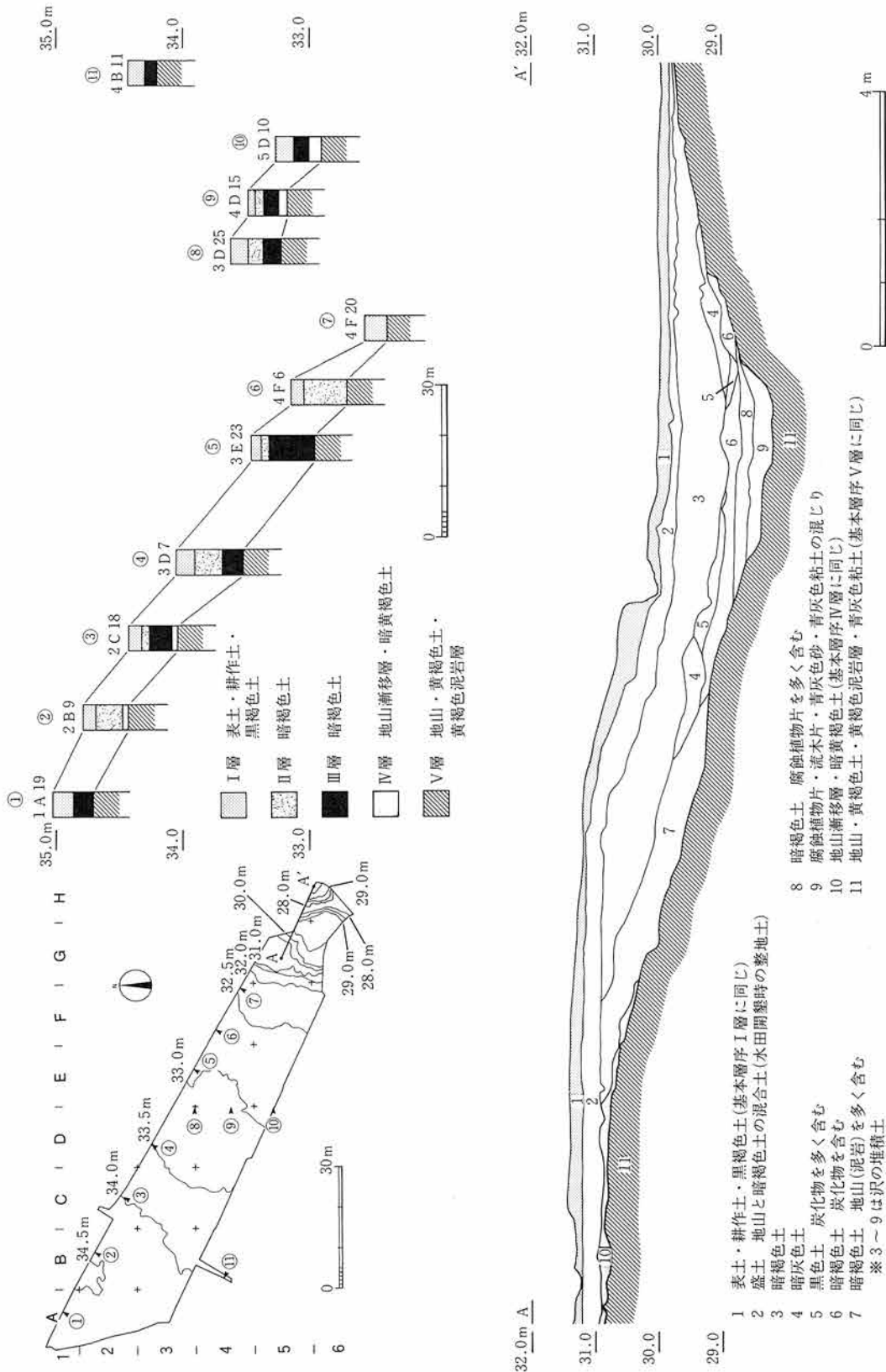
Ⅱ層 暗褐色土を基本とするが、部分的に淡い色調を呈するところもあり、径約1～2mmの白色粒子を多く含み、他に炭化粒子・淡赤色粒子も含む。

Ⅲ層 暗褐色土を基本とし、少量の白色粒子・炭化粒子を含む。黄褐色の地山土・地山礫をそれぞれ多く含む場合とそうでない場合がある。伴出遺物が少なく明確ではないが、中世・平安時代の遺物包含層と推定される。約0～30cmの堆積で厚く堆積するところ、ほとんど堆積していないところがある。

Ⅳ層 暗黄褐色を呈する地山漸移層である。約0～10cmの堆積で薄く、存在しないところも多い。中世・平安時代の遺物は出土しない。1点のみであるが縄文土器が出土した。

Ⅴ層 黄褐色を呈する地山であり、土のみ、土と礫混じり、礫のみで構成される部分がある。礫は固結度の弱い泥岩である。

一方、沢地部分では上層(1～2層)が水田耕作土及び盛土、下層(3～9層)が沢堆積土で約60～80cmを測り、粘性のある土で構成されている。遺物は、調査区内では比較的によく出土する地区であるものの、平安時代・中世・縄文時代のものが混在している。10層は地山漸移層、11層は地山で、基本層序のⅣ・Ⅴ層に対応する。なお、地山は沢の底面付近では青灰色粘土であった。



2. 遺 構

遺物は縄文時代・平安時代・中世・近世以降の4時期に区別されるものの、その主体は平安時代の土師器・須恵器であり、次いで中世の珠洲焼・越前焼である。縄文土器は極めて少なく、遺構も明確でない。近世以降の陶磁器片も量は若干程度あるものの、細片で江戸時代に所属するものは少ない。したがって、遺構の多くは出土遺物から判断すれば、平安時代に所属すると考えられるが、遺構に伴う遺物が少ないこと、一般的には平安時代より中世のほうが遺物量が少ないことから、必ずしもそうとは断定できない。また、遺構の確認面も同一で、覆土の違いも不明確であった。

遺構の所属年代は平安時代と中世と推定し、詳細は後述する。しかし、遺物が少なく明確でないものの両者の間は連続するものでなく、空白期間が存在すると考えられる。

遺構の種別は、掘立柱建物(SB)5棟、井戸(SE)6基、土坑(SK)12基、溝(SD)5本、不明遺構(SX)2基、その他ピット183基である。以下、遺構種別毎に説明する。

A. 掘立柱建物

SB 4 (図版 2・15)

1A グリッドに位置し、確認された限りでは2間(約5.8m)×1間(2.8m)・面積約16.24m²の南北棟建物(N-7°-E)である。調査範囲外に延びる1間はボーリング調査で存在が確認されたものである。柱間寸法は西側柱筋が北から2.9m・2.9m、南側柱筋が2.8mである。柱穴掘形は地山の黄褐色泥岩層を掘り込んでいるため、若干の凹凸はあるもののほぼ円形を呈する。規模はそれぞれ約60~70cm、深さは36~66cmを測る。覆土は、暗褐色土を基本とするものの、いずれもしまりがややなく、炭化粒子を多く含んでいる。SB 4の内側より小ピットが2基検出されたが、SB 4との関係は不明である。遺物は柱穴3の覆土上層より近代以降と推定される茶碗が出土したが、確認面から表土までの推積が薄く、紛れ込みの可能性もある。この他柱穴4より約5cmの円礫が1点出土する。所属時期については、他に出土遺物がないことから不明であるものの、覆土のしまりは他の遺構と異なることから、他の掘立柱建物より新しいと推定される。

SB 22 (図版 3・15)

4F・5F グリッドに位置し、確認された限りでは2間(7.0m)×1間(2.9m)・面積20.3m²の南北棟建物(N-8°-E)である。東側柱筋は北の調査区外に延びるが、倒木痕と重複するためか柱穴位置は不明である。柱間寸法は西側柱筋が北から3.3m・3.7m、南側柱筋が2.9mである。柱穴掘形は黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため、柱穴1は大きく不整形である。他の柱

穴はほぼ円形・楕円形を呈する。深さは柱穴2が浅いものの、他は25～34cmを測る。覆土は、黒褐色に地山土・礫を含む土である。遺物は出土していない。なお、SB 22の内側及び西側・東側柱筋沿いに計8基ピットが存在するが、SB 22との関連は不明である。

SB 23(図版3・15)

4Fグリッドに位置し、確認された限りでは2間(約4.8m)×2間(4.4m)・面積約21.12m²の南北棟建物(N-3°-E)である。北側は調査区外に延び、西側柱筋及び東側柱筋でそれぞれ柱穴1基の存在が認められる。調査区外では畑耕作の為、調査不可能でこれ以外の柱穴の存在は認められなかった。柱間寸法は西側柱筋が2.4m・2.4m、南側柱筋が西から2.2m・2.2mである。柱穴掘形は黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため、柱穴2は不整形で大きく(径90×70cm)、柱穴1は方形、柱穴3・4は円形で径40～50cmを呈する。確認面からの深さは柱穴4が74cmと深く、他の柱穴は24～34cmを測る。覆土は暗褐色土に地山土・礫を含む。遺物は出土していない。

SB 24(図版3・15)

4F・5F・4G・5Gグリッド境に位置する2間(4.8m)×1間(2.4m)・面積11.52m²の南北棟建物(N-15°-E)である。平面形は西側柱筋・東側柱筋の中間の柱穴がやや外側に張り出し太鼓形を呈する。柱間寸法は、西側柱筋の北から2.6m・2.2mで寸法に違いが認められ、南側柱筋は2.5mである。柱穴掘形は、黄褐色泥岩層(地山)を掘り込むため、やや凹凸があるものの、径約30～40cmを測り、ほぼ円形・楕円形である。深さは16～35cmを測る。臨接するSB 22・23に比べ、柱穴はおおむね小さく浅い。覆土は暗褐色土に地山土・礫を含み、SB 22・23より若干黒味を帯びる。遺物は出土していない。

SB 35(図版2・15)

4E・5Eグリッドに位置する2間(3.0m)×3間(5.7m)・面積17.1m²の東西棟建物(N-85°-W)である。柱穴並びは北側柱筋・南側柱筋・東側柱筋が一直線上に並ばず、柱間寸法も異なる。柱間寸法は南側柱筋は西から1.3m・2.8m・1.6m、西寄りの柱穴4・5・6は北から1.5m・1.5mである。柱穴並びや柱間寸法が異なることから、内側の柱穴1～6は身舎、東側の柱穴7～9及び西側の柱穴10～12は廂の可能性も考えられる。柱穴掘形は黄褐色泥岩層(地山)を掘り込むため若干の凹凸がある。柱穴2・11は径60～70cmと大きく、不整形であるものの、この他の柱穴掘形は径20～40cmの円形・楕円形を呈する。深さは柱穴2が39cmと深く、柱穴9・10は浅いものの、他の柱穴は16～23cmとほぼ一定の深さを測る。覆土は柱穴5が暗褐色土に黄褐色土が多く含まれ、他の柱穴の暗褐色を基本とするものと異なる。柱穴5は攪乱土の入っていた可能性がある。遺物は出土していない。SK 34と重複するが新旧関係は不明である。また、西側の柱穴5・11の間にはピット2基検出されるが、SB 35との関係は不明である。

B. 井 戸

SE 11(図版4・16)

5 G 11グリッドにある不整形の素掘りの井戸であり、調査時でも湧水があった。径1.9～2.4m、深さは西側確認面より134cmを測る。底面は不整形でほぼ平坦、側壁は黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため凹凸があり、東側はやや緩やかに立ち上がるものの、これ以外にはほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黄褐色泥岩礫に少量の暗褐色土を含む単層であり、人為的に埋め戻したものと推定される。遺物は珠洲焼甕口縁部片(50)が出土しており、中世の井戸の可能性が高い。北側はSX 17と重複するが、新旧関係は不明である。

SE 12(図版4・16)

6 H 3グリッドにある円形の素掘りの井戸であり、調査時では少ないものの湧水があった。径90cm・深さ96cmを測る。底面は楕円形で播鉢状に緩く窪み、側壁は上方が黄褐色粘土(地山)、下方が青灰色粘土(地山)を掘り込み、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は3層に識別されるがいずれも粘性があり、人為的に埋め戻したと思われる。遺物は出土していないため、時期は明確でないものの、覆土がSE 13にやや近似することから、中世の可能性はある。また、SE 12の南側に接してピット1基、20cm北側、30cm南側にそれぞれ1基の計3基のピットが存在する。ピット3は覆土がSE 12の1層と同一である。他の2基のピットは周辺に関連する遺構が存在しないことからSE 12に付帯するピットの可能性が高い。

SE 13(図版4・16)

5 G 25グリッドにある楕円形の素掘りの井戸であり、調査時でも湧水があった。径75～90cm・深さ90cmを測る。底面は円形で緩く窪み、側壁は黄褐色・明褐色・灰白色粘質土の地山で構成され、上面は沢推積土6層より掘り込まれている。下方は崩落のためか内彎し、上方は外反しながら立ち上がる。覆土は3層に識別され、1・2層には黒色土に炭化粒子・炭化種子・炭化材を含む炭化物が多く含まれ、人為的に埋め戻されたものである。3層は暗青灰色粘土に腐蝕物土(黒色土)が層状に含まれ、井戸使用時の土が堆積していると思われる。土師器杯片が3点(16)、炭化米を含む炭化種実(第9図)・炭化材片多数、炉体窯壁片(61)、鍛造薄片、20～40cmの大礫3点を含む円礫・焼礫片等が出土し、井戸廃棄時に混入または投げ込まれたものと思われる。礫は安山岩がほとんどである。また、井戸周辺からも土師器片、須恵器片(41)、礫、鉄滓(60)等が出土している。炭化材の¹⁴C年代測定では15世紀という結果が出ている。

SE 15(図版4・16)

5 F 15・5 G 11グリッドにある不整形の素掘りの井戸であり、調査時でも湧水があった。径90～110cm・深さ205cmを測る。底面は円形でほぼ平坦、側壁は黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため堅緻で、ほぼ垂直に立ち上がる。底面付近には大きさ約10～40cm・厚さ約5～10cm

程の偏平円礫・焼礫8点・須恵器甕胴部破片(37)が敷かれるように置かれており、濁りの防止のためのものと推定される。覆土は2層に識別されるが、基本的には暗褐色土を基本とする単層とみてもさしつかえなく、人為的に埋めたものである。遺物は前述の礫、須恵器片であり、礫はすべて安山岩の川原石を用いている。伴出遺物から平安時代の井戸と思われる。なお、井戸の北・西・南側の周囲より計7基のピットが検出されている。ピットに関連する遺構が他に存在しないことから、このうち何基かは井戸に付帯するピットの可能性が高い。

SE 16(図版4・16)

5 G 8 グリッドにある楕円形の素掘りの井戸であり、調査時でも湧水があった。径80×100cm・深さ122cmを測る。底面は楕円形で平坦、側壁は黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため堅緻で、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土はほぼ2層に識別されるが、暗褐色土を基本とし、1層は極めて薄く堆積する。2層は人為的に埋めたものと推定される。遺物は出土していない。なお、SE 16の南側10cm程離れてピット1基を検出した。覆土はSE 16の1層に同じ。周辺にはピットに関連する遺構は存在せず、SE 16に付帯するピットの可能性が高い。

SE 18(図版4・17)

4 E 15 グリッドにある円形の素掘りの井戸である。径100～110cm・深さ184cmを測る。底面は楕円形で平坦であり、側壁は黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため堅緻で、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は5層に識別されるが、上層暗褐色土・中層焼土層・下層暗褐色土の3層に大別される。上層・下層は人為的堆積であり、下層の埋め戻しの後、火が使用され、その後上層が埋め戻されたものと推定される。遺物は、土師器片9点(25)・須恵器片2点(39・46)・礫4点・珠洲焼甕胴部片1点(52)出土している。珠洲焼甕胴部片は4層より出土することから、中世の井戸と推定される。なお、北・東・南側は倒木痕と重複するが、土層断面よりSE 18が古い。

C. 土 坑

SK 5 (図版5・17)

2 A 14 グリッドに位置する不整形な土坑である。径125～150cm・深さ21cmを測る。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため、底面・側壁は凹凸が激しいものの、挿鉢状を呈し、立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は暗褐色土を基本とする単層である。遺物は出土していない。

SK 6 (図版5・17)

2 B 17・18グリッドにある不整形で長大な土坑である。長軸225cm・短軸80cm・深さ20cmを測り、長軸方向はほぼN-30°-Wである。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため、底面・側壁は凹凸が激しい。覆土は暗褐色土を基本とする単層である。遺物は出土していない。SK 6のすぐ南西側にSK 7がある。

SK 7 (図版 5・17)

2 B 17・22グリッドにある不整形で長大な土坑である。長軸375cm・短軸95cm・深さ24cmを測り、長軸方向はほぼN-64°-Wである。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため、底面・側壁は凹凸が激しい。覆土は2層に識別され、1層は暗褐色土、2層は地山土を多く含んだ暗黄褐色土で自然堆積と推定される。遺物は出土していない。

SK 7のすぐ北東側にSK 6がある。SK 6・SK 7は隣接して存在し、形状・覆土が非常に似ている。覆土の様子より土坑としたものの、倒木痕の可能性もある。

SK 9 (図版 5・17)

3 B 24グリッドにある不整形な土坑である。径70~100cm・深さ28cmを測る。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため、底面・側壁は凹凸があるものの、搦鉢状を呈し、比較的緩やかに立ち上がる。覆土は3層に識別される。遺物は出土していない。なお、西側でSD 10と重複するが、SD 10が新しい。

SK 19 (図版 5・17)

4 E 25グリッドにある不整形楕円形の土坑である。長軸100cm・短軸50cm・深さ28cmを測り、長軸方向はほぼN-24°-Wである。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため、底面・側壁は凹凸が激しい。覆土は3層に識別されるが、淡褐色土を基本とし、SK 20の覆土に近似する。遺物は11~16cm程の円礫が2点出土し、いずれも安山岩の川原石である。

SK 20 (図版 5・18)

5 E 5グリッドにある不整形楕円形の土坑である。長軸110cm・短軸70cm・深さ27cmを測り、長軸方向はほぼN-36°-Wである。黄褐色泥岩と黄褐色土の混じった層(地山)を掘り込んでいるため、凹凸があるものの、ほぼ搦鉢状を呈する。底面は緩く窪み、側壁は比較的緩く立ち上がる。覆土は淡褐色土を基本とする2層に識別され、自然堆積と推定される。SK 19の覆土に近似する。遺物は10cm程の扁平円礫が1点出土し、安山岩の川原石である。

SK 19・SK 20は位置的にも3 m程の距離で存在し、形状・覆土・出土遺物に共通する点が多い土坑である。時期は不明のもの同時期の可能性が高く、何らかの関連を持った土坑と推定される。

SK 25 (図版 5・18)

3 B 5・4 C 1グリッドにある不整形な土坑であり、径130~180cm・深さ241cmを測る。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため、凹凸が激しいもの、おおむね搦鉢状を呈する。底面は緩く窪み、側壁は緩く立ち上がる。覆土は暗褐色土を基本とする4層に識別され自然堆積と推定される。遺物は出土していない。なお、西側5 cm程離れてSD 10が存在するが、関連は認められない。

SK 27(図版5・18)

2C18グリッドに位置するが、北側は調査範囲外になるため、全容は明らかでない。検出された部分を見る限り、不整形な土坑と推定され、南側にテラス状の高まりがある。規模は不明であるが、深さは25cm程である。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため、凹凸があるものの、底面は比較的平坦で、側壁はやや急傾斜に立ち上がる。覆土は暗褐色土、褐色土の2層に識別され、調査範囲外との断面を見る限り、基本層序Ⅲ層上面から掘り込まれている。遺物は出土していない。

SK 28(図版5・18)

4C1グリッドにある不整形の土坑である。径70~90cm・深さ17cmを測る。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込むため、凹凸があるものの、おおむね楕円状を呈する。底面は緩く窪み、側壁は緩く立ち上がる。覆土は黒褐色土を基本とする単層である。遺物は出土していない。

SK 29(図版6・18)

2C21・3C1グリッドにある不整形で長大な土坑である。長軸240cm・短軸90cm・深さ40cmを測り、長軸方向はほぼN-36°-Wである。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため、底面・側壁は凹凸が著しいものの、側壁は比較的緩く立ち上がる部分が多い。覆土は暗褐色土、淡褐色土の2層に識別される。遺物は出土していない。なお、北東側で倒木痕と重複するが新旧関係は不明である。

SK 32(図版6・18)

4C13グリッドに位置するが、南側は調査範囲外になるため全容は明らかでない。検出された部分を見る限り不整形楕円形を呈するものと思われる、北東側にテラス状の高まりがある。長軸140cm・深さ23cmを測り、長軸方向はほぼN-65°-Wと推定される。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため、凹凸がある。底面はほぼ平坦で、側壁は比較的緩く立ち上がる。覆土は攪乱土が混入し、不明確であるものの、暗褐色土に黄褐色泥岩礫を含み、しまりのない土である。南側の調査範囲外との断面を見る限り、攪乱の層序ははっきりしないが、基本層序Ⅱ層下面で掘り込んだものと思われる。遺物は出土していない。

SK 34(図版6・19)

5E2グリッドにある不整形楕円形の土坑である。長軸150cm・短軸80cm・深さ32cmを測り、長軸方向はほぼN-13°-Eである。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため、凹凸が著しいものの、おおむね楕円状を呈する。底面は緩く窪み、側壁は緩く立ち上がる。覆土は暗褐色土を基本とする2層に識別され、自然堆積と推定される。遺物は出土していない。なお、東側でSB35柱穴10と重複するが新旧関係は不明である。

D. 溝

SD 1 (図版 6・19)

2A7・8グリッドで掘り込まれ、2A・3Aグリッドから調査範囲外の南へ、ほぼ直線状に延びる溝である。SD1の北側約3.4m程離れてSD2が存在する。溝方向はほぼ北北西～南南東(N-10°-W)であるものの、約2.2m西側には崖があり、この崖に沿って掘られたものと思われる。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため、凹凸があるものの、幅約1.3m前後の一定の幅を持ち、深さも約45cmでほぼ一定である。北側の溝端部は隅丸形状を呈する。底面はほぼ平坦で、側壁は比較的急傾斜に立ち上がる。断面形は「U」字状を呈する。覆土は暗褐色土を基本とする単層である。断面を見る限り、溝掘り込み面については、表土から地山まで土層が薄く、基本層序が不明確であるものの、基本層序I層より下で、IV層上面より上である。遺物は須恵器甕片2点(36)、径5～13cm程の礫5点出土する。礫は安山岩の川原石である。なお、溝の内側及び東側沿いに計9基のピットが検出されている。他に関連する遺構がないことから、溝に付帯するピットの可能性もある。

SD 2 (図版 6・19)

2A2グリッドで掘り込まれ、1Aグリッドから調査範囲外の北へ、ほぼ直線状に延びる溝である。3.4m南にSD1がある。溝方向はほぼ北北西～南南東(N-17°-W)であるが、約2.0m西側には崖があり、この崖に沿って掘られたものと思われる。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため、凹凸があるものの、幅約1.3m前後、深さ約45cm前後でほぼ一定である。南側の溝端部は隅丸形状を呈する。底面はほぼ平坦で、側壁は比較的急傾斜に立ち上がり、断面形は「U」字状を呈する。覆土は2層に識別されるが、下層は崩落土と推定され薄く、これより上層は暗褐色土を基本とする単層である。溝の掘り込み面については、表土から地山までの堆積が少なく不明確であるものの、断面を見る限り、基本層序II層下面～V層上面の間で掘り込まれている。遺物は須恵器甕片1点、土師器坏片1点、礫2点出土している。礫は径10cm程の安山岩の川原石である。なお、溝沿いに6基のピットが検出され、他に関連する遺構がないことから溝に付帯するピットの可能性もある。

SD1・2は形状・方向・覆土等が近似し、位置的に見てもすぐ近くで、しかも西側の崖に沿って構築されている。時期・性格は後述するが、同一時期・同一性格の溝と考えられる。また、構築時に大量の黄褐色土及び黄褐色泥岩礫が出たと推定されるが、溝周辺からは排土または土塁等の痕跡は検出されていない。表土から溝上面までの堆積が薄く明確でないが、溝構築時の排土は、すぐ西側の崖下に廃棄されたものであるか、またはその後の耕作等で削平されたものか、自然流失したものかは不明である。

SD 3 (図版 6・19)

3A2・3・8・13グリッドにある細い溝である。南側の一部は倒木痕と思われる攪乱のため、不明確である。長さ5.4m・幅40cm前後・深さ10～20cm前後を測り、ほぼ直線状に北北西～南南東(N-22°-W)に延びる溝である。すぐ東側にSD1がある。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため、底面・側壁の凹凸が著しい。覆土は暗褐色土を基本とする単層である。遺物は銹化の進んでいない近年の銅製飾り金具片1点が出土しているが、遺構面までの堆積が薄く、表土からの混入の可能性もある。

SD 10(図版 7・19)

2C・2B・3B・4Bグリッドにあり、調査範囲を直線状に南北に横断する溝である。北側・南側はさらに調査区外に延びる。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいるため凹凸があるものの、幅50cm前後、深さ30cm前後を測り、ほぼ一定している。溝方向は北北東～南南西(N-14°-E)であり、北側から南側に緩く傾斜し、底面の比高は約30cmである。底面の断面は皿状に窪み、側壁は急傾斜に立ち上がる。覆土は暗褐色土を基本とする単層である。遺構の掘り込み面は南側・北側の調査範囲外との境の断面観察より、基本層序I層下面より掘り込まれ、II・III層より新しい。遺物は覆土上層より暗渠用の木製筒のタガに使用されたとされる針金が出土している。所属時期は、前述の遺構の掘り込み面や遺物から、また、明治33年の土地更正図に図示されている農道(現在の道幅約1m)より約3m西側でほぼ平行していることから、近代以降と推定される。なお、SK9と重複するが、これより新しい。

SD 33(図版 7)

5E13グリッドで掘り込まれ、5E6・11・12グリッドから調査範囲外の西へ、ほぼ直線状に延びる溝である。溝方向は西北西～東南東(N-76°-W)である。黄褐色泥岩層を掘り込んでいるため凹凸があるものの、幅約90cm前後・深さ約40cm前後を測る。端部は隅丸状を呈し、底面に向かって、テラス状の高まりを持つ。底面はほぼ平坦、側壁は急傾斜に立ち上がり、断面形は「U」字状を呈する。覆土は2層に識別され、上層は暗褐色土、下層は暗褐色土と黄褐色土・黄褐色泥岩礫の混合土で底面直上には泥岩礫が多い。遺物は覆土より唐津焼と思われる皿の口縁片1点(56)が出土している。

SD33はSD1・2に比べ規模はやや小さいものの、形状に共通点が多い。関連する可能性が高い。

E. 不明遺構

SX 17(図版 7)

5G11・16グリッドにある不整形な落ち込みである。南側はSE11と重複し、範囲は明らかでない。径240～330cm・深さは西側の確認面より117cmを測る。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込

んでいるため凹凸が激しいものの、挿鉢状を呈し、底面は緩く窪み、側壁は緩く立ち上がる。覆土は3層に識別され、厚く堆積する下層(図版7の土層説明では5層)は、黄褐色泥岩と黒褐色土の混合土で、人為的な埋土である。遺物は出土していない。なお、SE 11との新旧関係は明らかでないものの、覆土が近似すること、深い掘り込みであることから、井戸の可能性もある。

SX 21(図版7・19)

5 E 20・5 F 16・17グリッドにあるピット3基である。ピットは直線上に並び方向は東～西(N-88°-E)である。P 1 径75cm・深さ34cm、P 2 径60×50cm・深さ31cm、P 3 径40cm・深さ22cmを測り、黄褐色泥岩層(地山)を掘り込んでいる。覆土は暗褐色土を基本とする土であるが、P 1 では柱を想定させる落ち込みが認められた。遺物は出土していない。当初、掘立柱建物または柵列と推定し、調査を進めたが、関連するピットが他に認められず、不明遺構とした。

3. 遺 物

発掘調査で出土した遺物は、表面採集品を含め縄文土器3点、土師器127点、須恵器27点、珠洲焼11点、越前焼2点、灰釉陶器2点(細片のため図示していない)、近世以降の陶磁器22点、他に石器12点、礫約50点、鉄滓1点、炭化材・炭化種実等であり、主体は平安時代の遺物である。土器・陶磁器はいずれも細片で、遺構内出土は少ない。多くはG~H列グリッドの沢地部分及びSE13周辺より出土し、A~F列グリッドでは希薄である。

以下、種別毎に記述する。

A. 縄文土器(図版8・20、1~3)

1は深鉢の底部から胴下半部にかけての破片である。底径9.6cm・現存高6.4cmを測る。残存部を見る限り文様は、2本の隆線が垂下し、右側の隆線沿いに半截竹管による半隆起線が施される。同様の文様が3単位で構成するものと思われる。縄文時代中期中葉に所属する。2は深鉢の胴部破片である。RL・LR縄文を交互に施文し、羽状縄文を作り出している。外面には煤の付着が多い。前期の所産と思われる。3は鉢の口縁部破片である。横方向のナデで無文である。胎土に白色粒(長石か?)の小礫・石英粒子が目立つ。

B. 石 器(図版8・20)

不定形石器(4・5)

4は横長剥片の一边を切断し、2か所に不連続で急角度の二次加工が施されている。二次加工は正面に施され、裏面は主要剝離面の平坦面を残し、ほとんど無加工である。石材は黒色緻密な安山岩である。5は厚手の縦長剥片の尖端部に片側縁から、急角度で細かな二次加工が施されている。切断により打面は除去され、また、裏面は主要剝離面の平坦面を残し、無加工である。石材は流紋岩である。4は『五丁歩遺跡』[高橋ほか1992]の不定形石器分類のF2類、5は同じくD4類に相当する。

剥片(6・7)

6は薄手の小型横長剥片、7は厚手の小型縦長剥片である。打面は共に自然面打面、石材は黒色緻密な安山岩である。

磨石類(8~13)

8は被熱し、1/3を欠くものの、楕円礫と推定され、正・裏面に磨痕が認められる。9は厚手の大型楕円礫の正・裏面に磨痕・凹痕が認められる。10は1/2を欠くものの長楕円または棒状の礫と推定され、正・裏面に磨痕、下端に敲打痕が認められる。11~13は中型で縦長の楕円

(不整)礫であり、11は片面に、12・13は正・裏面に凹痕が認められる。11は下端を欠き、ひび割れが多く、13は側縁の一部を欠き、2つに割れている。共に風化が激しい。石材は10が石英安山岩質凝灰角礫岩、13が礫岩、他は安山岩である。

台石(14)

14は偏平で長大な礫であり、片面のほぼ中心部に敲打状の凹痕が認められる。石材は安山岩である。

器種不明石器(15)

15は断面楕円形で長大な礫である。両端に敲打状の痕跡と剝離、中心部やや下端寄りに両側縁からの剝離で浅い抉りが入っている。石材は安山岩である。

所属時期については8～14が縄文時代と推定される。15は縄文時代に類例がなく、伴出土器からすれば、平安時代に伴う可能性が高い。

C. 土師器(図版9・20・21)

無台椀(16～29)

16は小型でやや身の深い椀で、底径6.6cm・器高4.3cm・口径11.7cmを測り、径高指数(器高/口径×100)は37である。底部は回転糸切り後、未調整、ほかはロクロナデである。底部から体部下半にかけては丸みを持ち立ち上がり、口縁部にかけては直線的である。内面中央には渦巻状のロクロナデの痕跡を残す。17～19は底部から体部下半にかけて丸みを持ち立ち上がり、角度は緩い。底径5.2～5.7cmを測る。いずれも底部は回転糸切り後、未調整、ほかはロクロナデである。20は底部から体部下半にかけて直線的に立ち上がる。底径5.1cm、底部は回転糸切り後、未調整、ほかはロクロナデである。21～26は底部から外反ぎみに立ち上がるもので、21～23はやや角度が急で、22・25・26は緩い。底径4.3～5.8cmである。いずれも底部は回転糸切り後、未調整、ほかはロクロナデである。27は内外面ロクロナデののち、外面体部下半から底部に篋ケズリが施されている。篋ケズリ調整の椀はこの他2点出土している。28は墨書土器であるが、破片のため解読不能である。底部から外反ぎみに立ち上がり、底部は回転糸切り後、未調整、ほかはロクロナデである。29は内面黒色土器であり、底部から体部下半にかけて外反ぎみに立ち上がる。底部は回転糸切り後、未調整、ほかはロクロナデである。なお、内面はミガキが施されている。内面黒色土器の無台椀は、他にもう1点出土している。

有台椀(30)

1点のみ出土で、しかも高台が欠落した細片である。外面体部下半・底部はロクロナデ、内面黒色処理、ミガキが施されている。

甕(31～33)

31は口縁部で、端部が上方につまみ上げられて外傾する面を持ち、この面はわずかに凹線状

になる。内外面ロクロナデである。32・33は胴部破片で、外面平行叩き目、内面ロクロナデが施される。

鍋(34・35)

34は体部上半の破片であり、外面に弱い平行叩き目、ロクロナデが施されている。上方に緩く凹線状の窪みがある。上端は粘土紐のつなぎ目である。35は口縁部の細片であり、端部はやや厚みがあり、外傾する面を持つ。内外面ロクロナデである。

D. 須 恵 器(図版9・21)

甕(36~45)

36は頸部破片で、上部に5本1組の櫛描波状文が連弧状に2段施されている。37~45は胴部破片である。37・39~44は外面平行叩き、内面同心円叩きが施される。そのうち39は外面に、41は内外面に弱いナデが施される。また、38は外面が木目により擬格子の叩き、内面同心円叩きが施される。45は内外面格子目叩きが施された後、内面には弱いナデが施されている。

長頸瓶(46)

46は長頸瓶の肩部破片であり、内外面ロクロナデで薄手のつくりである。

E. 珠 洲 焼(図版10・21)

擂鉢(47~49)

いずれも破片である。47・48は口縁部破片である。47は端部が広く水平な面を持ち、外側に引き出されている。体部の内外面はロクロナデの凹凸が激しく、内面にはおろし目が認められる。48は端部が若干肥厚して面を持つが、広くなく外傾する。内端・外端は丸味がある。体部はロクロナデの凹凸がなく滑らかで、内面にはおろし目が認められない。49は体部下半の破片で底部に近くなるにしたがい器壁が厚くなる。内面ロクロナデで、おろし目は認められない。

甕(50~54)

50は口縁部から体部上半部にかけての破片である。口縁部は短く外反し、玉縁状に肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ、体部上半部の外面は水平の平行叩き目、内面無文の押圧痕で上方はヨコナデが施される。51~54は甕の体部破片と推定したが、51・53は壺の可能性もある。51~53は外面平行叩き目、内面無文の押圧痕であり、その後、52は内面にヨコナデが施されている。54は器壁の剥落が激しいものの、甕体部破片と推定され、外面にはすだれ状の叩き目、内面無文の押圧痕がある。胎土は多孔質で見た目よりやや軽い。

年代については、珠洲焼編年(吉岡1982・1989)によれば47はIV期(14世紀)、48がIII期(13世紀後半)、50がVI期(14世紀)に相当する。

F. その他の陶磁器(図版10・22)

灰釉陶器(55)

55は平椀の口縁部から体部にかけての破片である。内面及び口縁部外面付近に明緑灰色の釉がかかる。外面にはロクロナデによる緩い凹凸があり、口縁部はやや肥厚し丸味を持つ。この他、図示していないが、大型の鉢の体部破片が出土している。いずれも中世に属すると推定される。

近世陶磁器(56～59)

56は唐津焼と思われる皿の口縁部破片である。口縁端部は緩く外反し、ほぼ水平になる。内外面に緑灰色の釉がかかる。口縁部の形態によりI期(16世紀末)[大橋1989]に属するものと思われるが、破片のため明確でない。唐津焼と推定されるものはこの他2点出土するが、いずれも皿の体部破片である。57は高台付きの皿で、体部下半から底部にかけての破片である。内外面底部以外は鉄釉がかかる。高台は削り出で、端部は鋭く稜を持つ。また、内面底部には重ね焼きの痕跡が残り、幅1～1.5mmの高台の稜線痕が認められる。越中瀬戸と考えられる。58は伊万里焼染付椀の体部から底部にかけての破片である。高台が高く、いわゆる広東椀と呼称されるものである。内外面は灰白色、呉須は青色を呈する。59は伊万里染付椀の口縁破片である。内面の口縁付近には2本の横線、外面は口縁付近に1本の横線、口縁付近から体部にかけては2本単位の縦線が描かれている。全体的に灰白色を帯びており、呉須は緑灰色である。伊万里焼編年[大橋1984]によれば58・59いずれもIVb期(19世紀前半)相当する。

G. その他の遺物(第9図・図版22)

鉄滓(60)

図示せず写真だけであるが60は鉄滓である。長さ66×幅58mm・重さ98.5gである。裏面は鍛冶炉底の曲面を示し、椀形滓といわれるものである。5G25グリッドより出土している。

鍛冶炉窯壁(61)

61は細片であるものの鍛冶炉窯壁の一部と思われる。SE13より出土している。

炭化種実(第9図)

SE13の覆土より出土したもので多数のイネのほか、クリ、オニグルミ、アワ近似種も多く認められた。

第2表 宮平遺跡遺物観察表(1)

縄文土器

番号	器種	出土地点・層位	遺存部位・遺存率	色調(外)・(内)	文様	備考
1	深鉢	5G4	胴下半部及び底部	明赤褐・褐	隆線・半隆起線、 3単位か?	内面こげ付着。 底径9.6cm、現 存高6.4cm
2	深鉢	5E1・IV層	胴部片	灰褐・にぶい赤 褐	羽状縄文・無文 (ナデ)	外面煤付着
3	鉢	表採	口縁部片	にぶい黄橙・に ぶい黄橙		

石器 () 内は現存値

番号	器種	出土地点・ 層位	遺存率	長さ・幅・厚さ(cm)			重さ(g)	石材	備考
4	不定形石器	5H21	ほぼ完形	4.3	(4.7)	1.1	(20)	黒色緻密な安山岩	上端・下端に不連続で急角度の二次加工。打面除去。右側縁の一部欠損。
5	不定形石器	4B2	完形	7.9	4.0	2.0	49	流紋岩	先端部に細かな二次加工。打面除去。
6	縦長剥片	4F	完形	4.7	3.5	1.5	15	黒色緻密な安山岩	自然面打面。
7	横長剥片	3B22	完形	2.1	5.1	0.8	7	黒色緻密な安山岩	自然面打面。
8	磨石類	6H7	2/3	(9.1)	(7.8)	4.2	(232)	安山岩	被熱。2つに割れている。正裏面に磨痕。
9	磨石類	5H2	完形	13.1	10.9	7.1	1,450	安山岩	正裏面に磨痕・凹痕。
10	磨石類	排土	1/2	(12.9)	(3.5)	(4.0)	(276)	石英安山岩質凝灰角礫岩	正裏面に磨痕。下端に敲打痕。
11	磨石類	4B3	2/3	(8.9)	6.0	3.9	(248)	安山岩	片面に凹痕。ひび割れ多い。
12	磨石類	6H17	完形	12.3	7.0	3.8	469	安山岩	正裏面に凹痕。
13	磨石類	3E17	4/5	10.5	5.5	3.4	(198)	礫岩	正裏面に凹痕。風化激しい。2つに割れている。
14	台石	6H2	完形	26.6	10.6	5.7	2,520	安山岩	片面に敲打状の凹痕。
15	器種不明石器	6H2	完形	20.1	7.3	5.1	1,045	安山岩	両端に敲打状の痕跡と剝離。下端寄りに抉りあり。

第3表 宮平遺跡遺物観察表(2)

土師器

番号	器種	出土地点・層位	遺存部位・遺存率	色調(外)・(内)	調整	備考
16	無台椀	SE13・覆土上層	1/3	にぶい橙・にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り	底径6.6cm・器高4.3cm・口径11.7cm
17	無台椀	6H7	底部1/3	にぶい橙・にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り	底部5.2cm
18	無台椀	6G5	底部1/3	にぶい橙・にぶい黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキか?	底径5.6cm
19	無台椀	5H・I層	底部1/3	橙・橙	ロクロナデ、底部回転糸切り	底径5.7cm
20	無台椀	5H21・22	底部	灰白・灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り	底径5.1cm
21	無台椀	6H2	底部1/2	灰白・灰白	クロナデ、底部回転糸切り	底径4.3cm
22	無台椀	6H7	底部	にぶい黄橙・浅黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り	底径4.8cm、胎土やや粗い
23	無台椀	5G14・15・19・20	底部1/3	黒褐・褐灰	ロクロナデ、底部回転糸切り	底径5.8cm
24	無台椀	6H7	底部1/3	にぶい黄橙・にぶい黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り	底径5.4cm
25	無台椀	SE18・覆土	底部1/4	にぶい褐・にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り	底径4.9cm
26	無台椀	5H22	底部	にぶい赤褐・淡橙	ロクロナデ、底部回転糸切り	底径4.4cm
27	無台椀	5D5	底部1/3	浅黄橙・浅黄橙	体部下半ロクロナデ後篋ケズリ、底部回転篋ケズリ	底径5.6cm
28	無台椀	5G	底部1/3	にぶい橙・にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り	底径5.7cm、墨書土器、判読不能
29	無台椀	5G	底部1/2	灰黄・暗灰	ロクロナデ、底部回転糸切り、内面ミガキ	底径5.4cm、内面黒色土器
30	有台椀	5D5・Ⅲ層	底部破片	にぶい橙・黒	ロクロナデ、底部ロクロナデ、内面ミガキ	内面黒色土器
31	甕	5H21・22	口縁部破片	浅黄橙・浅黄橙	ロクロナデ	外面煤付着
32	甕	5G	体部破片	灰褐・浅黄橙	外面平行叩き目	外面煤付着
33	甕	6H7	体部破片	にぶい黄橙・にぶい黄橙	外面平行叩き目	
34	鍋	沢地部分排土	体部破片	浅黄橙・にぶい橙	外面上ロクロナデ、下平行叩き目	
35	鍋	6H7	口縁部破片	灰白・灰白	ロクロナデ	

第4表 宮平遺跡遺物観察表(3)

須恵器

番号	器種	出土地点・層位	遺存部位・遺存率	色調(外)・(内)	調 整	備 考
36	甕	SD1・覆土上層	頸部破片	暗灰・灰	外面横ナデ後、5本1単位楕描波状文	
37	甕	SE15・覆土下層	体部破片	暗オリーブ灰・オリーブ灰	外面平行叩き、内面同心円叩き	
38	甕	SD2・覆土上層	体部破片	灰・灰	外面擬格子叩き、内面同心円叩き	粘土紐のつなぎ目あり
39	甕	SE18・覆土4層	体部破片	暗灰・灰	外面平行叩き後ナデ、内面同心円叩き	
40	甕	5G21	体部破片	暗オリーブ灰・灰	外面平行叩き 内面同心円叩き	
41	甕	5G25	体部破片	暗灰・灰	外面平行叩き後ナデ、内面同心円叩き後ナデ	
42	甕	4F7・12	体部破片	オリーブ灰・オリーブ灰	外面平行叩き、内面同心円叩	外面自然釉多くかかる
43	甕	6H7	体部破片	暗オリーブ灰・オリーブ灰	外面平行叩き、内面同心円叩き	外面自然釉かかる
44	甕	5G	体部破片	灰・灰	外面平行叩き、内面同心円叩き	
42	甕	5G	体部砂片	灰・灰	外面格子目叩き、内面格子目叩き後ナデ	
46	長頸瓶	SE18・覆土1層	肩部破片	暗灰・灰	ロクロナデ	外面自然釉かかる

第5表 宮平遺跡遺物観察表(4)

珠洲焼

番号	器種	出土地点・層位	遺存部位・遺存率	色 調 (外)・(内)	調 整	備 考
47	播鉢	6H11	口縁部破片	灰・灰	内外面ロクロナデ	内面おろし目あり、内外面ロクロナデの凹凸激しい
48	播鉢	2C25・I層	口縁部破片	灰・灰白	内外面ロクロナデ	内外面おろし目あり
49	播鉢	1E・表採	体部下半破片	オリーブ灰・暗オリーブ灰	内外面ロクロナデ	
50	甕	SE11・覆土上層	口縁部破片	灰・灰	外面下平行叩き目、上ヨコナデ、内面下無文押圧痕後ヨコナデ、上ヨコナデ	
51	甕または壺	5G	体部破片	灰・灰白	外面平行叩き目、内面無文押圧痕	
52	甕	SE18・覆土4層	体部破片	明紫灰・明紫灰	外面平行叩き目、内面無文押圧痕後弱い横ナデ	粘土紐つなぎ目あり
53	甕または壺	5E15	体部破片	灰・灰	外面平行叩き目、内面無文押圧痕	
54	甕	5G	体部破片	灰白・灰白	外面すだれ状叩き目、内面無文押圧痕	内外面器壁の剝離著しい

その他の陶磁器

番号	器種	出土地点・層位	遺存部位・遺存率	色 調 (外)・(内)	調 整	備 考
55	灰釉陶器・平椀	2C19	口縁部破片	明緑灰・明緑灰	内外面ロクロナデ	内面及び外面口縁部付近に灰釉
56	唐津焼?・皿	SD33・覆土	口縁部破片	緑灰・緑灰	内外面ロクロナデ	内外面灰釉
57	越中瀬戸・皿	5G14・15・19・20	体部の底部破片	褐・褐	内外面ロクロナデ	削り出し高台。内外面の体部に鉄釉
58	伊万里焼・椀	2A3	体部～底部破片	灰白・灰白	内外面ロクロナデ	内外面釉。呉須は青色。いわゆる広東椀
59	伊万里焼・椀	5G12	口縁部破片	灰白・灰白	内外面ロクロナデ	内外面釉。呉須は緑灰色

第V章 自然科学の分析調査

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

宮平遺跡は、東頸城郡浦川原村に位置する遺跡で、平安時代～中世の集落跡が検出されている。今回は、平安時代の井戸(SE 13)から出土した炭化材を用いて井戸の年代を確認するとともに、種実遺体の種類を知り、当時の植物に関する情報を得ることを目的として分析調査を行った。

2. ^{14}C 年代測定

A. 試料

試料は、SE 13から出土した炭化材1点である。

B. 測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室の協力を得た。

年代値の算出には、 ^{14}C の半減期として LIBBY の半減期5570年を使用した。また、付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 δ に基づいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代である。また、試料の β 線計数率と自然計数率が 2δ 以下のときは、 3δ に相当する年代を下限の年代値(B. P.)として表示した。また、試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が 2δ 以下のときは、Modern と表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記している。

C. 結果

結果は、 490 ± 80 y. B. P. (A. D. 1460 : Gak-18266)で、中世に相当する。

3. 種実同定

A. 試料

試料は、SE 13から出土した種実遺体11点である。

3. 種実同定

B. 方 法

双眼実体顕微鏡下でその形態的特徴から種類を同定した。

C. 結 果

同定の結果検出された種類ならびにその形態的特徴について示す。なお、これらの種実に混じってタケ亜科の早も多数検出されている。

- オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim) Kitamura) クルミ科クルミ属
核の破片が多数検出された。大きさは1 cm程度。側面の両側に縫合線が発達する。表面は荒いしわ状となる。炭化しているため堅くてもろい。

- クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zicc.) ブナ科クリ属
子葉が多数検出された。完形のものは偏円形で大きさは3 cm程度。炭化しており堅くてもろい。

- イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

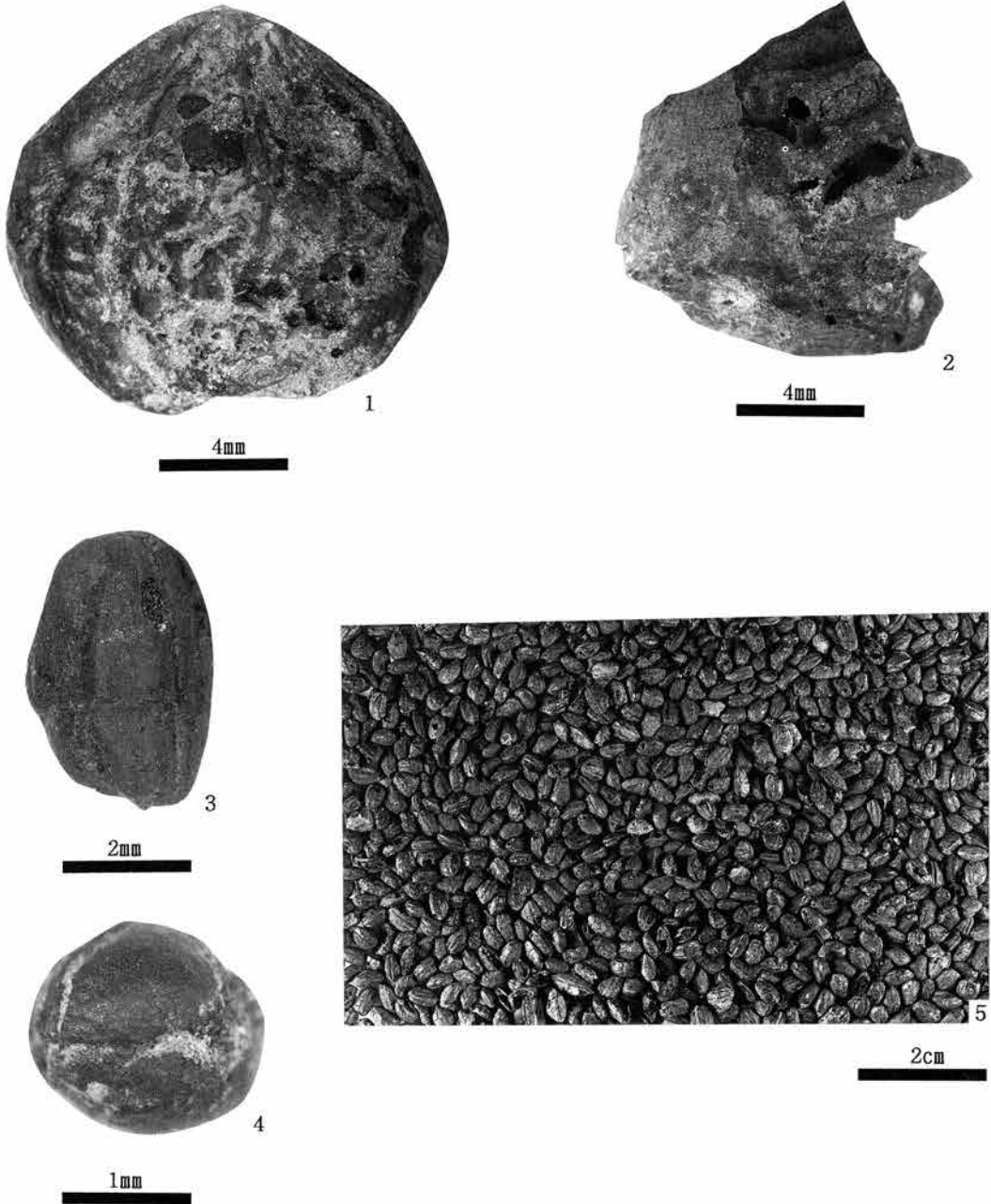
炭化した胚乳が多数検出された。大きさは4 mm程度。胚が位置する部分は欠如し大きく窪んでいる。表面には縦に平行な隆起構造が数本認められる。

- アワ近似種 (*Setaria* cf. *itarica* Beauv.) イネ科エノコログサ属

炭化した胚乳が多数検出された。大きさは1.5mm程度。ほぼ球形である。胚乳の跡が一部欠如しているように見える。

4. 考 察

今回検出されたものはすべて可食植物であり、オニグルミを除く種類は実際食する部位が検出される。さらに、他の炭化物にまじって大量に検出されていることから、おそらく何らかの理由で焼失した残骸を井戸の埋め立てに使ったものと推測される。一方、種子とともに出土した炭化材を用いて¹⁴C年代測定を行ったところ、中世に相当する年代測定値が得られた。これより井戸の埋め方では中世頃と考えることもできる。ただし、本井戸については、出土遺物から平安時代と考えられている。土器類とこれらの炭化材・炭化種子との共伴関係などを吟味する必要がある。なお、今回検出された種実は、いずれも長期貯蔵がきく種類であることから、当時の重要な食料源だったと考えられる。



1. クリ (SE-13)

2. オニグルミ (SE-13)

3. イネ (SE-13)

4. アワ近似種 (SE-13)

5. イネ (SE-13)

第9図 SE13出土の炭化種実遺体

第Ⅵ章 ま と め

遺構・遺物の記述で明らかなように、本遺跡から出土した土器の数は少なく、細片が多い。しかも、多時期にわたる。また、遺構の所属時期も伴出遺物が少なく、不明確なものが多い。したがって、この章では可能な限り他遺跡の発掘調査報告や研究成果を引用し、少しでも遺構・遺物の具体像にせまり、まとめとしたい。

1. 土器について

表面採集品を含め出土遺物数は、縄文土器 3 点(1.5%)、土師器127点(65.5%)、須恵器27点(13.9%)、珠洲焼11点(5.7%)、越前焼 2 点(1.5%)、灰釉陶器 2 点(1.5%)、近世以降の陶磁器22点(11.3%)であり、土師器・須恵器が多く、全体の 8 割を占める。これらの土器の分布は、土師器・須恵器は、5 G 24・25グリッド及び沢地部分からの出土が多く、81%がこの部分に集中する。他の遺物も調査区全体から見れば、E 列グリッドより東側に多い傾向にあるが、出土点数が少ないため、希薄に分布する。また、遺構に伴う遺物は SE 13・SE 18以外に少なく、包含層からの出土が多い。

土師器・須恵器の所属年代については、唯一全体の器形が想定できる土師器無台椀16は、器形・調整等の特徴から10世紀後半から11世紀前半と推定され、同じく篋ケズリの土師器無台椀27は、内面黒色土器でないものの、器形・調整等から9世紀後半頃と思われる。須恵器甕頸部片の36は類似資料が末野窯跡群と呼称される村内の今熊窯跡に認められ(坂井1984)、この窯跡の存続が8世紀末葉～9世紀中葉とされている(小島ほか1983・坂井1988)。これ以外の土師器・須恵器については、細片が多く不明確であるものの、所属時期の手がかりとして、

- ①土師器が須恵器に比べ圧倒的に多く、土師器127点のうち椀等の食膳具が103点(81.1%)で多く、甕・鍋等の煮炊き具が12点(9.4%)と少ない。
 - ②須恵器の食膳具である杯が1点も出土せず、長頸瓶・甕の貯蔵具で占められる。このうち、45の甕、46の長頸瓶は胎土から佐渡小泊産の須恵器と思われる。
 - ③内面黒色土器が土師器無台椀 2 点、有台椀 1 点で少ない。
 - ④土師器の小型皿がなく、土師器有台椀が1点である。
- ことなどが指摘される。

平安期における頸城地方の土器様相については、次のような事柄が近年明らかになりつつある。9世紀後半には食膳具における土師器が激増し、須恵器食膳具が減少し、10世紀後半には

消滅する〔坂井前掲〕。佐渡小泊産須恵器は9世紀中葉～10世紀初頭に大量生産され、越後国内でも無台杯・甕長頸瓶が多く供給されること。その存続として佐渡の消費遺跡の例から、10世紀後半以降少量ではあるが須恵器長頸瓶・甕が出土し、食膳具がほとんど確認できなくなる〔坂井ほか1991〕。内面黒色土器は10世紀後半から11世紀前半頃にかけてあまり目立たなくなり、再び目立つようになるのは11世紀中葉から後半にかけてである〔坂井1990〕。11世紀中葉から後葉または11世紀前半から中葉に比定されている上越市一之口遺跡河川跡の土器は小型の皿・杯・椀、有台椀であり、有台椀が一定量存在していることである〔坂井前掲・田海1985・品田1991〕。

このような指摘から推測すれば、本遺跡で多くを占める土師器無台椀は、細片が多いものの、その多くは10世紀後半から下っても11世紀前半頃のものと思われ、これ以外の土師器の甕・鍋、須恵器片は時期幅を広く見ても9世紀から11世紀前半に含まれるであろう。

珠洲焼・越前焼・灰釉陶器は出土数がさらに少なく、細片である。しかし、既述のように珠洲焼播鉢の47が14世紀、48が13世紀後半、甕の50が14世紀に比定できることから、他の土器片も確証はないものの、同時期またはこれ以降に所属するものと思われる。

2. 遺構について

検出された遺構は、掘立柱建物5棟、井戸6基、土抗12基、溝5本、不明遺構2基、ピット183基であり、その分布は掘立柱建物、井戸等の生活に深く関連する遺構は、E・F列グリッドより東側に多い。しかも、調査区の北側に片寄り、法線外に延びる遺構もある。つまり集落の中心は、F～H列グリッドの北側法線外にあったもの、または沢沿いにあったものと推定される。このことは前述の遺物の分布等や沢地部分の遺物の出土状態から、上流からの流れ込みも考えられることから裏付けられる。

遺構種別ごとに見ると、掘立柱建物のうち3棟は、法線外に延び大きさ等は不明確である。伴出遺物がなく時期は不明としたものの、位置・主軸方向・柱穴規模・柱穴覆土等から3グループに分けられる。

①SB 4、②SB 22～24、③SB 35である。①は調査区のもっとも西側にあり、柱穴規模は②・③より大きく深いものの、覆土にしまりがなく、他の遺構とは明らかに異なることから中世まで遡らないと思われる。②は調査区の最も東側に存在し、3棟がいずれも近くにあり、主軸方向もほぼ同じ。柱穴規模はSB 24がやや小さいものの、覆土はほぼ同じ。③は調査区中央やや東寄りにあり、主軸方向が②と大きく異なりほぼ直交する。柱穴規模もやや小さく、東西に廂の可能性のある構造をとる。

これらのグループの所属時期は、上記の特徴や調査区での時期別の遺物の出土数、分布等から比較すれば、②SB 22～24は平安時代の掘立柱建物、③SB 35は中世の掘立柱建物、①SB 4は

2. 遺構について

遡ったとしても近世とするのが現時点では妥当と思われる。

井戸は6基検出されているが、伴出遺物からSE 11・SE 18が中世、SE 15が平安時代と推定される。SE 13は¹⁴C年代測定より中世という結果が出ている。SE 12は覆土の様子がSE 13に近似することから中世と推定される。SE 16は規模・位置等から考えると、平安時代とするのが妥当である。

溝は5本検出したが、SD 10は近代以降と考えられ、SD 3は規模が小さいため除外する。SD 1・2は既述のように位置・形状・方向・覆土等から同一時期・同一性格の溝と推定され、しかも西側の崖に沿って構築されている。この溝は連続せず3.4m程途切れ土橋状になっている。また、丘陵上に位置することや地山が水はけの良いことから水を流したり、溜めたりする溝と考えられない。SD 33は規模はSD 1・2に比べやや小さいものの、形状に共通点が多く、調査区外の南西部で連続する可能性もある。しかも、SD 33の構築されている部分は遺跡の立地している丘陵上で最も狭くくびれている部分である。これらの溝の時期については、伴出遺物が少なく、SD 33では覆土より16世紀末の唐津焼と思われる皿の破片が出土しているのみである。覆土内の出土位置・層位が問題になるが不明である。しかし、SD 1・2・33からはこれ以降の近世陶磁器片が出土していないことから、溝の所属時期は16世紀末以前の中世と推定される。また、溝の性格は、掘立柱建物等の中世の遺構が必ずしも明確でない、溝の時期決定の根拠が弱いなど問題点もあるが、前述のことから溝を集落に伴う区画溝または空堀、土橋状の部分は^{註1)}出入口と推定しておきたい。

3. SE 13の¹⁴C年代測定の結果について

SE 13は5 G 25グリッドにある楕円形で素掘りの井戸である。調査中から整理段階を通して平安時代の井戸と推定してきた。その根拠として、人為的に埋め戻された1層から土師器椀(16)が出土し、器形・調整等の特徴から10世紀後半から11世紀前半に推定されること。井戸周辺からも土師器片・須恵器片が他のグリッドより多く出土していたことである。炭化種実も多く認められ、より絶対年代を明らかにするため¹⁴C年代測定を試みた。結果は490±80 y. B. P (A. D. 1460)であり、井戸の埋め立てが中世とされた。

したがって、時期決定の決め手となった土師器椀(16)については、井戸埋め立て時の埋土に混入したものと推定する。また、井戸周辺に見られた土師器片・須恵器片については、平安時代と中世の集落跡の生活の場(水場)が重複していたというふう理解したい。

当然のことではあるが、遺跡の周辺部で遺物が少なく、しかも遺構に伴う遺物が少ない場合の時期決定に対しては、より慎重に対処してゆかなければならない。反省材料にし今後に生かしたい。

註1) 明治33年の土地更正図にはSD 1・2と西側の崖の間には道がある。ただし、この道が中世から存在したかどうかは不明である。

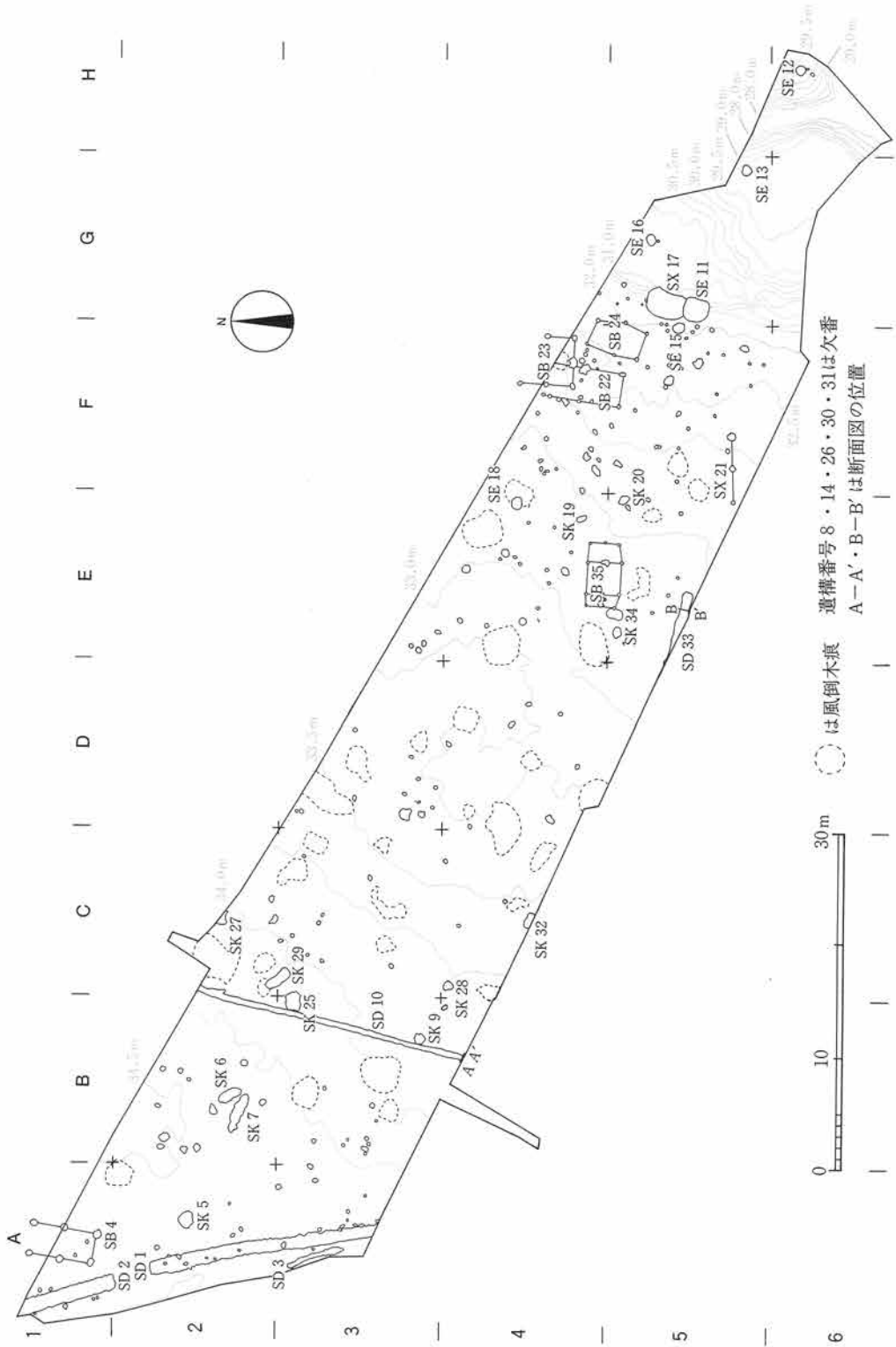
要 約

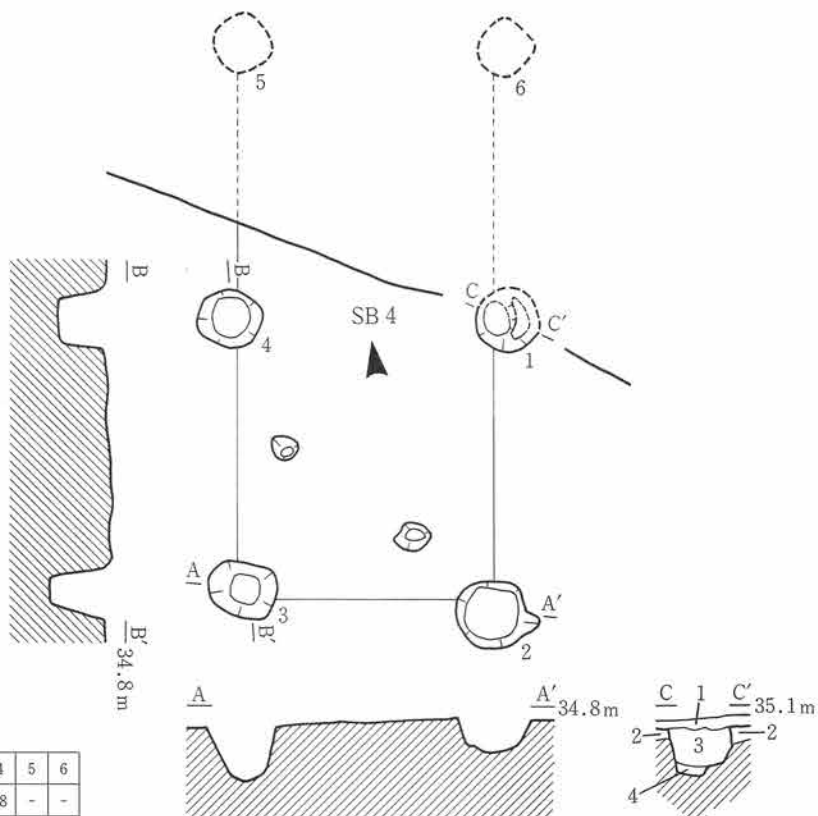
1. 宮平遺跡は新潟県の南西部、東頸城郡浦川原村大字横川字宮平240番地ほかに所在する。遺跡は保倉川によって形成された谷合いの丘陵平坦面に立地し、標高約33mを測る。古代にあっては国府の置かれた越後国頸城郡内に含まれる。
2. 調査は地方鉄道新線北越北線の建設に伴い、昭和63年7月から9月にかけて実施した。調査面積は、鉄道建設用地の幅約24m、長さ約130m、面積2,628m²である。
3. 調査の結果、縄文時代・平安時代・中世・近世以降の遺構・遺物が検出された。その多くは平安時代・中世の遺構・遺物と推定され、主体は平安時代・中世の集落跡である。
4. 遺構は掘立柱建物5棟、井戸6基、土抗12基、溝5本、不明遺構2基、ピット183基である。このうち掘立柱建物4棟、井戸6基、溝3本は、平安時代・中世の遺構と推定される。また、遺構・遺物の分布等から遺跡は調査区の北側に広がる。
5. 遺物は縄文土器3点、土師器127点、須恵器27点、珠洲焼11点、越前焼2点、灰釉陶器2点、近世以降の陶磁器22点、石器12点、礫50点、鉄滓1点、炭化材、炭化種実等である。土器は細片が多いものの、土師器の大半を占める無台椀は10世紀後半から11世紀前半頃の時期と思われる。他の土師器・須恵器も9世紀から11世紀前半に含まれる。中世の珠洲焼で時期が推定できるものは、13世紀後半から14世紀に比定される。
6. 井戸SE13は、炭化材の¹⁴C年代測定により490±80(A. D. 1460 : Gak-18266)という結果が出ている。また、炭化種実の同定では、多くのイネ、オニグルミ、クリ、アワ近似種が認められている。

引用・参考文献

- ウ 浦川原村史編纂室 1984 『浦川原村史』 浦川原村役場
- オ 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1989 『考古学ライブラリー55 肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社
- カ 春日真実 1991 「古代佐渡小泊窯における須恵器の生産と流通」『新潟考古学談話会会報』第8号 新潟考古学談話会
- コ 小島幸雄・秦 繁治・水沢省吾 1983 「末野古窯跡群」『新潟県文化財調査年報第22 保倉川流域』新潟県教育委員会
- サ 坂井秀弥・木村宗文・戸根与八郎・折井 敦・北村 亮・山本 肇・田海義正・鈴木俊成・田辺早苗 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・寺崎裕助・高橋 保・田海義正・田辺早苗 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集 一之口遺跡西地区』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・金沢道篤・田辺早苗 1987 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集 番場遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1988 「越後・佐渡における古代土器の生産と流通—8～10世紀を中心として—」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 坂井秀弥 1990 「越後における古代末・中世の土器様相と画期」『シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」』シンポジウム実行委員会
- 坂井秀弥 1990 「越後平安期土器編年素描—西南部頸城地方を中心にして—」『東国土器研究』3 東国土器研究会
- 坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実 1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
- 坂井秀弥 1991 「絵図に見る城館と町」『中世の城と考古学』新人物往来社
- シ 品田高志 1991 「越後における古代・中世の漆器—漆器食膳具を中心にして—」『新潟考古学談話会会報』第7号 新潟考古学談話会
- ス 鈴木郁夫 1980 「地形分類図」『土地分類基本調査高田東部 5万分の1』新潟県農地部
- タ 高橋 保・高橋保雄・茂田井信彦・藤巻正信・北村 亮 1992 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 五丁歩遺跡・十二木遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋義彦 1931 『越佐史料』巻2
- 田口昭二 1983 『考古学ライブラリー17 美濃焼』ニュー・サイエンス社
- ト 東京大学史料編纂所 1983 『越後国絵図』（頸城郡）東京大学出版会
- 東京大学史料編纂所 1987 『越後国絵図』釈文・索引・解題 東京大学出版会
- 田海義正 1985 「一之口遺跡4区 河川跡出土遺物」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第38 57年度発掘調査・池田遺跡』新潟県教育委員会
- ニ 新潟県 1982 『新潟県史』資料編3
- 新潟県 1986 『新潟県史』通史編1

- 新潟県教育委員会 1992 『新潟県歴史の道報告書』第3集 松之山街道
- ハ長谷川正 1988 「地形・地質」『大潟町史』大潟町史編さん委員会
- 花ヶ前盛明 1984 「中世の山城」『浦川原村史』浦川原村役場
- ホ北陸建設弘済会 1981 『新潟県平野部の地盤図集（柏崎・高田平野編）』社団法人北陸建設弘済会
- マ松代町史編纂委員会 1989 『松代町史』下巻 松代町
- ミ宮田進一 1988 「越中瀬戸の窯資料(1)」『大境』第12号 富山考古学会
- ヤ安田良栄・森 英典 1988 「越中瀬戸四百年の変遷 須恵の里」『越中瀬戸発祥四百年記念誌』越中瀬戸焼発祥四百年記念顕彰会実行委員会
- ヨ横山勝栄・竹田和夫ほか 1987 『新潟県中世城館跡等分布調査報告書』新潟県教育委員会
- 吉岡康暢 1982 「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」『庄内考古学』第18号 庄内考古学会
- 吉岡康暢 1989 『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館



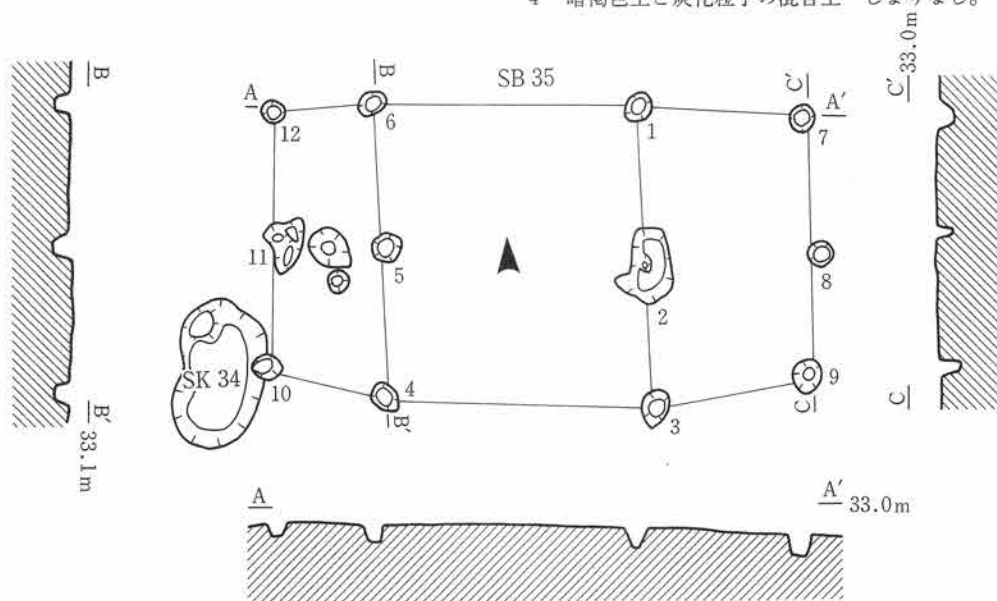


SB4柱穴深度表(cm)

Pit No	1	2	3	4	5	6
深度	42	36	66	58	-	-

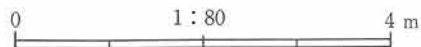
SB4 柱穴 1 土層説明

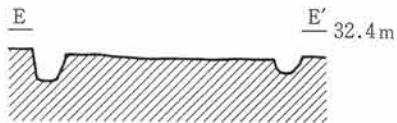
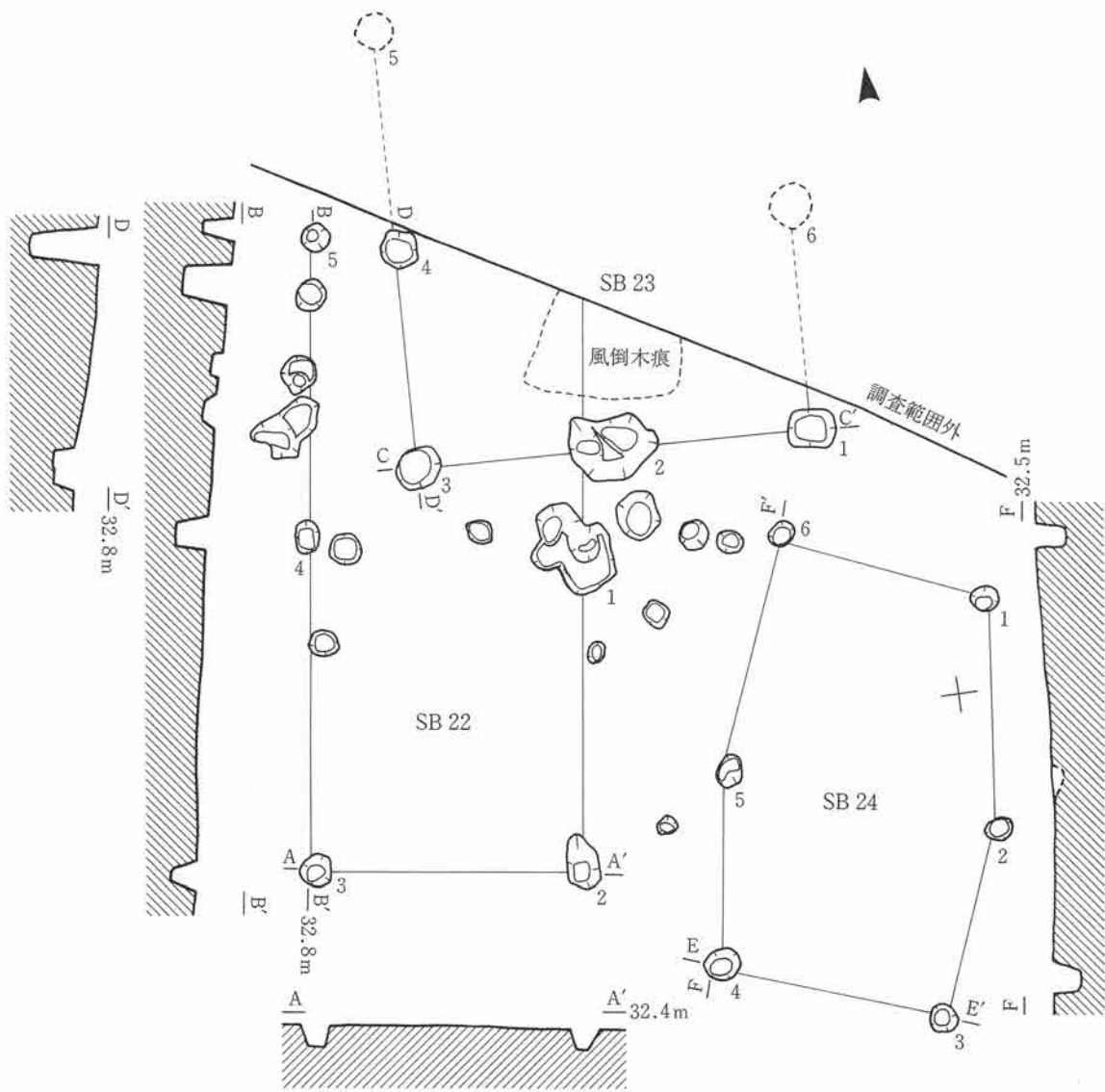
- 1 黒褐色土(基本層序Ⅰ層に同じ)
- 2 暗褐色土(基本層序Ⅲ層に同じ)
- 3 暗褐色土と黄褐色土の混合土 しまりややなし。
- 4 暗褐色土と炭化粒子の混合土 しまりなし。



SB35柱穴深度表(cm)

Pit No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
深度	22	39	20	20	19	19	23	18	21	9	16	16





SB22柱穴深度表 (cm)

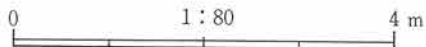
Pit No	1	2	3	4	5
深度	28	13	25	28	34

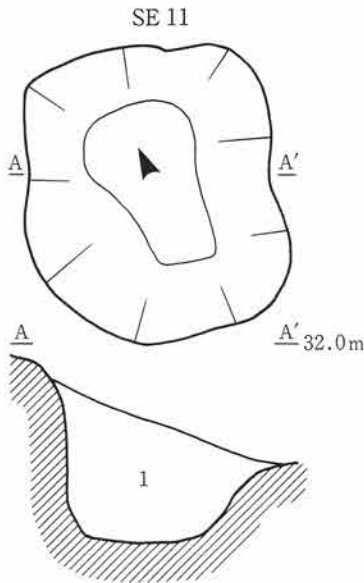
SB23柱穴深度表 (cm)

Pit No	1	2	3	4	5	6
深度	34	26	24	74	-	-

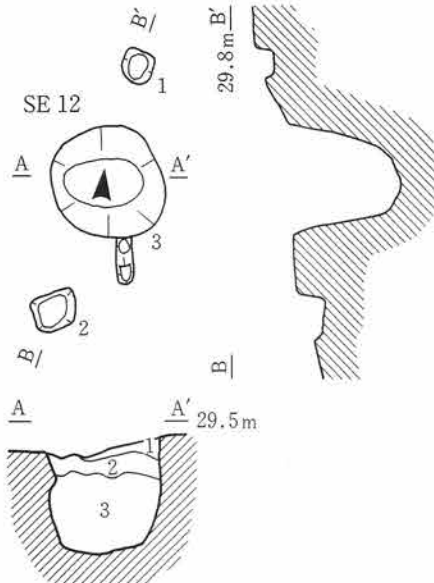
SB24柱穴深度表 (cm)

Pit No	1	2	3	4	5	6
深度	31	29	17	34	16	35





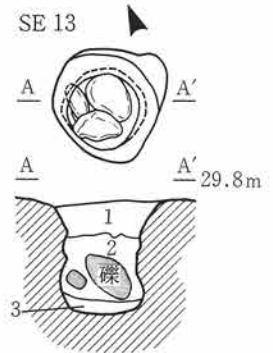
SE 11土層説明
1 黄褐色泥岩 暗褐色土を少量含む。



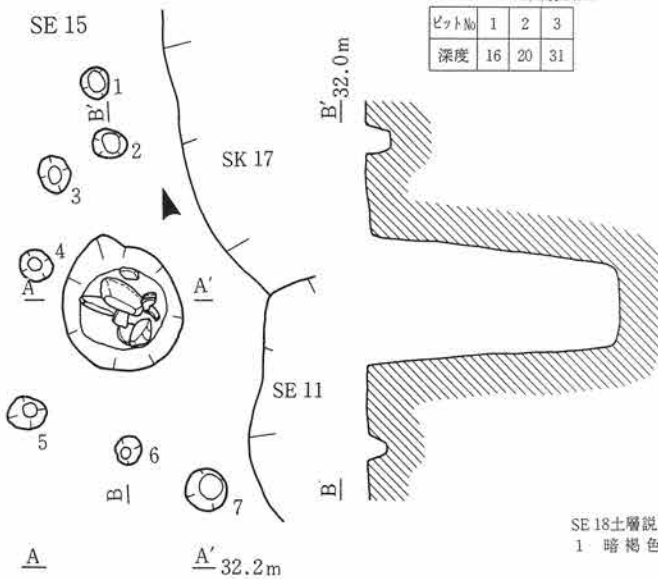
SE 12土層説明
1 暗褐色土 炭化粒子・黄褐色土少量含む。しまりややあり。
2 褐灰色土 黄褐色土少量含む。粘性あり。
3 暗褐色土 粘性あり。

SE12ピット深度表 (cm)

ピットNo	1	2	3
深度	16	20	31



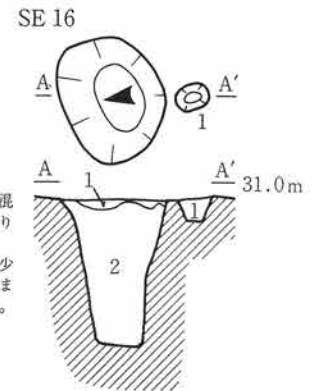
SE 13土層説明
1 黒色土 炭化粒子を多量に含む。酸化のため褐色を呈する部分もある。
2 黒色土 1層に比べ、炭化粒子・炭化物を多く含む。
3 暗青灰色粘土 腐蝕植物土を層状に含む。



SE 15土層説明
1 暗褐色土 黄褐色土を少量含む。しまりなし。
2 暗褐色土と黄褐色土の混合土

SE15ピット深度表 (cm)

ピットNo	1	2	3	4	5	6	7
深度	32	21	25	23	20	16	41



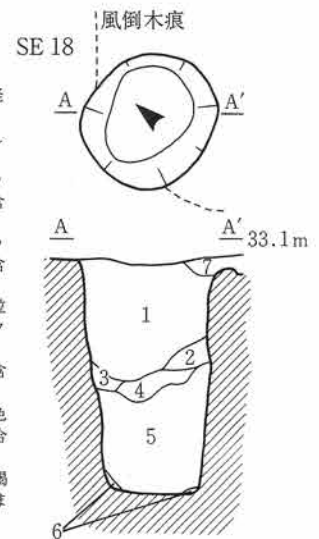
SE 16土層説明
1 暗褐色土と黄褐色土の混合土 しまりややあり。
2 暗褐色土 黄褐色土を少量含む。しまりややあり。

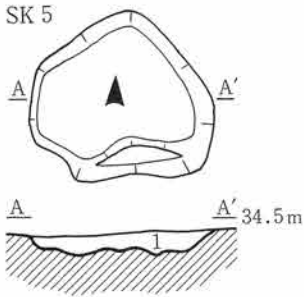
SE16ピット深度表 (cm)

ピットNo	1
深度	19

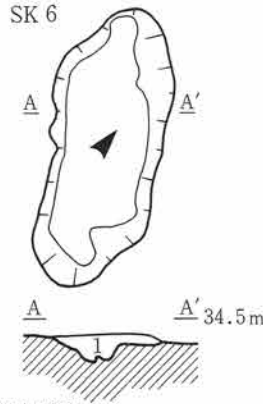
SE 18土層説明

- 1 暗褐色土 黄褐色泥岩粒子(径5mm前後)を含み、特に上層に多い。しまりややなし。
- 2 暗褐色土 淡赤褐色焼土ブロック(径1cm前後)を含む。しまりなし。
- 3 暗褐色土 淡黄褐色焼土ブロック(径5mm前後)を含む。しまりなし。
- 4 淡黄褐色・淡赤褐色焼土 炭化粒子を含む。ブロック状に堆積する。
- 5 暗褐色土 黄褐色土を少量含む。しまりあり。
- 6 暗黄褐色土 ブロック状の黄褐色土も暗褐色土の混合土。崩落土である。
- 7 暗褐色土(風倒木痕覆土) 黄褐色泥岩を含む。しまりあり。

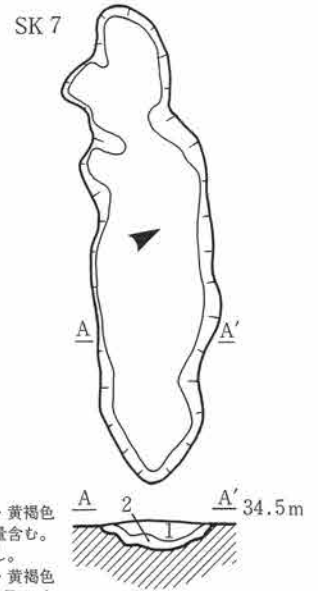




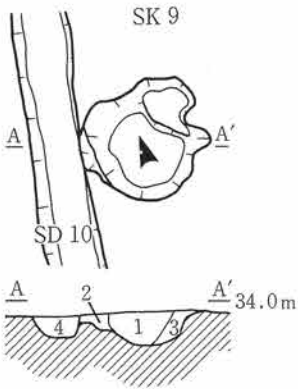
SK 5 土層説明
1 暗褐色土 黄褐色土・黄褐色泥岩を少量含む。しまりなし。



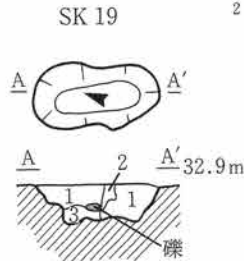
SK 6 土層説明
1 暗褐色土 黄褐色土・黄褐色泥岩を少量含む。しまりなし。



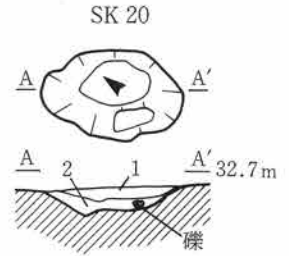
SK 7 土層説明
1 暗褐色土 黄褐色土・黄褐色泥岩を少量含む。しまりなし。
2 暗黄褐色土 黄褐色土・黄褐色泥岩を多量に含む。しまりなし。



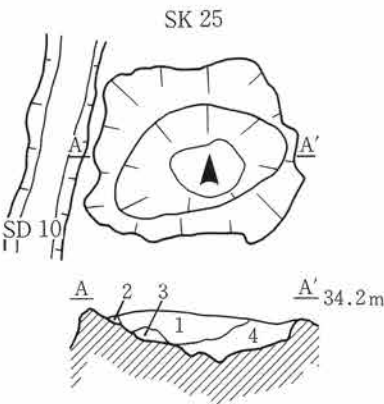
SK 9 土層説明
1 暗褐色土 黄褐色泥岩を含む。
2 褐色土 黄褐色泥岩を含む。
3 褐色土 黄褐色泥岩を多量に含む。2層より明るい。
4 暗褐色土 (SD 10 覆土) 黄褐色泥岩を含む。



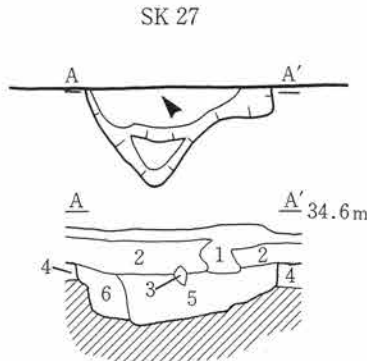
SK 19 土層説明
1 淡褐色土 しまりあり。
2 黒褐色土 (攪乱?) しまりなし。
3 淡褐色土と黄褐色泥岩の混合土。



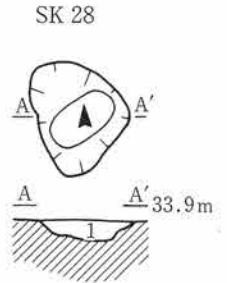
SK 20 土層説明
1 黒褐色土と淡褐色土の混合土
2 淡褐色土 しまりあり。SK 19 の1層に近似する。



SK 25 土層説明
1 暗褐色土 黄褐色泥岩を多量に含む。しまりなし。
2 暗黄褐色土 黄褐色土を多量に含む。しまりなし。
3 暗黄褐色土 黄褐色土・黄褐色泥岩を多量に含む。しまりなし。
4 暗褐色土 黄褐色泥岩粒子を少量含む。1層より暗い。

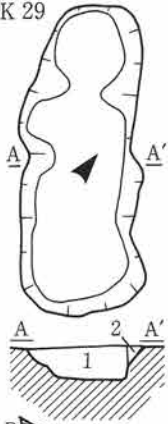


SK 27 土層説明
1 黒褐色土 (基本層序 I 層に同じ)
2 暗褐色土 (基本層序 II 層に同じ)
3 黒褐色土 (攪乱)
4 暗褐色土 (基本層序 III 層に同じ)
5 暗褐色土 2・4層より暗い。黄褐色泥岩粒子を含む。
6 褐色土 黄褐色泥岩粒子を含む。



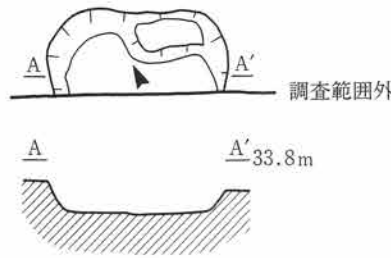
SK 28 土層説明
1 黒褐色土 黄褐色泥岩粒子・炭化粒子を含む。粘性・しまりあり。

SK 29



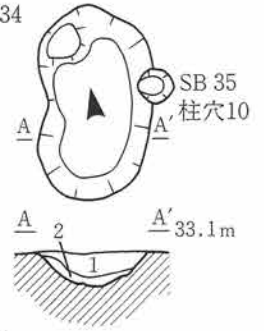
SK 29土層説明
 1 暗褐色土 黄褐色泥岩を少量含む。しまりややあり。
 2 淡褐色土 しまりあり。粘性ややあり。

SK 32

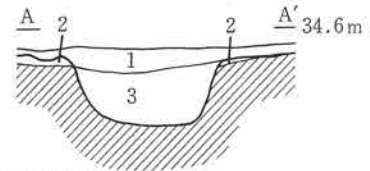
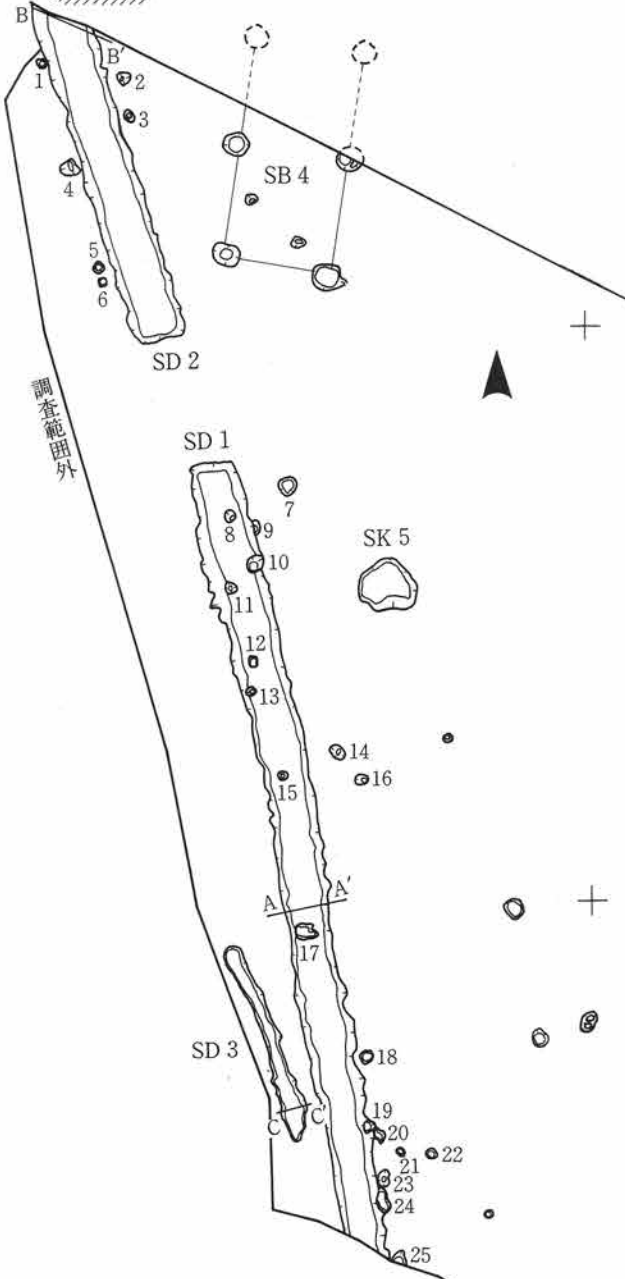


調査範囲外

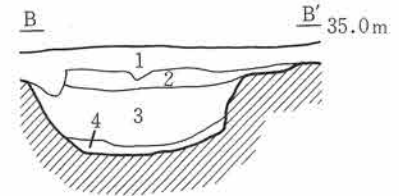
SK 34



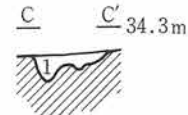
SK 34土層説明
 1 暗褐色土 黄褐色土を少量含む。
 2 暗褐色土と黄褐色土の混合土 黄褐色泥岩を含む。1層に比べ粘性あり。



SD 1土層説明
 1 黒褐色土(基本層序I層に同じ)
 2 黄褐色泥岩に黒褐色土が混じり込む(基本層序IV層に同じ)
 3 暗褐色土 黄褐色泥岩が含まれる。黄褐色土をブロック状に含む。しまりなし。SD 2の3層と同質である。



SD 2土層説明
 1 黒褐色土(基本層序I層に同じ)
 2 暗褐色土(基本層序II層に同じ)
 3 暗褐色土 黄褐色泥岩を含む。黄褐色土をブロック状に含む。しまりなし。SD 1の3層と同質である。
 4 暗黄褐色土 暗褐色土と黄褐色土の混合土。黄褐色泥岩を含む。崩落土である。



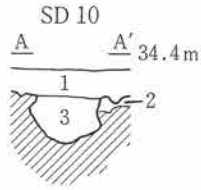
SD 3土層説明
 1 暗褐色土 黄褐色土を少量含む。しまりなし。

SD 1・SD 2ピット深度表(cm)

ピットNo	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
深度	30	31	18	29	33	37	12	15	24	57
ピットNo	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
深度	21	9	11	21	12	21	16	24	43	14
ピットNo	21	22	23	24	25					
深度	13	19	22	20	16					

0 1:200 10m

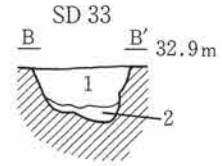
0 1:60 2m



断面図の位置は遺構配置図に図示。

SD 10土層説明

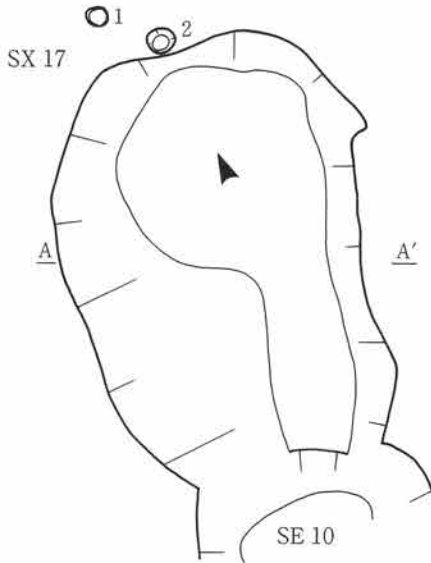
- 1 黒褐色土(基本層序I層に同じ)
- 2 暗褐色土(基本層序III層に同じ)
- 3 暗褐色土 黄褐色泥岩を多量に含む。しまりあり。



断面図の位置は遺構配置図に図示。

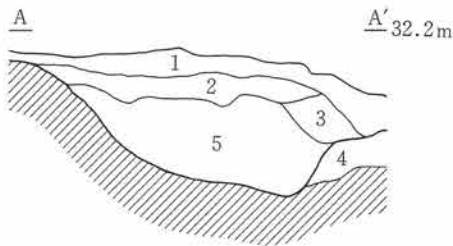
SD 33土層説明

- 1 暗褐色土 しまりなし。
- 2 暗褐色土と黄褐色土・黄褐色泥岩の混合土 1層に比べ粘性ややあり。



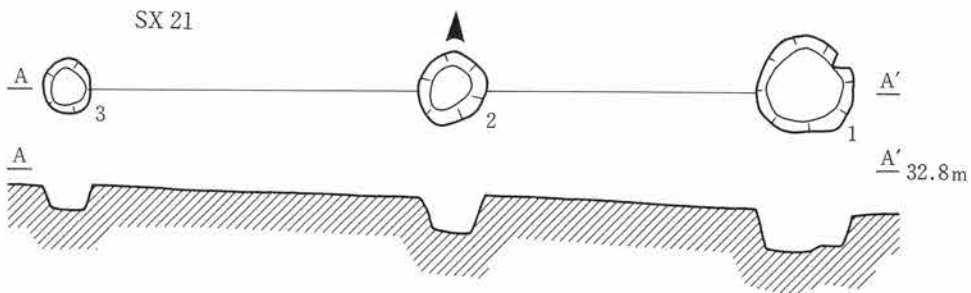
SX17ピット深度表(cm)

ピットNo	1	2
深度	5	28



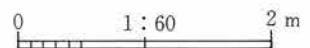
SX 17土層説明

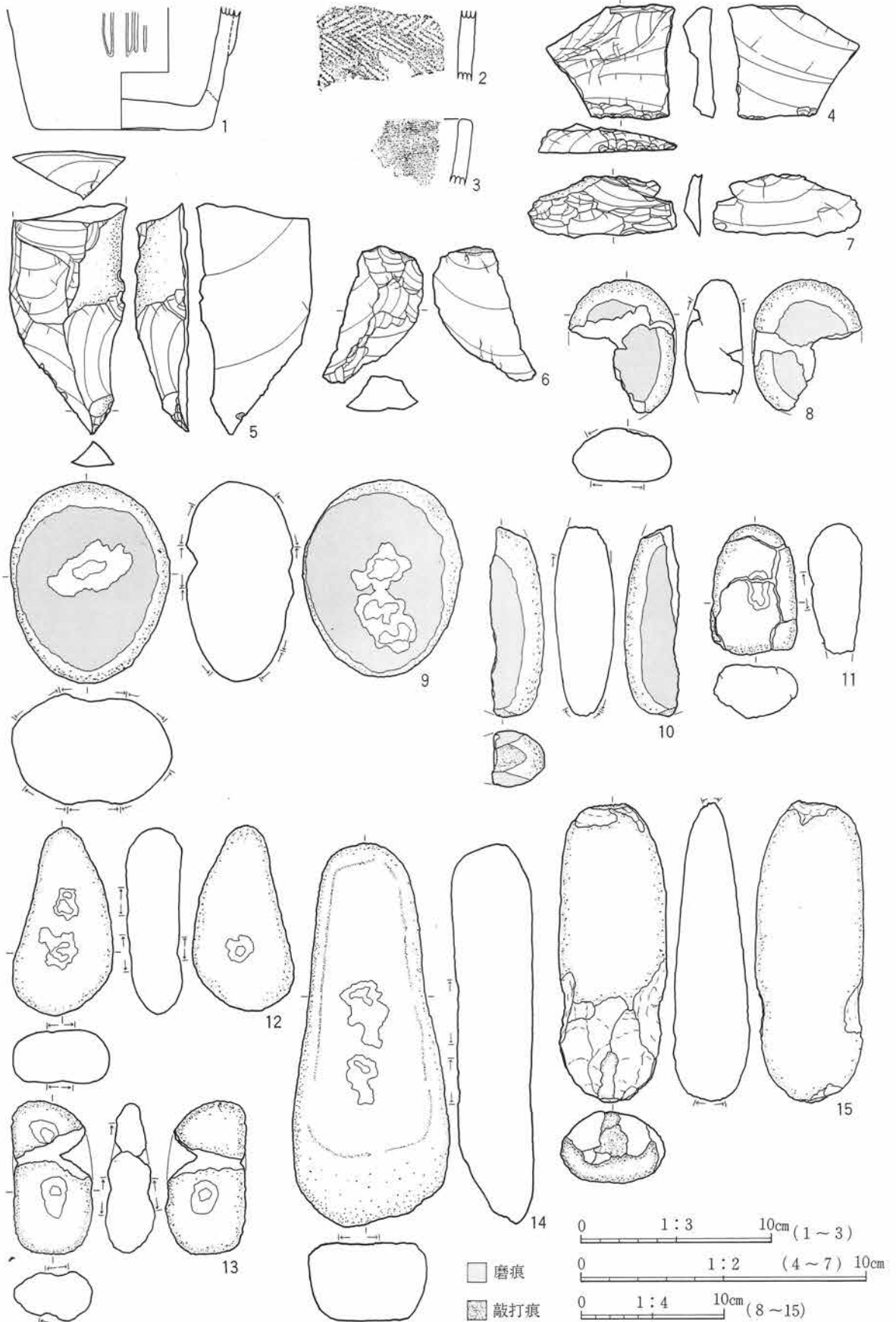
- 1 黒褐色土(基本層序I層に同じ)
- 2 暗褐色土 黄褐色泥岩を少量含む。
- 3 暗褐色土 2層より黄褐色泥岩を多く含む。
- 4 暗黄褐色土(基本層序IV層に同じ)
- 5 黄褐色泥岩と黒褐色土の混合土 埋土である。



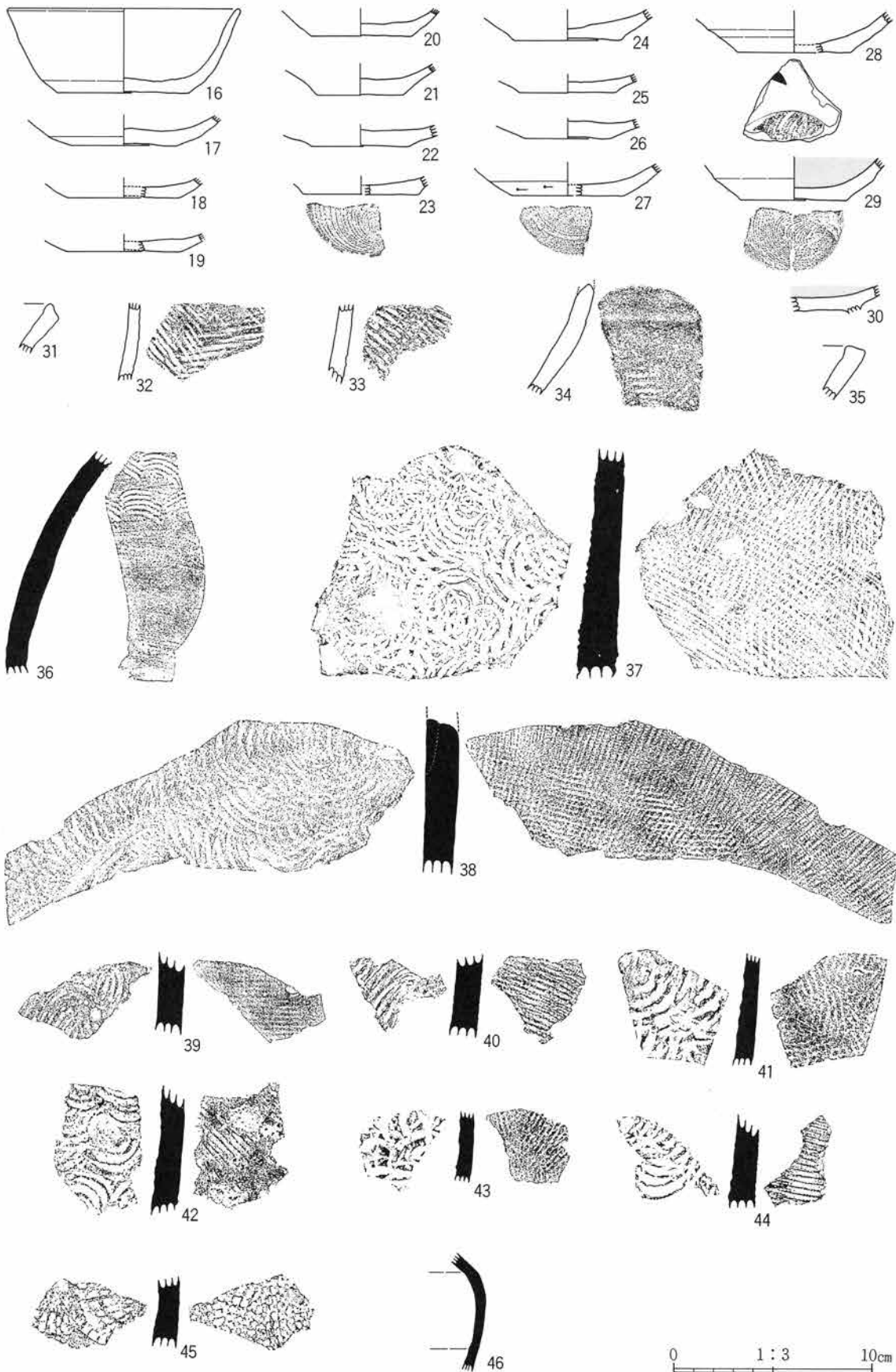
SX21ピット深度表(cm)

Pit No	1	2	3
深度	34	31	22



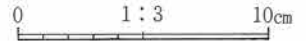
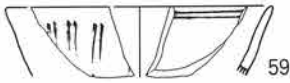
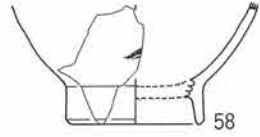
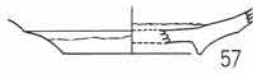
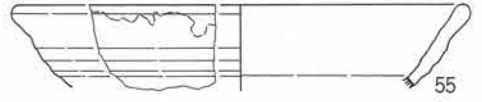
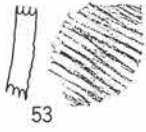
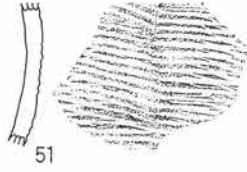
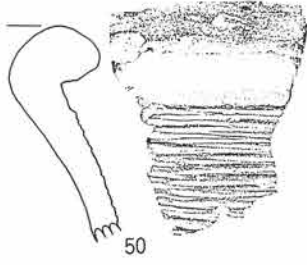
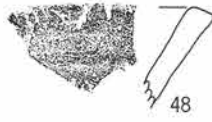


縄文土器(1~3) 不定形石器(4・5) 剥片(6・7) 磨石類(8~13) 台石(8~13) 器種分類不明石器(15)



0 1:3 10cm

土師器 無台碗(16~29)・27は筥削り・28は墨書土器・29は内面黒色土器 有台碗(30)は内面黒色土器
 甕(31~33) 鍋(34・35) 須恵器 甕(36~45) 長頸瓶(46)



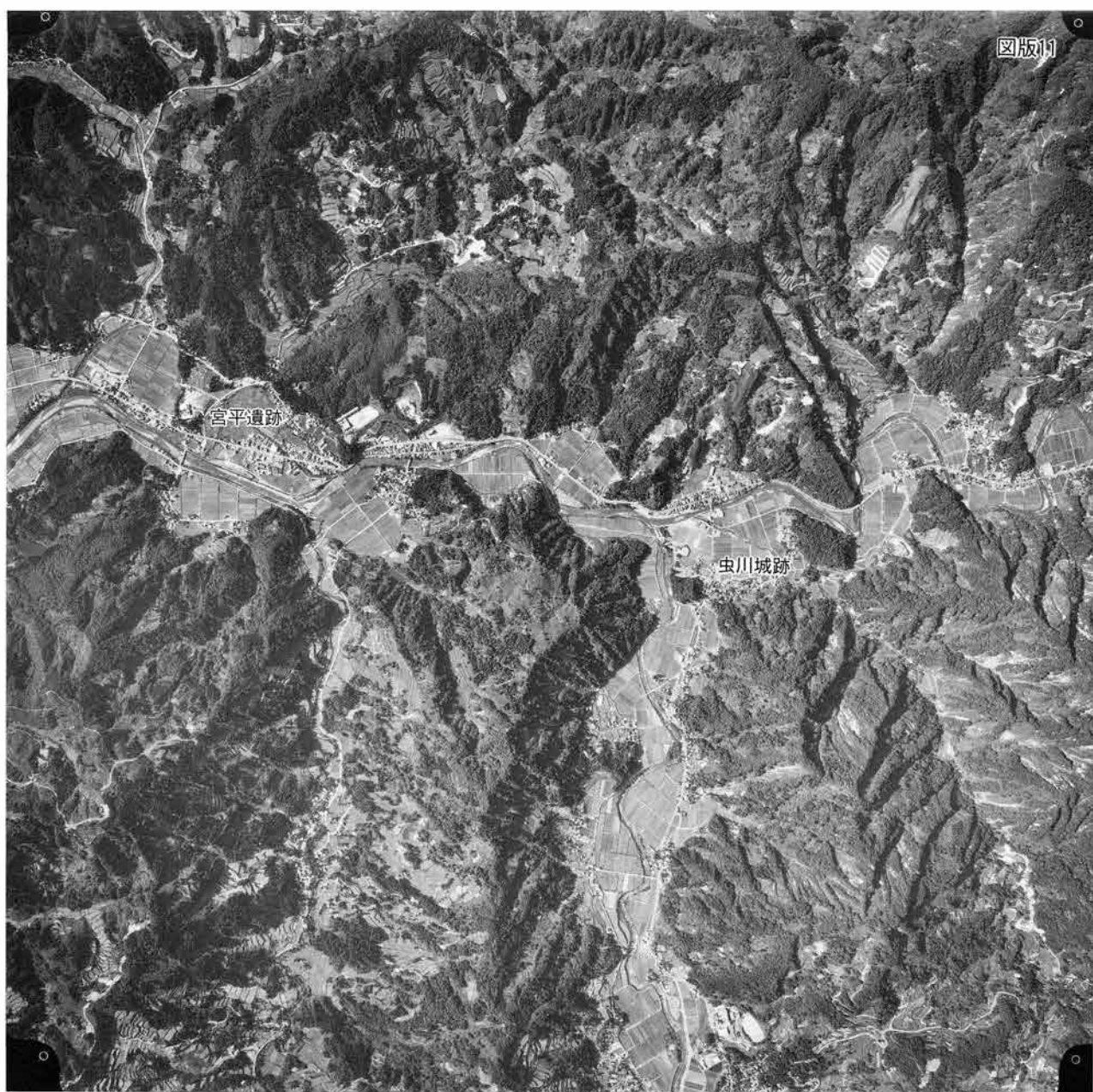
珠洲焼 播鉢(47~49) 甕(50~54)

瀬戸美濃焼 灰釉平碗(55)

唐津焼 小皿(56)

越中瀬戸焼 皿(57)

伊万里焼 碗(58・59)



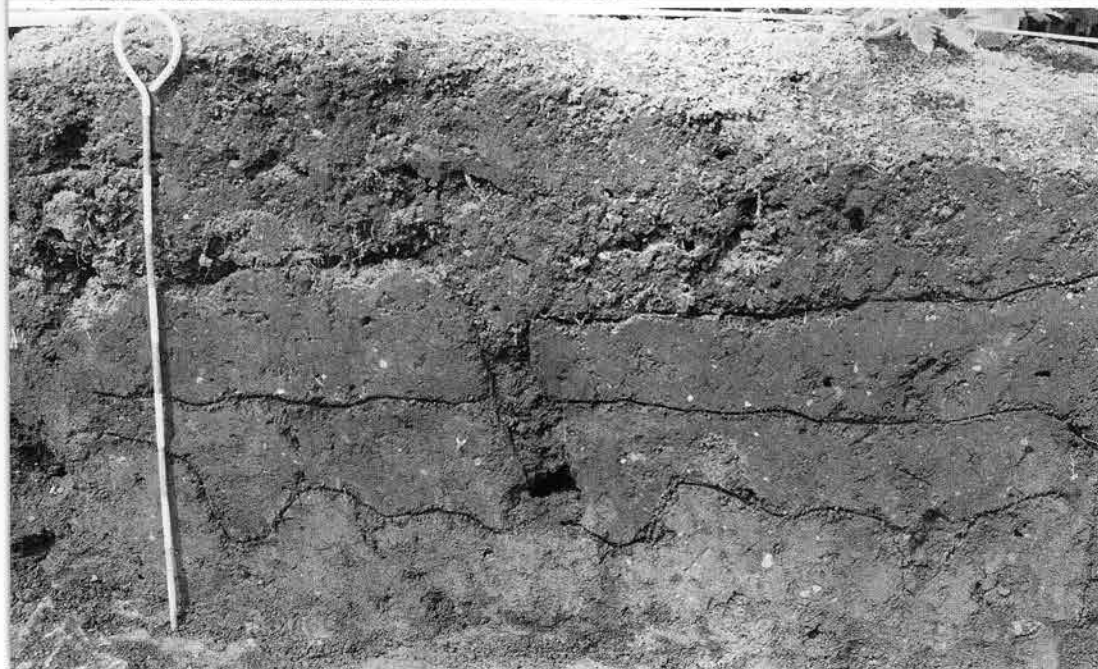
遺跡周辺空中写真
国土地理院1984年撮影



宮平遺跡遠景 東から



宮平遺跡近景
北東から



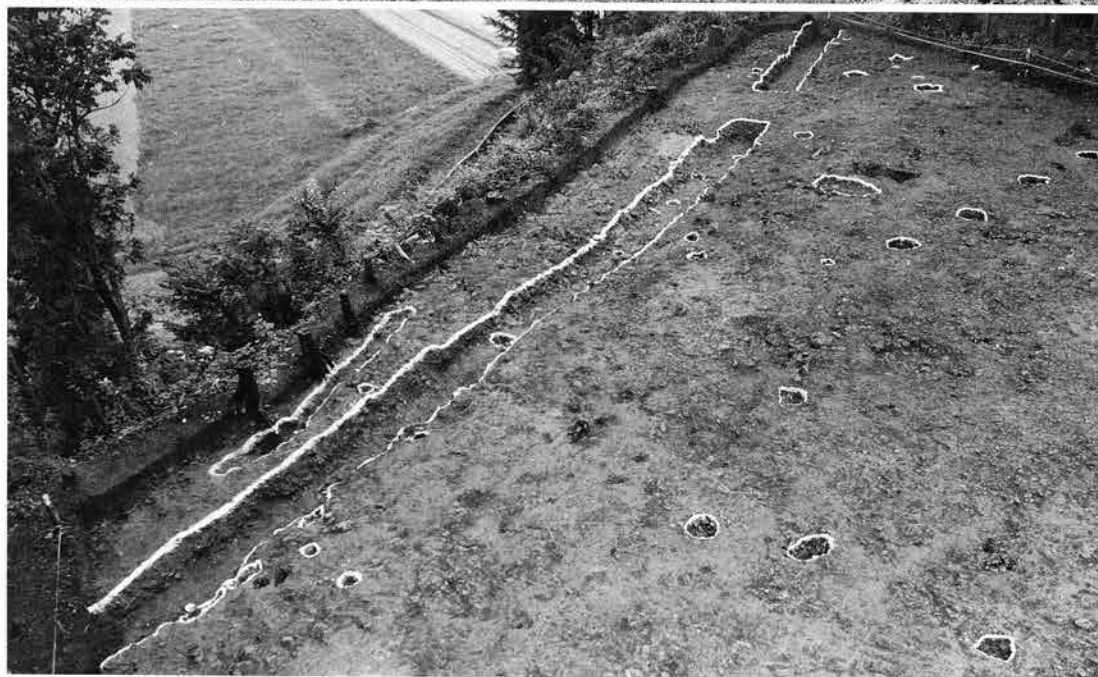
3Eグリッド土層断面
南から



G~H列グリッド沢地
部分土層断面
南から



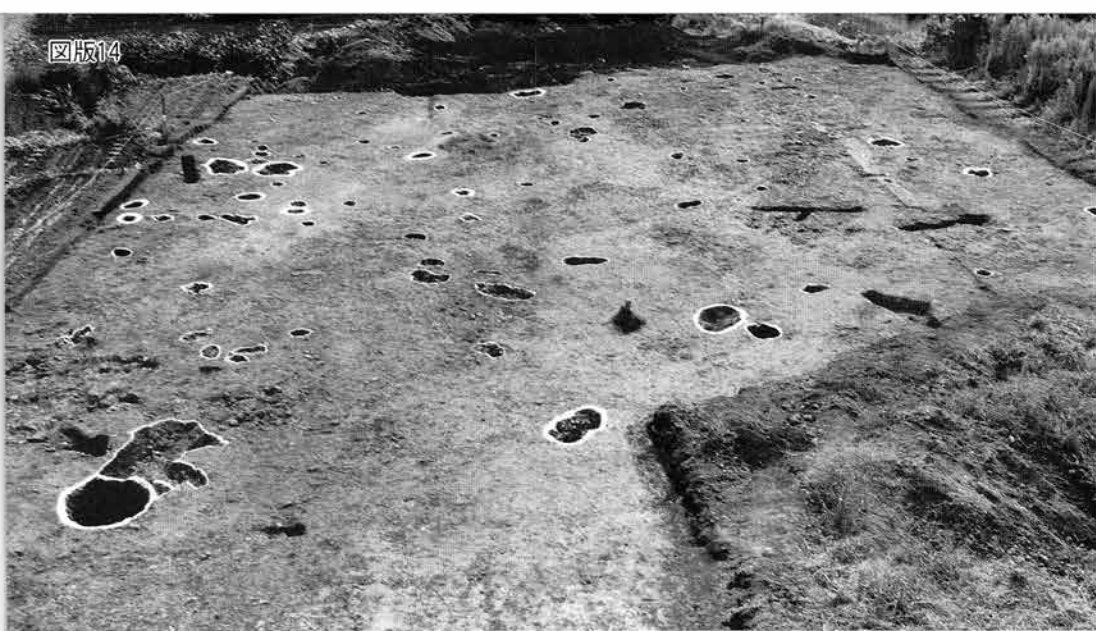
A～E 列グリッド全景
南東から



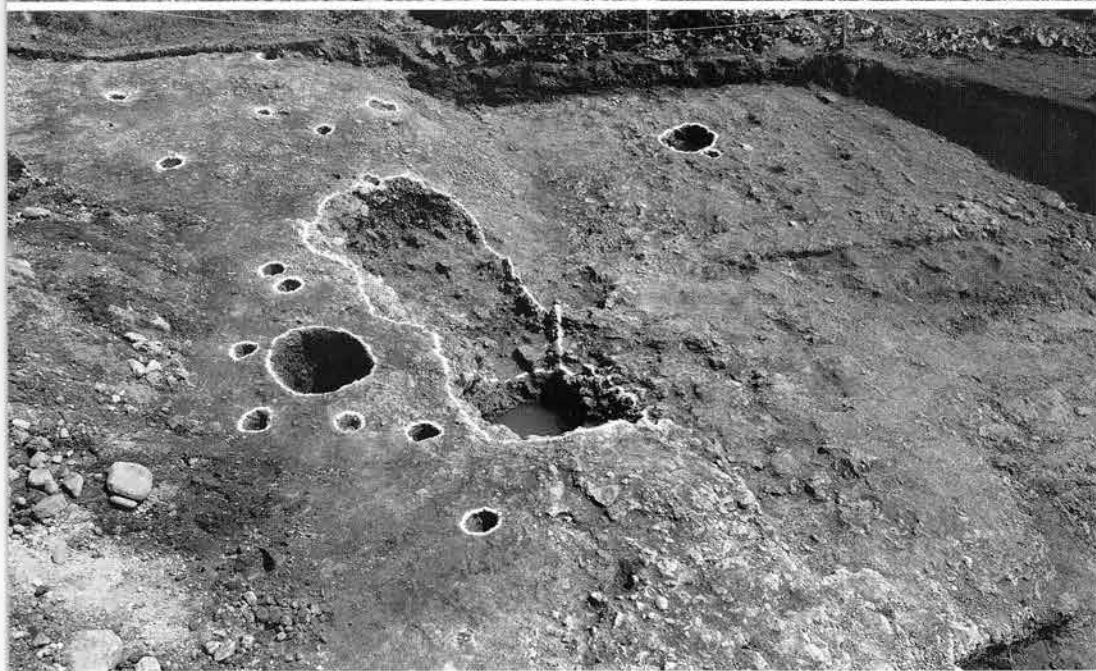
A 列グリッド付近
南東から



E5 グリッド付近
東から



F列グリッド付近
西から



G5グリッド付近
南西から

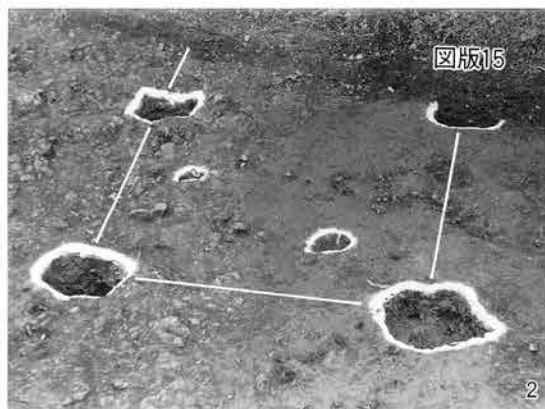


G~H列グリッド付近
西から

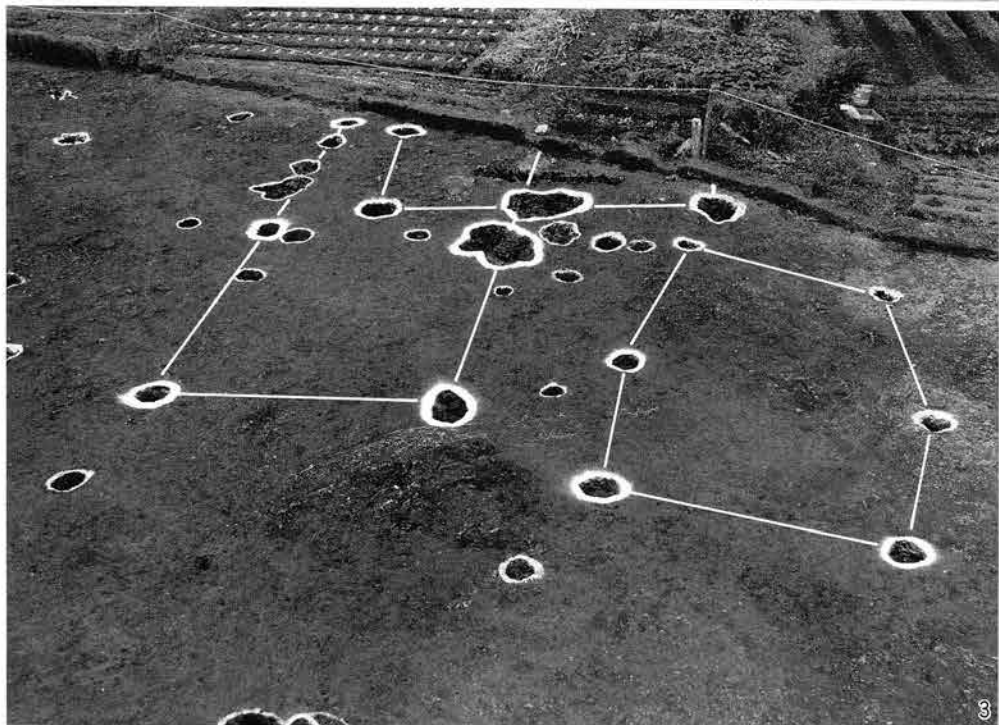
1 SB 4 柱穴 1
土層断面 南から



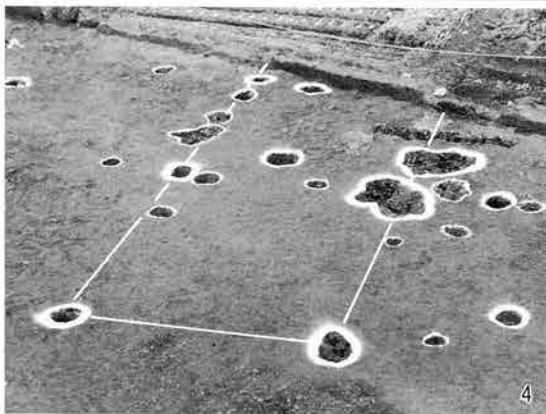
2 SB 4 完掘
南から



3 SB 22・23・24完掘
南から



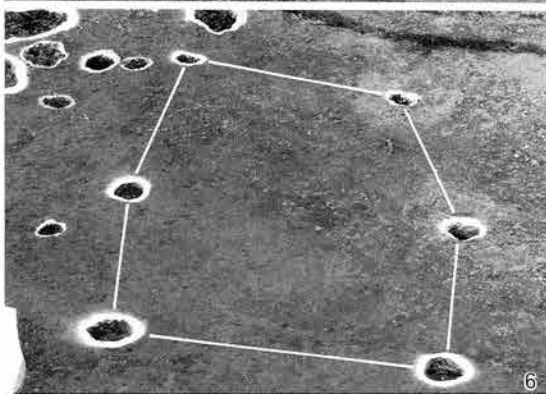
4 SB 22完掘
南から



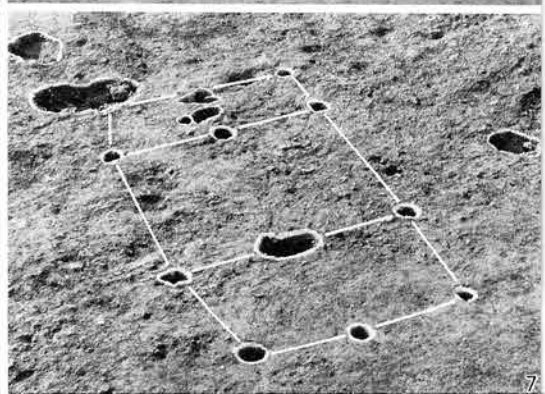
5 SB 23完掘
南から



6 SB 24完掘
南から

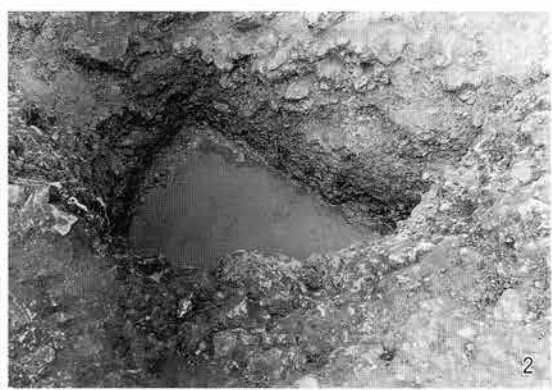


7 SB 35完掘
南から





1



2



3



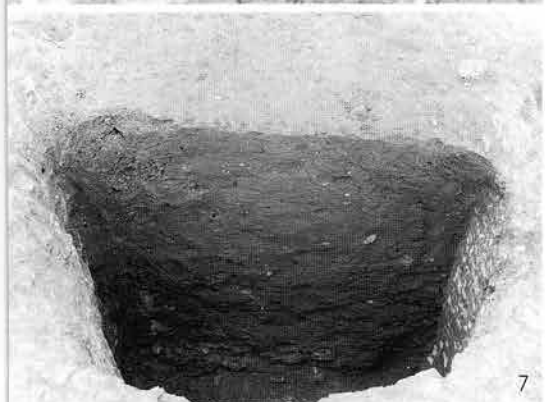
4



5



6



7



8



9



10

1 SE 11土層断面
北から

2 SE 11完掘
南西から

3 SE 12土層断面
南から

4 SE 12完掘
北から

5 SE 13土層断面
南から

6 SE 13完掘
北から

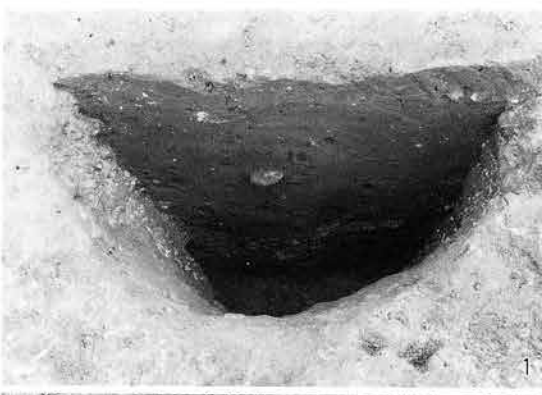
7 SE 15土層断面
南から

8 SE 15完掘
南から

9 SE 16土層断面
南西から

10 SE 16完掘
西から

1 SE 18土層断面
南から



2 SE 18完掘
南から



3 SK 5土層断面
南から



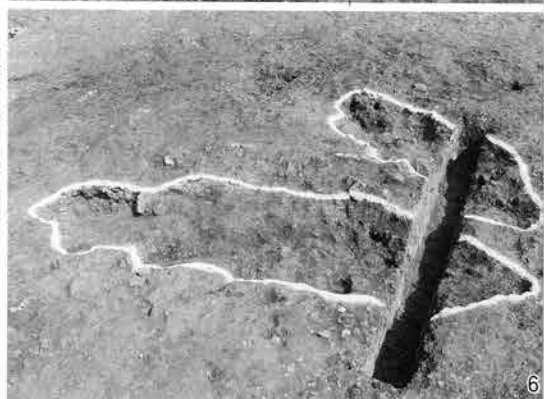
4 SK 5完掘
南から



5 SK 6土層断面
西から



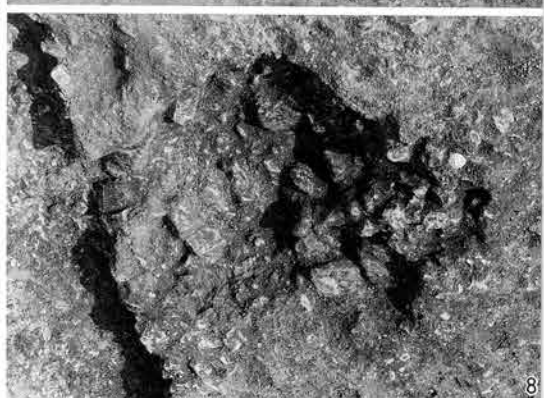
6 SK 6・7完掘
南から



7 SK 9土層断面
南から



8 SK 9完掘
南から

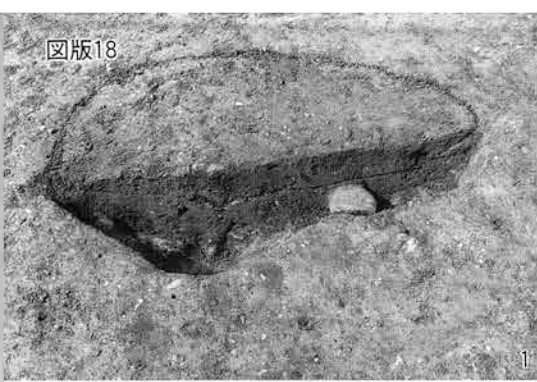


9 SK 19土層断面
南西から

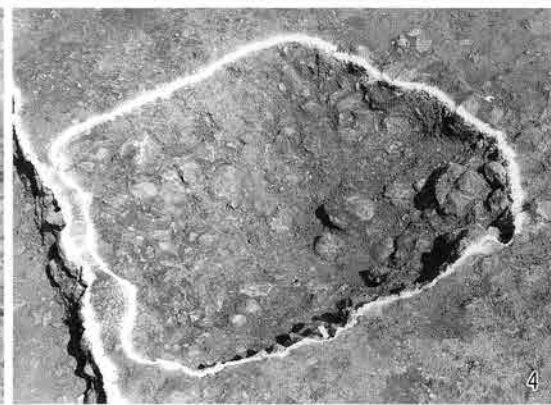


10 SK 19完掘
北東から

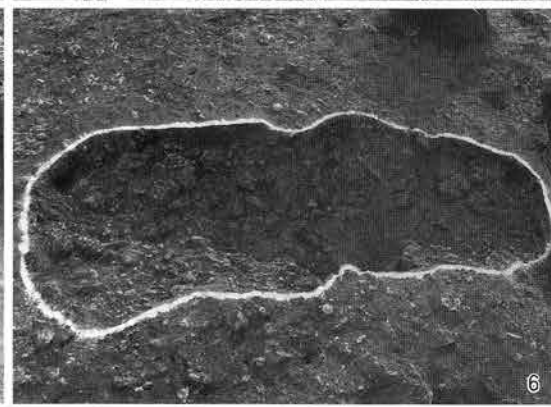
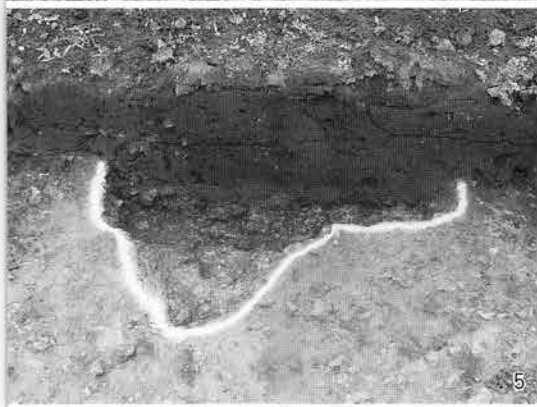




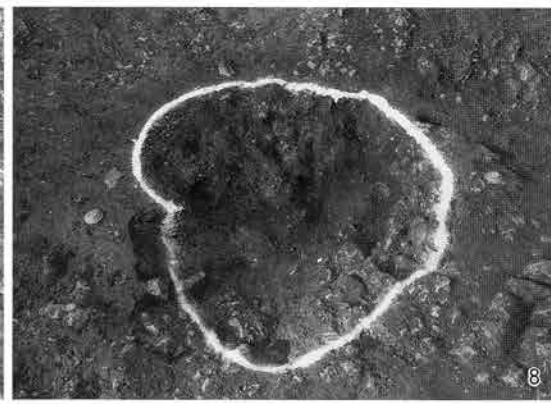
1 SK 20土層断面
北東から
2 SK 20完掘
北東から



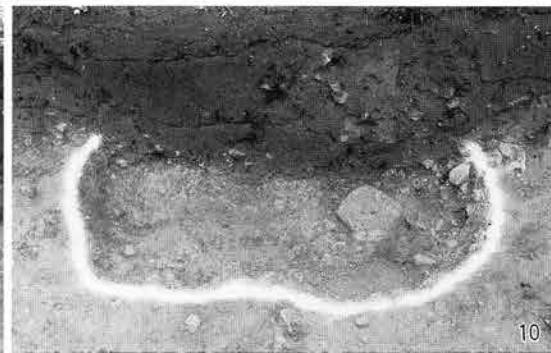
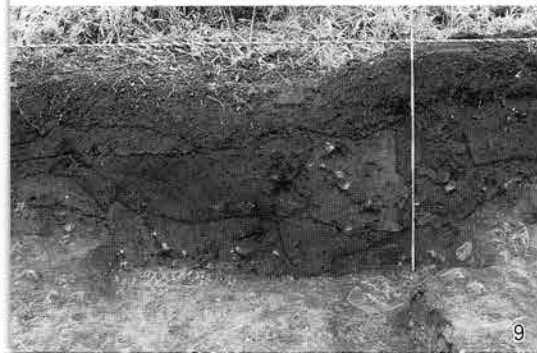
3 SK 25土層断面
南から
4 SK 25完掘
南西から



5 SK 27完掘
南から
6 SK 29完掘
北東から



7 SK 28土層断面
南から
8 SK 28完掘
南から

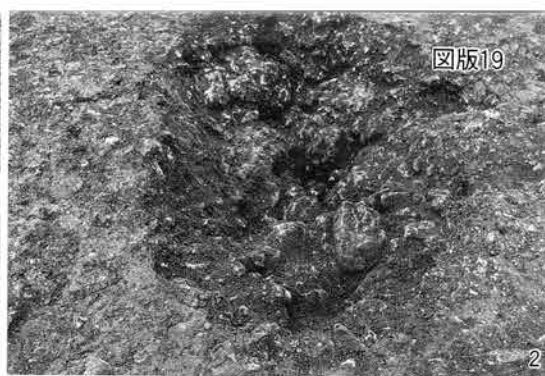


9 SK 32土層断面
北から
10 SK 32完掘
北から

1 SK 34土層断面
南から



2 SK 34完掘
南から



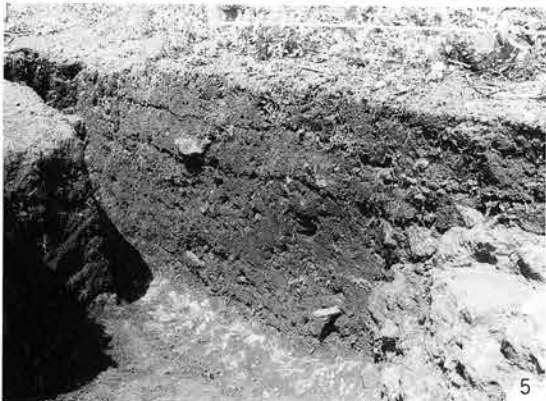
3 SD 1土層断面
南から



4 SD 1・3完掘
南東から



5 SD 2土層断面
南から



6 SD 2完掘
南から



7 SD 3土層断面
南から



8 SD 10土層断面
南から



9 SD 10完掘
南西から

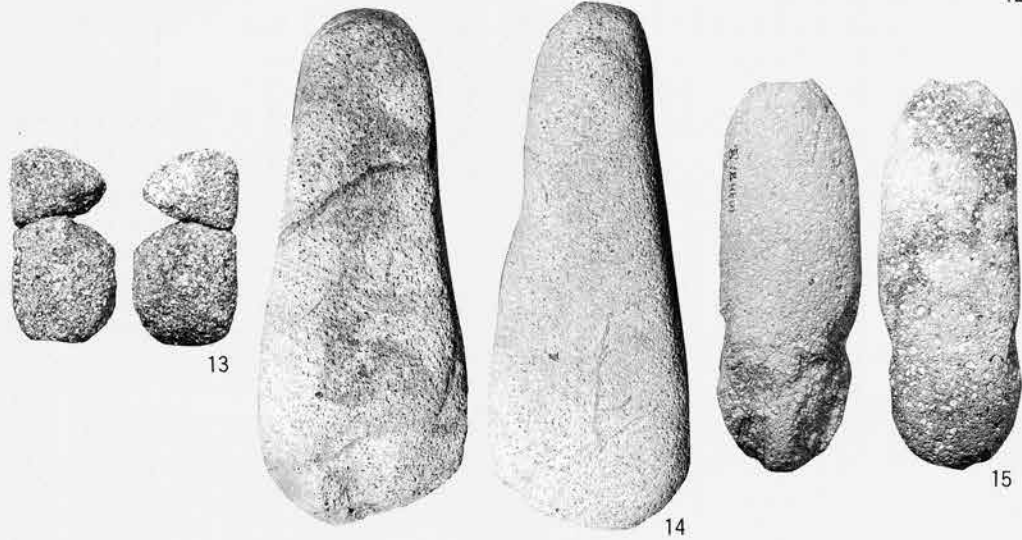
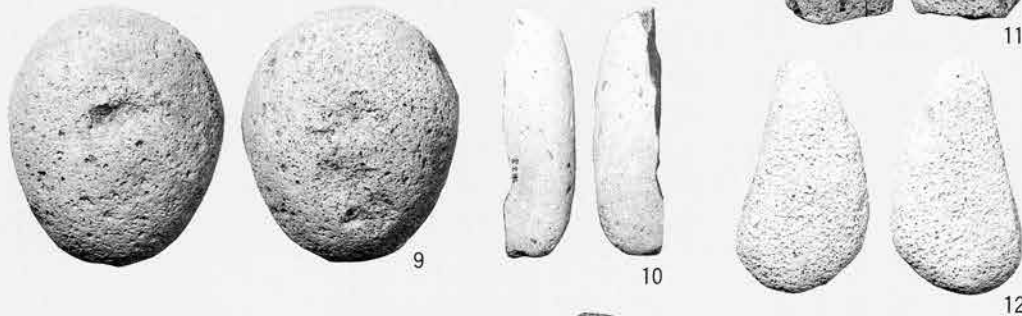
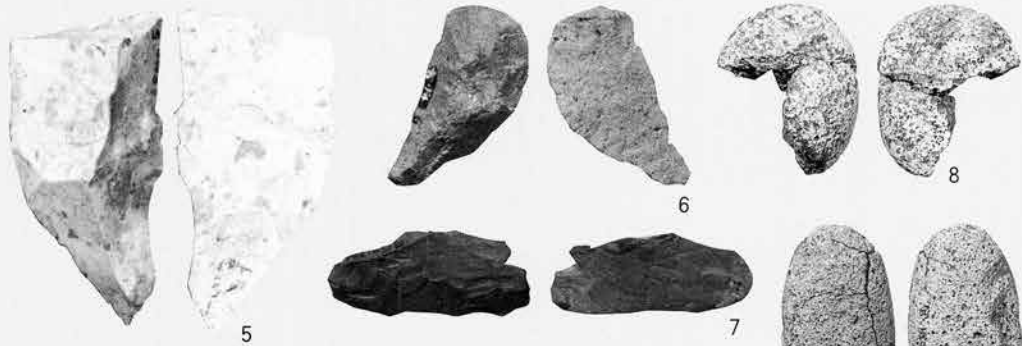


10 SX 21完掘
東から





縄文土器(1~3)
1:3



石器
不定形石器(4・5)
1:2

剥片(6・7)
1:2

磨石類(8~13)
1:4

台石(14)
1:4

器種分類不明石器(15)
1:4



土師器
無台椀(16~26)
1:3

土師器
無台椀(27~29)
1:3

27は篋削り
28は墨書土器
29は内面黒色土器

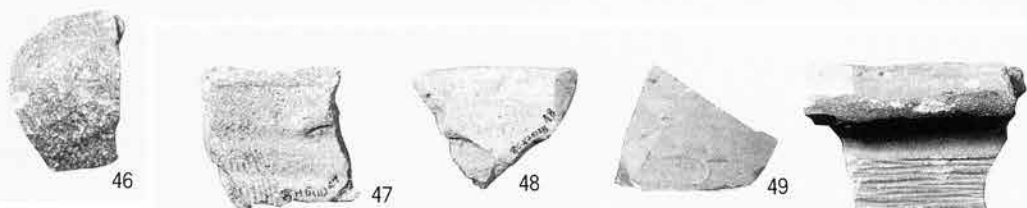
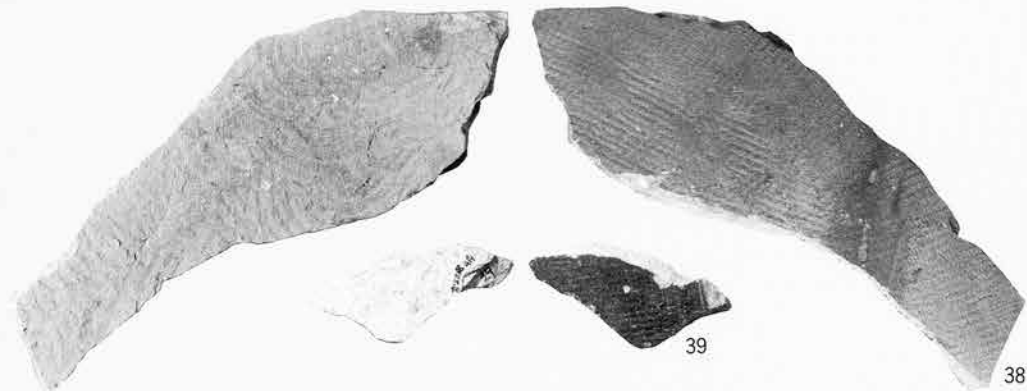
有台椀(30)
1:3
内面黒色土器
甕(31~33)
1:3

鍋(34・35)
1:3



須恵器
甕(36~45)
1:3

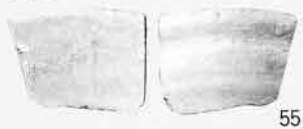
長頸瓶(46)
1:3



珠洲焼
播鉢(47~49)
1:3

甕(50~54)
1:3

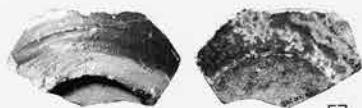




55



56



57



58



59



60



61

瀬戸美濃焼
灰釉平椀(55)
1:3

唐津焼
小皿(56)
1:3

越中瀬戸焼
皿(57)
1:3

伊万里焼
椀(58・59)
1:3

鉄滓(60)
1:3

鍛冶炉窯壁(61)
1:3

むし かわ 川 城 跡

例 言

1. 本報告書は新潟県^{ひがしきびき}東頸城郡^{うらがわら}浦川原村大字虫川^{むしかわ}字古城^{ふるしろ}1510番地1ほかに所在する虫川城跡の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は地方鉄道新線北越北線の建設に伴い、新潟県が日本鉄道建設公団から受託し、昭和54年度(第一次調査)・昭和61年度(第二次調査)に実施した。調査主体は新潟県教育委員会(以下、県教育委員会と略す)であり、調査面積は第一次調査162m²・第二次調査317m²である。
3. 整理は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下、埋文事業団と略す)が県教育委員会から受託し、平成6年度に報告書作成にかかる整理作業を行った。
4. 出土遺物と調査にかかる資料はすべて県教育委員会が保管している。遺物の註記は、虫川城跡を「ムシ」、出土地点または遺構名を併記した。
5. 本書の方位は真北であり、磁北は真北から西偏約7度である。掲載した図面のうち、既製の図面等を使用したものについては、それぞれの原図の出典を記した。
6. 遺構・遺物の実測図、写真は原則として一括した。遺物番号は一連の通し番号を付し、写真図版もすべてこの番号を使用した。
7. 文中の註は脚註とした。引用文献は著者と発行年を〔 〕で文中に示し、巻末に一括して掲げた。
8. 序説(調査に至る経緯)、遺跡の環境(遺跡をとりまく地理的環境、周辺の遺跡と歴史的環境)については、宮平遺跡の第Ⅰ章、第Ⅱ章に含めて記述した。
9. 4号墓壙出土の歯の分析については、高橋正志氏(日本歯科大学)に依頼し、その結果について玉稿を賜った。(第Ⅲ章)
10. 本書の作成は、調査事業団調査課調査第一係が行った。本文の執筆は第Ⅲ章を除いて、第Ⅰ章3. A. 1)、第Ⅱ章1. が唐沢至朗(現群馬県立博物館学芸二課)、第Ⅳ章1. が戸根与八郎(現県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長)、他は高橋保雄(調査事業団主任調査員)である。編集は高橋が行った。
11. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大な御教示と御協力を賜った。厚く御礼申し上げる。(敬称略)
赤田哲郎・池田長寿・石野テツ・植木 宏・浦川原村教育委員会・秦 繁治・横田誠一
横山勝栄

目 次

第 I 章 調査の概要	42
1. はじめに	42
2. 遺跡の位置と立地	42
3. 調査の概要	44
A. 調査の経過	44
1) 第一次調査	44
2) 第二次調査	46
B. 調査体制	47
1) 第一次調査	47
2) 第二次調査	47
C. 整理作業と体制	47
第 II 章 遺 跡	49
1. 第一次調査	49
A. 槽 状 郭	49
B. 帯 郭	49
2. 第二次調査	49
A. 層 序	50
B. 遺 構	51
C. 遺 物	53
第 III 章 自然科学の分析調査	56
1. 4号墓塚出土の歯の分析	56
第 IV 章 ま と め	57
1. 土葬墓について	57
2. 遺構の時期と性格について	59
《要 約》	60
《参考・引用文献》	61

挿 図 目 次

第1図	虫川城跡周辺の地形図	42
第2図	虫川城跡周辺の小字・通称名	43
第3図	虫川城跡調査対象範囲図	45
第4図	虫川城跡第二次調査土層断面図	50
第5図	4号墓壙出土の歯	56

図 版 目 次

図	面
図版1	虫川城跡第一次調査遺構実測図・土層断面図
図版2	虫川城跡第二次調査遺構実測図
図版3	遺構個別実測図 1号墓壙・2号土坑・3号墓壙・4号墓壙
図版4	遺物実測図 珠洲焼・唐津焼
図版5	遺物実測図 土師質土器・石製品・鉄製品
図版6	遺物実測図 銭貨
写 真	
図版7	虫川城跡遠景(1979年) 虫川城跡遠景(1986年) 第一次調査地区近景
図版8	第二次調査地区近景 1トレンチ北壁土層断面 第一次調査風景 第二次調査風景 槽状郭調査前現況槽状郭草木刈払い
図版9	槽状郭完掘(北から) 槽状郭完掘(西から) 帯郭1草木刈払い 帯郭1完掘 1号墓壙遺物確認 1号墓壙唐津焼検出 下段削平地・1号墓壙・2号土坑・3号墓壙全景
図版10	1号墓壙・2号土坑・3号墓壙 1号墓壙・2号土坑・3号墓壙完掘 4号墓壙確認 4号墓壙珠洲焼検出 4号墓壙完掘 赤田家墓地五輪塔・板碑 赤田家墓地板碑拡大
図版11	珠洲焼 唐津焼 土師質土器 石製品 珠洲焼大甕補修部分・刻文 珠洲焼大甕補修部分拡大
図版12	鉄製品 銭貨 4号墓壙出土の歯

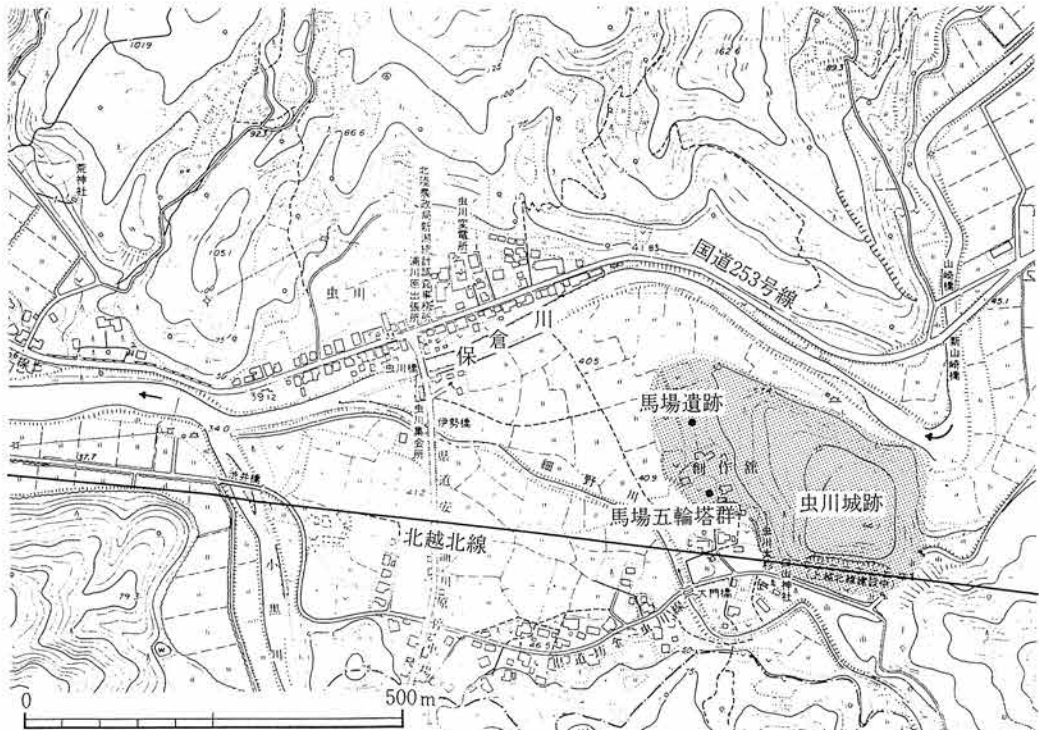
第I章 調査の概要

1. はじめに

例言でも述べたように虫川城跡は、宮平遺跡と同一の東頸城郡浦川原村内に所在し、同一事業の北越北線建設に伴う発掘調査の記録である。したがって、序説(調査に至る経緯)、遺跡の環境(遺跡をとりまく地理的環境、周辺の遺跡と歴史的環境)は、宮平遺跡の発掘調査記録第I章及び第II章で記述した。

2. 遺跡の位置と立地

虫川城跡は新潟県東頸城郡浦川原村大字虫川字古城1510番地1ほかに所在し、大字虫川の元からの集落(本村と通称されている)の東側の丘陵上に位置する。この丘陵は霧ヶ岳(507.1m)より



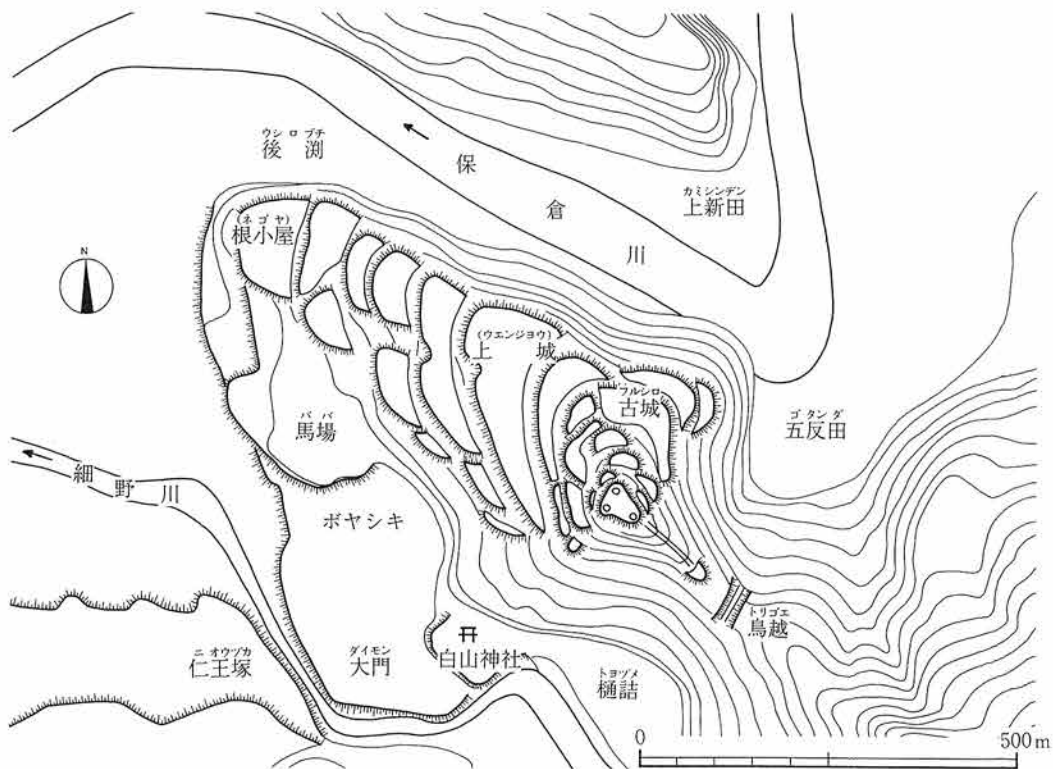
第1図 虫川城跡周辺の地形図

浦川原村役場作成 浦川原村全図
1:5000 昭和46年12月測図

2. 遺跡の位置と立地

北西に延びる支尾根の末端にあり、東側は尾根がくびれ標高が低くなるため、半独立丘陵状を呈する。また、城跡の北側には保倉川、南側には細野川が流れ、西側で合流する。

城跡の立地する丘陵は、東南から北西に延びる尾根で規模は約450×200mを測る。北・東・南側は急崖で、西側は尾根がやや広まり、標高を徐々に下げ沖積面に接する。頂上にある主郭は標高94.1m、西側の沖積面は約41mで比高差は約43mである。主郭の広さは約30～40mの三角形の平坦地であり、三方に高さ約1mの土盛り状の高まりがある。城構は、主郭のある頂上が東側に寄ること、北・東・南側は急崖で、西側が緩やかな斜面という地形から、腰郭は北から西側に、南から西側に集中し、帯状の細長い帯郭を梯段状に配列する梯郭式の縄張りを持つ。主郭及び腰郭に相当する部分は字古城(通称上城)と呼称されている。その西側は字馬場または通称根小屋、字ボヤシキ(ボウ屋敷)と称され、馬場及び城下の集落があったものと思われる。また、字馬場と字ボヤシキ境には住宅の屋号が「堀端」という家もあり、この付近に堀があった可能性もある。城跡の現状は字古城が一部墓地であるもののほとんどが山林、字馬場が畑地及び一部宅地、字ボヤシキが水田及び一部宅地であることから、大部分は旧状を残しているものと推定される。尚、昭和54年度の調査地区は山林、昭和61年度の調査地区は山林・削平地である。



第2図 虫川城跡周辺の小字・通称名()内は通称名

中保倉村作成「中保倉村大字虫川地図」明治29年調整より

城跡より周辺を見ると、北側は眼前の保倉川をはさんで約1.4km先に荒城跡があり、西側は保倉川・細野川・小黑川の合流点及び沖積面、南側は細野川をはさんで直峰城跡(県指定史跡)を望む。

周辺の遺跡として、字馬場の南側に室町時代～江戸時代の馬場五輪塔群があり、字馬場は馬場遺跡として剝片・須恵器片が散布し、縄文時代・平安時代に比定されている。また、城跡南隣に寛元三(1245)年と正安元(1299)年の棟札が残る白山神社がある。

虫川城跡の性格として、「慶長二年越後国頸城郡絵図」には、虫川村の西側には越後府中から保倉川に沿って、花ヶ崎村(現頸城村花ヶ崎)・顕聖寺村(現浦川原村顕聖寺)をへて直峰城下に入る花ヶ崎街道があり、直峰城の北麓にある本城跡は、交通の岐点を抑える役割をになっていたもの[花ヶ前1984]と思われる。

3. 調査の概要

発掘調査は、調査に至る経緯で述べたように虫川城跡の南側に沿って行われたが、昭和54年度は地滑りによる崩落及びトンネル工事に伴う落盤のおそれのある地区にある郭2か所、昭和61年度はトンネルの開口部及びその西側の地区である。昭和54年度の発掘調査を第一次調査、昭和61年度の発掘調査を第二次調査とした。調査面積は第一次調査162m²、第二次調査317m²である。

A. 調査の経過

1) 第一次調査(昭和54年度)

発掘調査は、城跡の南崖に突出したように形成されている槽状郭とそれに連続する帯郭1の一部について実施した。二つの郭は共に崩落が始まっており、迅速な処理が望まれた。したがって、調査ではこれらの現状測量と、施設の痕跡の有無の確認を主眼とした。以下、調査日誌より抄述する。

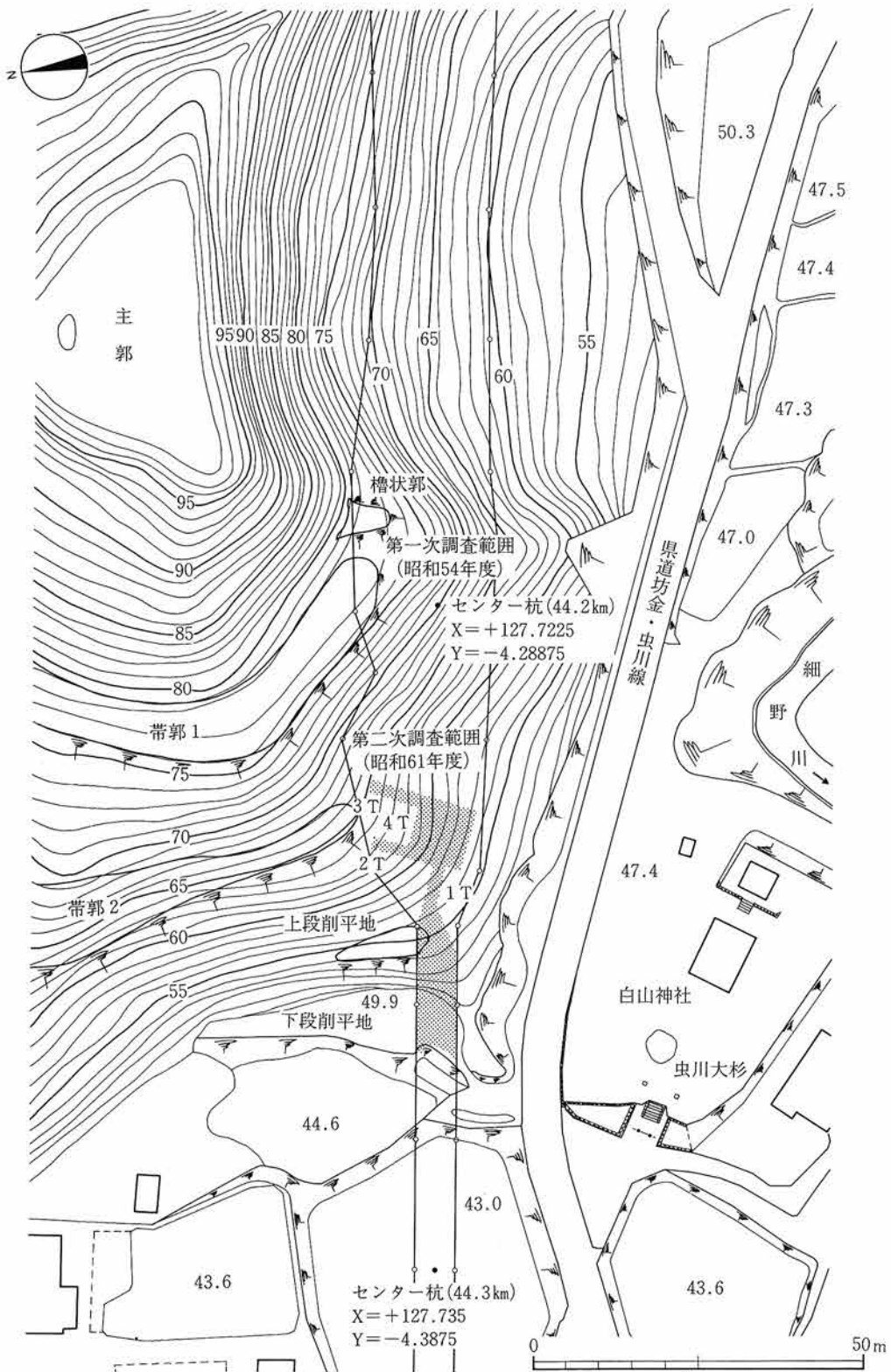
4月24日 発掘調査器材を現地に搬入する。連日の降雨により崩落が進行するため、安全確保を第一として足場を確認のうえ、槽状郭の測量を実施する。

4月25日 調査範囲の雑木伐採・帯郭1の測量・セクションラインを設定し、槽状郭から発掘を開始する。根株が多く、作業は難行する。

4月26日 槽状郭を精査するものの先端部に不定形の落ち込みがあるほか、施設痕等は検出されない。帯郭1は抜根・排土作業を継続する。縁辺部を優先的に排土して遺構検出に努める。

4月27日 降雨が激しく作業は難行する。全面崩落の恐れがあり、午前中で作業を停止する。午後、虫川城内・保倉川右岸を踏査する。また、区長宅等で土地更正図・古文書・地名・伝承

3. 調査の概要



第3図 虫川城跡調査対象範囲図

日本鉄道建設公団東京支社作成
北越北線大島・沢田間線路平面図 1:500
昭和46年12月測量

等や通称蛇山で確認された城跡推定地踏査と地形の旧状を聴取・調査した。

4月28日 精査するものの遺構は検出できない。出土遺物も皆無である。崩落状況から、調査の継続は困難と判断する。計画当初の調査目的は達したので、調査終了後の写真撮影をもって現地調査を終了し、撤収した。

2) 第二次調査(昭和61年度)

発掘調査は、二か所の削平地及び法線内に接する帯郭2を中心を実施した。以下、調査日誌より抄述する。

5月19日 発掘調査器材を現地に搬入する。墓地として利用されていた下段の削平地には既に骨蔵器と推定される甕の口縁部が露出し、旧地主とその取り扱いについて協議する。その結果、人骨が出土した場合は、旧地主に返却し、骨蔵器は県教育委員会で保管することにした。

5月20日 調査器材の整理及び周辺環境整備を行い、その後、調査対象範囲の現状地形測量を実施する。

5月21日 トレンチを設定し、本格的に発掘調査に入る。トレンチは、上段の削平地より東へ等高線に平行するように1本(1T)、さらに1Tから北へ法線外の帯郭2に向け等高線に直交するように2本のトレンチ(2T・3T)を入れた。トレンチ幅はいずれも2m、長さは1T約15m・2T約10m・3T約12mである。

5月22日 1Tの東側で黒色土の落ち込みが認められ、豎堀の可能性もあるため、1Tの北側に4Tを設定する。落ち込みは浅く自然地形と判断されるため、トレンチの調査はほぼ終了した。北から法線内に延びようとする帯郭2は、土層断面より法線内に及ばないことが判明する。上・下段の削平地の表土除去を行う。上段の削平地の表土層より灯明皿が出土する。上段の削平地は土層断面より人為的なものと判明する。

5月23日 上・下段の削平地を地山まで削平する。当初より露出していた下段削平地の骨蔵器を1号墓壙とし、遺構調査に入る。

5月24日 下段の削平地の精査を行った結果、新たに土坑1基・墓壙1基を認め、2号土坑・3号墓壙とし遺構調査に入る。3号墓壙より釘、赤色漆片・寛永通宝(6枚)が出土する。下段削平地の南側では、遺構・遺物は検出されない。

5月27日 下段の削平地の墓壙を完掘し、実測・写真撮影を行う。

5月29日 上段の削平地の精査を行う。現地表面より約45cmの深さより珠洲焼の大甕が認められ、4号墓壙として遺構調査を開始する。甕内より歯、永楽銭1枚を含む銭貨6枚、赤色漆片、鉄釘が出土する。

6月2日 4号墓壙を除いて、実測等の調査は終了する。

6月3日 4号墓壙完掘、実測・写真撮影等を行い、城跡関係の発掘調査は完了する。引き

3. 調査の概要

続いて、調査区の西側から小黒川まで確認調査を実施する。

6月4日 確認調査区では遺構・遺物が検出されず調査は終了する。器材及び諸用具の整理・梱包を行う。

6月5日 現地より器材及び遺物等を搬出し、現場作業はすべて完了する。

B. 調査体制

調査は県教育委員会(昭和54年度教育長 米山市郎・昭和61年度教育長 有磯邦男)が主体となり、以下の体制で実施した。

1) 第一次調査(昭和54年度)

管 理 総 括	福島寅嘉	(新潟県教育庁文化行政課長)
	関 和彦	(同 課長補佐)
庶 務	近藤信夫	(同 副参事)
	獅子山隆	(同 主事)
	伊藤和子	(同 主事)
調 査 担 当	金子拓男	(同 埋蔵文化財係長)
職 員	唐沢至朗	(同 学芸員)
	折井 敦	(同 学芸員)
調査協力員	秦 繁治	(新潟県文化財保護指導委員)

2) 第二次調査(昭和61年度)

管 理 総 括	高橋 安	(新潟県教育庁文化行政課長)
	田中浩一	(同 課長補佐)
庶 務	土田 玲	(同 主事)
調 査 指 導	中島栄一	(同 埋蔵文化財係長)
担 当	戸根与八郎	(同 主任)
職 員	和田寿久	(同 文化財主事)

C. 整理作業と体制

整理作業は検出遺構・遺物も少ないこともあり、遺物の洗浄・註記は現場の調査時に行った。また、調査後の残務整理で、第一次調査では唐沢が一部原稿執筆を、第二次調査では戸根を中心に遺物の実測、遺構・遺物のトレース、一部図版組みを行った。

それらを基にして、報告書作成は平成6年度に実施した。原稿の執筆分担については例言に

記したとおりである。整理作業と原稿執筆の過程で、埋文事業団職員及び新潟県教育庁文化行政課職員の協力を得た。

整理体制は以下のとおりである。

主 体	新潟県教育委員会(教育長 本間栄三郎)
整理・報告	新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 本間栄三郎)
管 理	藍原直木 (事務局長)
	渡辺耕吉 (総務課長)
	茂田井信彦(調査課長)
庶 務	泉田 誠 (総務課主事)
指 導	藤卷正信 (調査課調査第一係長)
職 員	高橋保雄 (同 主任調査員)

第Ⅱ章 遺 跡

1. 第一次調査(昭和54年度)

調査の対象とした城郭遺構は、城跡南側に突出した櫓状郭と、それに連続して西に延びる帯郭1の一部である。調査実施面積は162㎡である。

A. 櫓 状 郭(図版1・8・9)

郭の先端が調査以前に既に崩落していたため全容は知り得ないが、おそらくは現在より約4～5mは南に張り出していたものと思われる。調査時の平面形態は台形を呈し、上面の東西平均幅5.5m・南北7.0m・面積38.5㎡を測る。約10cm程の表土下は岩盤となっており、本郭が他の郭とは異なり山膚から突出する岩盤を利用したものであることがわかる。発掘の結果、現状の先端付近に不定形な落ち込みがあったが人工のものとは考え難く、柱穴・柵列痕なども発見されなかった。

櫓状郭は標高80.0mで極めて展望がきき、頂上郭より細野川上流及び字鳥越南口をとらえることができる。この櫓状郭が太鼓櫓跡ではなかったかとの見解もあるが、^{註1)}本城跡内における位置及び周辺の地形から、重要な位置を占めるものであることは間違いのないものの確証がなく、南口の望櫓郭としておきたい。遺物は、検出されなかった。

B. 帯 郭 1(図版1・9)

櫓状郭に連続するこの帯郭1は、本城郭内の上段に入り、標高76.5mを測る。郭の幅は平均10mで、城郭の西面から南面にめぐっている。杉・雑木が繁茂していたが、伐採整理後の表土を平均10cm程除去すると、漸移層を伴わずにただちに黄褐色土が露出した。露出面は平坦かつ滑らかで、山膚の刻みによる形成であることが知られる。調査範囲内では、遺物は検出されなかった。

2. 第二次調査

調査対象範囲にあたる部分は、トンネル開口部及びそれに続く橋脚部分であり、2か所の削平
註1) 昭和48年の秦繁治文化財保護指導委員の報告による。

地及び帯郭2が法線内に接する地点である。したがって、調査は削平地の遺構・遺物の存在、帯郭2が法線内に延びるか否か、この他に城跡に関連する遺構及び遺物が存在するか否かについて行った。調査対象面積は585㎡であったが、実質調査面積は317㎡である。

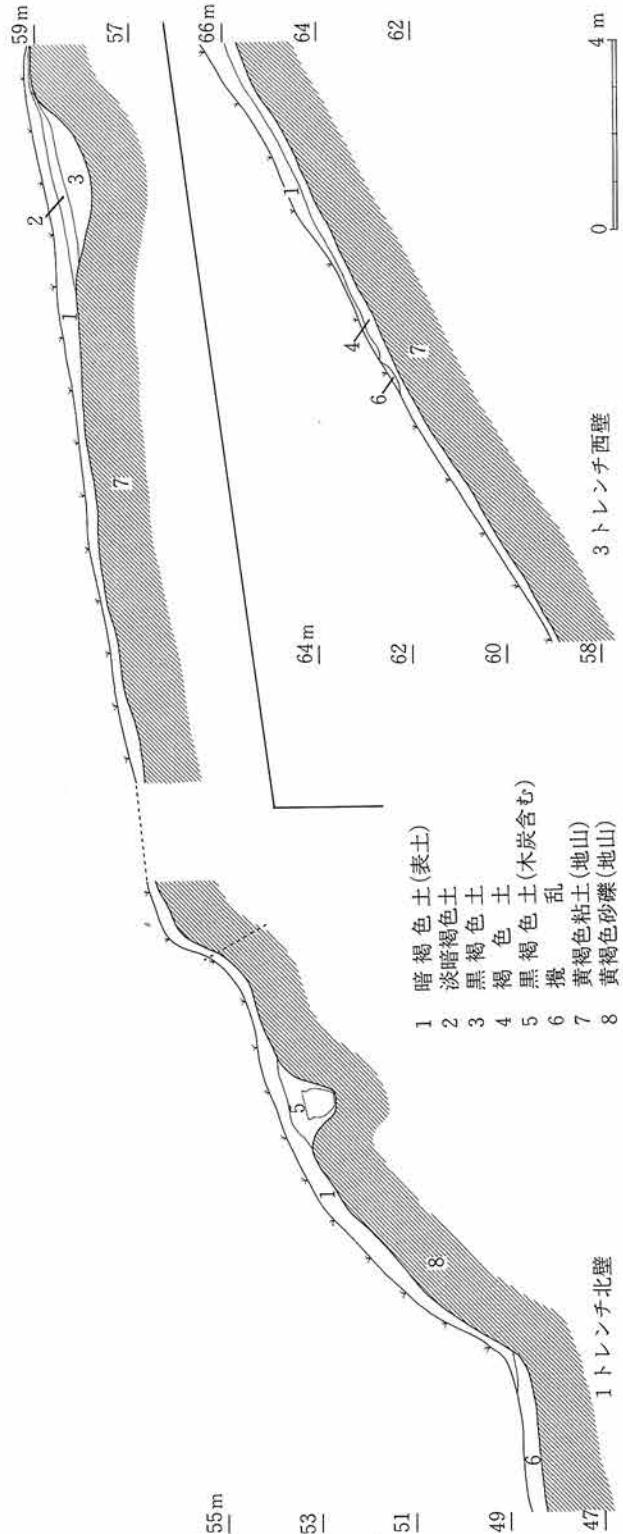
A. 層 序

調査区は城跡の南西の一部である。城跡の南側は細野川により開析された谷の斜面であり、急崖である。これに連続する調査区は主郭のある頂上から、南西方向に急傾斜をなす斜面である。したがって、表土より地山(黄褐色粘土・黄褐色砂礫)までの堆積は薄く、また、下段削平地の大部分は攪乱土で覆われていた。基本層序は一部を除き、大部分が表土(暗褐色土)から、いきなり地山に到達する。以下、基本層序の説明をする。

表土 暗褐色土を基本とし、厚さは斜面で平均20cm・上段削平地で約40cmを測る。

褐色土 3トレンチの表土下で認められる土(第4図の土層断面図では4層と表記)で、平均20cmを測る。3トレンチは急斜面であり土の崩落のため、地山土と表土が混じりあった土である。

地山 黄褐色粘土及び黄褐色砂礫である。上段削平地より北側の急斜



第4図 虫川城跡第二次調査土層断面図

面では黄褐色粘土、これより南側では黄褐色砂礫で構成される。

B. 遺 構

検出された遺構は、調査前から認められた上・下段の削平地、調査で検出された下段削平地に存在する2基の墓壙及び1基の土坑、上段削平地に存在する1基の墓壙である。トンネル開口部にあたる帯郭2の南側は、帯郭の伸びの確認及びその他の遺構・遺物の検出を目的に4本のトレンチとトレンチの拡張を行った。その結果、斜面に対し直交する落ち込みが認められたが、人為的な掘り込みではなく、自然地形と判断された。また、帯郭2は法線内に伸びていないと判断された。

以下、検出遺構について詳述する。

下段削平地(図版2・9)

旧地主の赤田家が墓地として利用していた削平地である。削平地は城跡の南西隅部西向きの斜面の裾部付近に築かれている。規模は南北約40m・東西約10m・標高49.9mを測り、西側の水田とは5.3mの比高差がある。調査はこのうち、法線にかかる南側の5.8×約6mの部分を行った。地表面から地山面までは約35cmを測るが、攪乱土で覆われていた。地山面は黄褐色砂礫で構成され、ほぼ平坦であるものの、西側に向かい緩やかに傾斜する。遺構は、調査区内の南側より墓壙2基、土坑1基が検出され、それ以外の遺構は検出されていない。遺物も墓壙・土坑以外から出土していない。

1号墓壙(図版2・3・9・10)

下段削平地の南側にある長方形の墓壙で、調査前から甕の口縁部が露出していた。南東辺は3号墓壙と重複し、北東辺は2号土坑に接している。長軸82cm・短軸65cmで長軸方向はN-59°-Eである。深さは確認面より55cmを測る。底面は黄褐色泥岩で構成され、長方形を呈し、ほぼ平坦である。側壁は確認面より約5~10cmが黄褐色土、下は黄褐色泥岩で構成され、立ち上がりは比較的緩い角度であるものの、徐々に急角度になりほぼ垂直に近くなる。墓壙内の埋土は、黄褐色泥岩片を多く含む黄褐色土である。墓壙内北東寄りに唐津焼の甕(2)が埋め置かれ、その周辺に約10~15cm程の自然石が6個置かれている。自然石は甕を押えたものと思われる。唐津焼の甕内部の八分目程から下には、焼骨がびっしりと詰った状態が入っており、1人分の焼骨ではないものと推定される。甕は18世紀末葉から19世紀中葉のものであり、墓の整理に伴い、焼骨を一括し、合葬したものであろう。この他、寛永通宝9枚(17~23)出土し、うち3枚は被熱のため変形溶解し、貼り付いている。甕外の墓壙内からの出土遺物はない。なお、1号墓壙は2号土坑と接し、3号墓壙と重複しているが、新旧関係は2号土坑より古く、3号墓壙より新しい。

2号土坑(図版2・3・9・10)

下段削平地の南側にある不整長方形の土坑である。西辺は1号墓壙に接し、南西隅部より13cm南に3号墓壙がある。長軸82cm・短軸69cmで長軸方向はほぼN-83°-Wである。深さは確認面より45cmを測る。底面は黄褐色泥岩で構成され、不整長方形を呈し、ほぼ平坦である。側壁は確認面より5~10cmが黄褐色土、その下は黄褐色泥岩で構成され、立ち上がりは急角度でほぼ垂直に近くなる。また、底面及び側壁は黒く焼けている。土坑内には上面から底面まで木炭が充満しており、底面付近には約10~20cmの自然石がある。これ以外に遺物は出土していない。このように2号土坑は底面・壁面が焼けていること、木炭が充満していること、人骨・遺物がないことから、墓壙以外の別目的の土坑と推定される。なお、西辺は1号墓壙に接しているが、木炭が1号墓壙の北東壁に付着していることから、1号墓壙より新しい。

3号墓壙(図版2・3・9・10)

下段削平地の南側にあるほぼ方形の墓壙である。北西壁は1号墓壙と重複し、北隅部より13cm北に2号土坑がある。99×90cmの規模を持ち、長軸方向は約N-69°-Eである。黄褐色泥岩層(地山)を掘り込み、深さは確認面より83cmを測る。底面は長方形でほぼ平坦である。側壁はほぼ垂直に立ち上がるものの、南東壁の東寄りに35×10cm程の段がある。埋土は黄褐色泥岩片を多く含む黄褐色土である。遺物は底面付近より鉄釘4点(5~8)、寛永通宝6枚(24~29)、赤色漆剥片が出土している。骨片等は全く出土していない。寛永通宝は六道銭であろう。鉄釘は木質部が付着するものがあることから木製骨箱の止め具と推定され、墓壙の規模から火葬骨を入れたものであろう。なお、1号墓壙と重複しているが、北西壁は一部1号墓壙に削られている。

上段削平地(図版2)

城跡の南西隅部西向きの斜面の裾部付近に築かれている。規模は南北約14.5m・東西約4.5m・標高55.0mを測る。西へ約4.6mの斜面下方に、比高5.1mの下段削平地があり、東へ約15.0mの斜面上方に比高11.0mの帯郭2がある。削平地は法線にかかる南側の3.8×1.6mの広さで検出した。東側は段切りされるが平坦でなく、西側に緩く傾斜する。地表面から地山面までは約20~30cmの表土(暗褐色土)で覆われ、地山面は黄褐色砂礫である。遺構は南西端部で4号墓壙が検出されたのみである。遺物は4号墓壙以外では出土していない。

4号墓壙(図版2・3・10)

上段削平地の南西端部にある墓壙である。北側は一部法線外に延びているものの、長径135cm・短径121cmの楕円形を呈し、長軸方向はN-13°-Wである。黄褐色砂礫層(地山)を掘り込み、深さは確認面より105cmを測る。

底面は円形で中心が緩く窪む。側壁は西壁が緩く、東壁が急角度で立ち上がり、確認面近くでは各壁とも角度を緩くする。埋土は黄褐色礫を含む黒褐色粘質土の単層であり、地表面より

2. 第二次調査

20～30cmの表土下で埋土が確認される。墓壙内のほぼ中央に珠洲焼大甕(1)が埋め置かれているが、斜面の傾斜に合うかのように西側に若干傾いている。大甕の口縁部は地表面より約50cm下である。大甕内部は上層が黄褐色泥岩の風化礫であるが、中層から底面にかけては暗褐色土になっている。遺物は、大甕の中より永楽銭を含む銭貨6枚(30～35)、鉄釘7点(9～12)、歯16点(第5図・36)、墓壙埋土より鉄釘16点(破片を含む)(13～16)が出土している。銭貨は六道銭であろう。鉄釘は大甕内外より23点出土し、木質部が付着したのがあることから、大甕を覆った木製の蓋等に使用されたものであろう。歯については後述するが、分析の結果土葬された人の歯で、性別不明・年令30～40歳と推定されている。

C. 遺物(図版4～6・11・12)

第二次調査で遺構から出土した主な遺物は、次の通りである。

1号墓壙 唐津焼甕1点、寛永通宝9枚

3号墓壙 鉄釘4点、寛永通宝6枚、漆剝片数点

4号墓壙 珠洲焼大甕1点、鉄釘23点、銭貨6枚、漆剝片数点、歯16点

この他、遺構外より土師質土器1点、宝篋印塔1点が出土している。また、調査区外の下段削平地の赤田家墓地改葬に伴い、土器、陶器、板碑、五輪塔等が出土し、板碑・五輪塔(図版10)は南北朝時代のもものと推定されている。

珠洲焼(1)

1は珠洲焼大甕で、4号墓壙の埋納甕棺容器として利用されていたものである。口径65.8cm・器高63.1cm・底径13.8cmを測る。口縁部は肥厚し、緩く短く外反し、口縁端は玉縁状を呈する。体部は肩部の張り出しが弱く、径は口縁部に比べわずかに大きい程度である。肩部から体部下半へは、ほぼ直線的に移行する。成形は外面の口縁部から頸部にかけて横ナデ、頸部から肩部にかけては横位または緩く右下りする叩き、肩部から体部下半にかけては右下りする叩き、体部下半から底部にかけては横位の叩き、底部は横ナデが施されている。内面は口頸部が横ナデ、頸部から肩部にかけては斜位のナデ、肩部から体部下半にかけては縦位のナデ、体部下半から底部にかけては横ナデが施されている。また、外面肩部付近には記号と思われる刻文「大」がある。色調は内外面共に灰色を呈し、胎土には小礫が混じる。また、大甕には口縁部から体部上半部にかけて補修がなされており、割れ面は漆を塗り接着し、内外面には細目の布と漆で補強されている。内面体部下半には補修の際、垂れた漆が多く付着している。さらに、甕棺として使用される際に穿たれた径3～5cm程の穴が体部下半に3か所認められるが、外側から内側へ叩打し穴を穿ったものと推定される。

大甕の所属時期については、珠洲焼編年〔吉岡前揚〕のV期に相当し、15世紀前半に比定される。刻文「大」の類似資料として、県内では見附市小栗山裏山経塚群より12世紀後半に比定される

珠洲焼壺に同様の刻文が〔小出1978〕、西頸城郡名立町名立タラバ海底揚がりで13世紀に比定される珠洲焼播鉢2点に「大」の刻文〔金子ほか1975〕が見られる。

唐津焼(2)

2は唐津焼の甕で、1号墓壙の骨蔵器として利用されたものである。口径31.0cm・器高48.7cm・底径19.6cmを測る。頸部は若干外反ぎみに立ち上がり、口縁部でやや強く外反し、端部を内側に折りまげ丸味を持たせながら肥厚させ、内傾する面を持つ。内傾する面には弱い凹線状の窪みがあり、外面の口縁部と頸部の間に稜を持つ。頸部から体部は「く」字状に開き、緩やかに彎曲しながら底部に至る。最大径は体部中央より若干上方にある。底部は平坦で内面には格子の叩き目が認められる。成形は叩打後、右上りの螺旋状横ナデが行われ、体部下半にはかすかに叩き目が残る部分もある。また、内面体部下半には粘土輪積み痕が認められる。釉は、漬け掛けで化粧掛けを内外面に薄く施し、灰白色を呈する。また、外面には緑灰色で1対のひしゃくがけが施されている。胎土は暗褐色を呈する。

甕の所属時期については、唐津系陶器編年〔大橋1989〕のV期に相当し、18世紀末葉～19世紀中葉に比定される。

土師質土器(3)

3は4号墓壙より約3m南側の斜面表土層から出土した土師質土器の小皿である。口径7.9cm・器高1.9cm・底径5.3cmを測る。口縁部の内外面には煤・タールが付着し灯明皿として利用されたものと思われる。外面は底部から体部にかけて若干反りぎみに立ち上がり、口縁端部が上方につまみ上げられ、先端部が尖る。内外面口クロナデ、底部は回転糸切りである。色調は内外面共ににぶい黄橙色を呈し、堅緻である。1点の出土で時期決定に若干の問題はあるものの、越後における中世土師質土器の変遷〔坂井1988・品田1991〕によれば、15世紀代であろう。

石製品(4)

4は確認調査時に上段削平地と下段削平地の間の斜面、表土層中より出土した。宝篋印塔の相輪部と推定され、九輪は簡略化され短い。また、上下の請花の文様も省略されている。下部請花の下には、笠に結合する突起がある。形態はやや扁平ぎみで、横断面は楕円形を呈する。石材は多孔質の安山岩で、表面の凹凸が著しい。江戸時代の所産であろう。

鉄製品(5～16)

5～16は鉄釘である。5～8は3号墓壙より出土している。5～7は完形、8は頭から基部にかけての部分である。木質部の付着が多く、また、錆化により形態は不明確であるものの、頭巻と思われる。5～7は1寸5分(約4.4cm)程度の長さで推定され、8の基部は4.0×3.8mmの方形である。

9～16は4号墓壙より出土したが、9～12は甕棺内より、13～16は墓壙内より出土した。いずれも木質部の付着及び錆化により、形態が不明なものが多い。9・10・13～15は完形、11・

2. 第二次調査

12は基部から脚部の部分、16は基部の部分と推定される。頭の形より、9・13～16は頭巻、10は折釘である。9～12・14・15は脚部は曲げられ、13は脚部先端が潰されている。

所属時期については、5～8は、伴出古銭より江戸時代、9～16は伴出土器より15世紀代と推定される。

銭貨(17～35)

17～35は、いずれも墓壙内より出土した六道銭である。17～23は1号墓壙の甕内より出土している。17～22は寛永通宝で背面に「文」字を有するいわゆる「文銭」(寛文八(1668)年初鑄)である。23は被熱のため変形溶解し、3枚貼り付いたものである。種類は明確でないものの、2枚目の銭貨は「寛」「通」の字がかすかに判読できることから、おそらく3枚とも寛永通宝であろう。

24～29は3号墓壙より出土の寛永通宝である。28・29は背面に「文」字を有するいわゆる「文銭」(寛文八(1668)年初鑄)、24～27はいわゆる「ハ宝銭」といわれ、背面に「文」字を有しない「新寛永通宝」(元禄十(1697)年初鑄)である。

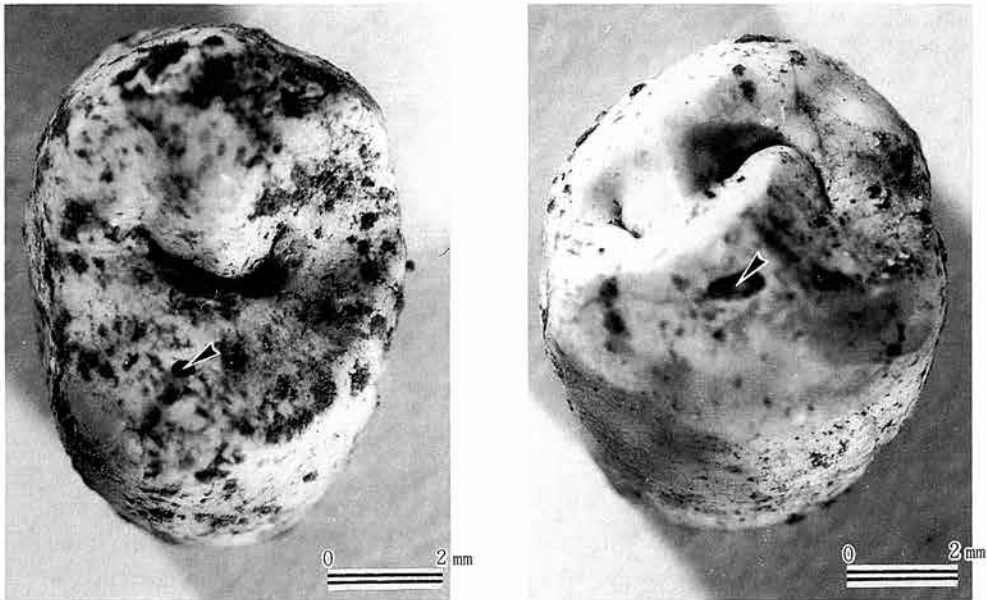
30～35は4号墓壙の甕内より出土している銭貨である。30は「天聖元宝」(北宋 天聖元(1023)年鑄造)、31は「治平元宝」(北宋 治平元(1064)年鑄造)、32は「熙寧元宝」(北宋 熙寧元(1068)年鑄造)、33は「元豊通宝」(北宋 元豊元(1078)年鑄造)、34は「聖宋元宝」(北宋 建中靖国元(1101)年鑄造)、35は「永楽通宝」(明 永楽六(1408)年鑄造)である。

第III章 自然科学の分析調査

1. 4号墓壙出土の歯の分析(第5図・図版12)

日本歯科大学 高橋正志

土葬されたヒトの歯で、象牙質の大部分が溶け去り、エナメル質のみが残存していた。重複する部位の歯はなく、各々の歯の咬耗状態から1個体分のものと思われる。上顎小白歯では舌側咬頭の、下顎小白歯では頬側咬頭の咬頭頂周辺のみが象牙質まで咬耗している点から、年齢は30～40歳と考えられる。性別を示す部位の骨は残存しない。主な出土部位は、上顎左側中切歯、下顎左側中切歯、同犬歯、上顎左側第2小白歯(第5図左)、下顎右側第1小白歯、下顎左側第1小白歯(第5図右)、同第2小白歯、同第1大臼歯、同第2大臼歯、同第3大臼歯である。



第5図 4号墓壙出土の歯(左:上顎左側第2小白歯)

第IV章 ま と め

1. 土葬墓について

新潟県内の中世墳墓で骨臓器を伴う火葬墓については数多くの報告例があるが、大甕に遺体を納めた土葬墓については報告例が極めて少ない。中世の一般庶民のお墓でもっとも普遍的なものは地面に簡単な穴を掘って、遺体を直葬しただけの土葬墓である。一般に平面形態は方形や長方形、場合によっては長円形、楕円形などがある。その他容器(大甕)に納めた人骨を土壌や塚へ埋葬する例や、特異な形態としては地下式墳への埋葬がある。ここでは容器(大甕)に納めた土葬墓について考えてみたい。容器については珠洲焼・越前焼(加賀古陶を含む)の大型甕形容器に限定する。

県内では長岡市の座禅塚(寺崎ほか1978)、岩船郡朝日村の十川みささぎ遺跡(横山1980)、中頸城郡板倉町の人柱供養堂保管資料、中頸城郡吉川町教育委員会保管資料の4例で、本例を加えると5例になる。いずれも大型甕形土器である。このうち、人骨を確実に伴うものは板倉町の人柱供養堂保管資料のみである。

人柱供養堂保管資料は、板倉町猿供養寺字正浄寺から昭和12年に畑の耕作中に発見された。人骨は座禅を組んだ状況で発見され、甕は人骨のうえに逆さに被され、甕の周辺からは銭貨が出土した。人骨については、頭骨・上腕骨・大腿骨などがある。昭和36年、(故)小片保(新潟大学医学部教授)氏の鑑定によれば、今から約300年前のもので、脚の部分の骨が発達した50才くらいの男性であるとされている。甕の大きさは、口径約70cm・高さ約80cmである。銭貨は6枚あり、唐の「開元通宝」1枚、北宋の「元豊通宝」3枚、不明銭2枚である。甕の時期については筆者自身が詳細に観察していないので決定し難い。

十川みささぎ遺跡出土資料は、昭和29年の耕地整理事業によって壊された直径10m・高さ3m内外の円形塚から鉦鼓と鉦木が出土している(横山1972)が、出土状況など詳細については不明である。甕の大きさは、口径64cm・高さ62cm・底径14cmで、珠洲焼編年(吉岡前掲)のV期に位置づけられる。このほかに近世の短頸壺・小型甕・徳利が出土している。

座禅塚出土資料は、一辺5×7m、高さ1.2mの方形塚を二次的に改造した段階の周溝中から出土している。ほぼ1個体で、本来容器として塚中に埋められたものが塚の崩落に際して流失したものと考えられる。甕の器形全体は窺えないが底径20.4cm・体部上半径70.4cmで、14世紀代のものである。

吉川町教育委員会所蔵資料は吉川町尾神出土のもので、昭和55年道路工事中に発見されたものである。出土状況や伴出遺物については不明である。甕の大きさは、口径65cm・高さ63.5cm・底径19cmで、珠洲焼編年(吉岡前掲)のⅢ期に位置づけられる。割れ口は漆によって補修されている。

立地から見ると、座禅塚は標高86mの北から南に延びる丘陵頂部にあつて、眼下に集落を望む。十川みささぎ遺跡は標高16mの沖積平野にあつて、集落のはずれに位置する。人柱供養堂保管資料は標高230mの山麓に発達した集落内の小高い丘に位置し、地滑りに伴う行人伝説を持っている。吉川町教育委員会所蔵資料は標高250mの山麓に発達した集落のはずれに位置し、尾神岳(757m)を神体とする尾神信仰に関係するものかも知れない。

一方、北陸地方(富山県・石川県)でも類例は少ない。富山県では銭甕山遺跡(岸本1979)、臼ヶ谷遺跡(竹内1977)、石垣遺跡(富山県教育委員会1972)、殿村遺跡(竹内1977)、石川県では細口源田山遺跡(土肥ほか1982)、牧口中世墓地(藤田1989)、日吉町墳墓遺跡(吉岡1963)、ドス谷遺跡(高堀1955)、上町マンダラ遺跡(西野1980)、剣崎遺跡(三浦ほか1986)、白山町遺跡(西野ほか1982・1985)があるにすぎない。

中世墳墓の類型については、遺跡の立地、マウンドの有無、石塔の有無、内部施設、火葬墓と土葬墓それに両者が併存するものなどから、階層構成別(AⅠ・Ⅱ類、BⅠ・Ⅱ類、CⅠ・Ⅱ類、DⅠ・Ⅱ類、EⅠ・Ⅱ類)に既に分類されている(吉岡1989)。上記の諸遺跡は前にことわつたように大型甕形土器が出土している遺跡である。大型甕形土器は容器としては土葬棺ないし座棺と呼ぶことができる。これらは土壌内に正位に置いたものと座位屈葬の遺体に大甕を逆さに伏せたものがある。この種の墳墓は吉岡の類型によれば中世後半の造墓で、墓域も狭小なBⅡ類に始まり、村落近辺の丘陵に10基ないしそれ以上の集団墓を形成するEⅠ類までの間に存在する。特に土葬墓はDⅡ類に多く、立地は山裾ないし丘尾の自然丘頂にあつて、数メートル以下の有丘墓を築き、陶棺ないし陶製骨蔵器を主体とするものである。被葬者は僧侶・行者が多いといわれている。

本調査で検出された珠洲焼の大型甕形土器は、その出土状況から土葬棺で、銭貨を伴っている。しかし、DⅡ類と立地は異なり、居住域に隣接した山麓に営まれ、マウンドもない。調査範囲が狭かつたため1基のみの検出であつたが、法線外に延びる平坦面に中世墳墓がさらにある可能性が強い。さらに、赤田家の墓地に中世の板碑が1基あることから、この西側斜面は墓域として利用されたものと思われる。被葬者に関しては不明なところが多いが、隣接している白山神社の創建が棟札から鎌倉時代の寛元三(1245)年・正安元(1299)年に遡ることができる。白山神社に関係する人かもしれない。

2. 遺構の時期と性格について

虫川城跡の発掘調査の結果、城構の一部である二つの郭、上・下段の削平地およびこの削平地に存在する墓壇3基、土坑1基を検出した。

第一次調査の郭については、地形・調査結果より帯郭の一部、櫓状郭と推定した。

第二次調査の下段削平地の墓壇2基、土坑1基については、1号墓壇出土の唐津焼甕から18世紀末葉から19世紀中葉に推定される。3号墓壇は重複関係から1号墓壇より古いのが、出土六道銭にいわゆる新寛永通宝(元禄十(1697)年初鑄)があることから18世紀以降である。ところで、1号墓壇出土の寛永通宝は被熱により溶解変形したもの以外は、すべて「文銭」(寛文八(1668)年初鑄)で、出土銭を見る限り3号墓壇より古い傾向にある。このことは既に述べたように1号墓壇は、3号墓壇より古い墓を改葬し、その際に3号墓壇の一部を削り構築したものと解釈される。2号土坑の性格は不明であるものの、重複関係から1号墓壇より新しい。その下限は時期決定の遺物がなく不明である。上段削平地の4号墓壇は、甕棺として使用された珠洲焼が15世紀前半、六道銭の永楽通宝(明 永楽六(1406)年鑄造)から15世紀代と推定される。一方、上・下段の削平地は、地形・調査結果からすれば、人為的な削平地であることは明らかである。その性格として、郭、または墓域の何れかが考えられる。郭としての機能を考えた場合、位置的に問題があり、他の郭との関連が説明できない^{註1)}。墓域として考えた場合、上段削平地で1基、下段削平地で2基の墓壇しか検出していない。しかし、これについては、調査地が削平地のはずれであり、調査面積が少なかったこと。調査区外西側の下段削平地にある赤田家の墓地改葬に伴って南北朝時代と考えられる板碑・五輪塔が出土していることから、他にも墓があった可能性が指摘できること。地形的に見てかなり急斜面であり、墓を造る場合削平地が必要であること。これらのことから、根拠は弱いものの上・下段の削平地は、墓域形成に伴う人為的削平地と思われる。

最後に虫川城の存続であるが、調査によって城跡の時期を特定できる遺構・遺物は検出されなかった。伝説によると南北朝時代の直峰城主風間信濃守の家老空田主膳の居城といわれている以外、城将・城歴は明らかでない。しかし、城跡が戦国時代末期の縄張りを残すこと〔花ヶ前1984〕。文禄四(1595)年から慶長二(1597)年の間に作成されたという『越後国郡絵図』〔東京大学史料編纂所1983・1987〕では、描かれておらず、既に機能していなかったこと〔坂井1991〕が、廃城の時期を示唆するものと思われる。築城については、一般的に県内城館遺跡出土資料から13世紀末頃と15世紀代に多い傾向が指摘〔鶴巻1991〕されている。15世紀代と推定される4号墓壇に埋葬された人物は城跡または白山神社に何らかの関係があったと思われるが、城跡の存続が不明確なため明らかでない。

註1) 昭和61年度県文化財保護指導委員秦繁治、植木宏氏も現地と同様な指摘をしている。

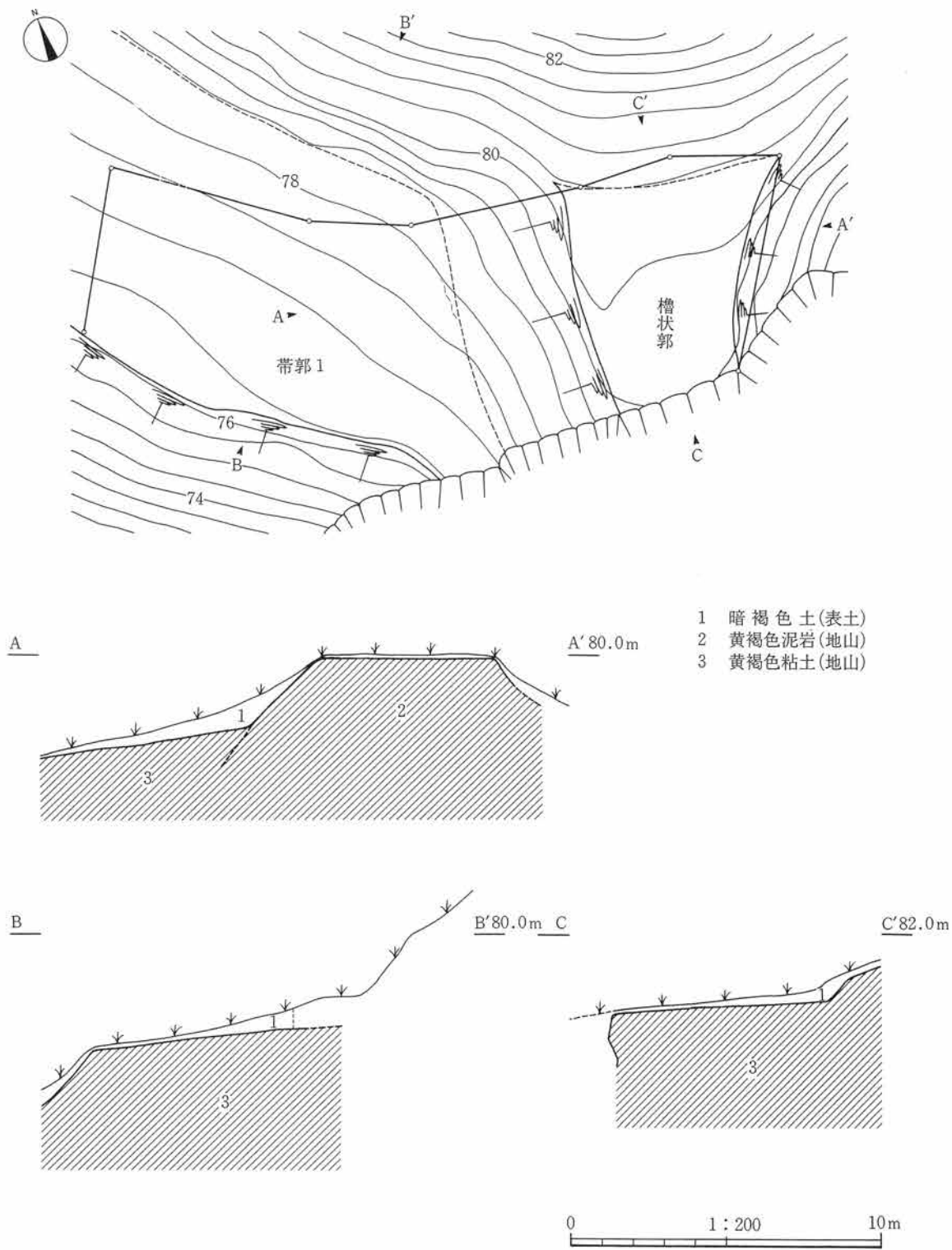
要 約

1. 虫川城跡は新潟県の南西部、東頸城郡浦川原村大字虫川字古城1510番地1ほかに所在する。城跡は霧ヶ岳(507.1m)より延びる尾根の末端にあり、東側以外は保倉川、細野川、沖積面に囲まれている。
2. 調査は地方鉄道新線北越北線の建設に伴い、昭和54年4月24日～28日(第一次調査)、昭和61年5月19日～6月5日(第二次調査)にかけて実施した。調査面積は、第一次調査162m²、第二次調査317m²である。
3. 調査の結果、中世・近世の遺構・遺物が検出された。
4. 遺構は城構の一部である帯郭、櫓状郭、15世紀代と推定される墓壇1基、江戸時代の墓壇2基、江戸時代以降の土坑1基、墓域形成に伴うと推定される2つの削平地である。
5. 遺物は、中世の墓壇より15世紀前半に比定される珠洲焼大甕、永楽通宝を含む銭貨6枚、歯、近世墓壇より18世紀末葉から19世紀中葉に比定される唐津焼甕、寛永通宝15枚、中世・近世の釘、漆剥片、土師質土器、宝篋印塔等が出土している。
6. 中世の墓壇より出土した歯は、分析の結果土葬された人の歯で、性別不明、年齢30～40歳と推定されている。

引用・参考文献

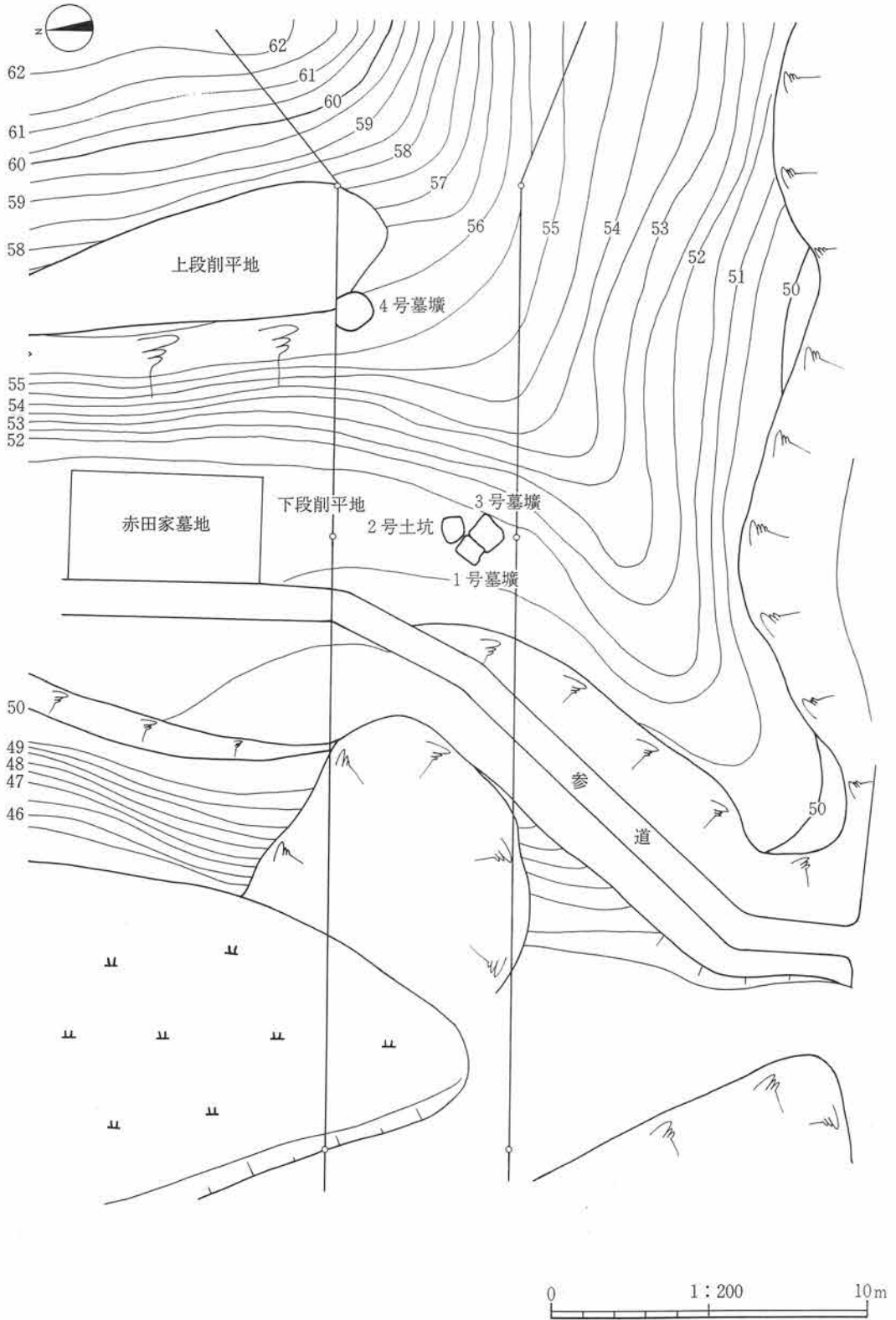
- ウ 浦川原村史編纂室 1984 『浦川原村史』 浦川原村役場
- オ 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1989 『考古学ライブラリー55 肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社
- カ 金箱文夫 1984 「近世の釘」『物質文化』43 物質文化研究会
- 金子拓男・伊藤信太郎・室岡 博 1975 「名立タラバ発見の六個一組の珠洲焼」『越佐研究』35 新潟県人文研究会
- キ 岸本雅敏 1979 『錢甕山遺跡の調査—井波郡清玄寺所在中世墳墓発掘調査概要—』 富山県教育委員会
- コ 小出義治 1978 『小栗山不動院裏山経塚群』 見附市教育委員会
- 庚申懇話会 1980 『日本石仏事典』 雄山閣
- サ 坂井秀弥 1988 「新潟県における中世考古学の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』第1号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥 1991 「絵図に見る城館と町」『中世の城と考古学』 新人物往来社
- 坂詰秀一 1980 『図録歴史考古学の基礎知識』 柏書房
- シ 品田高志 1991 「越後の中世土師器—編年的研究の現状と課題—」『新潟考古学談話会会報』第8号 新潟考古学談話会
- ス 鈴木公雄 1988 「出土六道銭の分析」『増上寺子院群』 東京都港区教育委員会
- タ 高堀勝喜 1955 『旧福野湯周辺総合調査報告』 石川考古学研究会
- 竹内俊一 1977 「ふる里両越国境の遺跡を掘る」『富山教育学窓』Vol. 3 富山教育学窓会
- ツ 鶴巻康志 1991 「越後における中世城館出土の土器・陶磁器をめぐる問題」『城館遺跡出土の土器・陶磁器』 北陸中世土器研究会
- テ 寺崎裕助・駒形敏朗 1978 『長岡ニュータウン遺跡発掘調査報告書—中山5号塚・座禅塚—』 長岡市教育委員会
- ト 東京大学史料編纂所 1983 『越後国絵図』（頸城郡） 東京大学出版会
- 東京大学史料編纂所 1987 『越後国絵図』 釈文・索引・解題 東京大学出版会
- 田海義正・波田野至朗 1982 『埋蔵文化財発掘調査報告書—尾野内遺跡・芦ヶ崎砦跡—』 新潟県教育委員会
- 土肥富士夫ほか 1982 『細口源田山遺跡』 七尾市教育委員会
- 戸根与八郎・関 雅之ほか 1973 『埋蔵文化財緊急調査報告書第一大墓遺跡』 新潟県教育委員会
- 富山県教育委員会 1972 『魚津市石垣遺跡発掘調査概報』 富山県教育委員会
- ニ 西野秀和 1980 「中島町マンダラ中世墳墓群をめくって」『日本城郭体系』7 新人物往来社
- 西野秀和・垣内光次郎ほか 1982・1985 『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡』Ⅰ・Ⅱ 石川県立埋蔵文化財センター
- 日本貨幣型録編集委員会 1989 『日本貨幣型録1990年版』 日本貨幣商協同組合
- ハ 花ヶ前盛明 1984 「中世の山城」『浦川原村史』 浦川原村役場
- ヒ 平井 聖 1981 『日本城郭体系』別巻2 城郭研究便覧 新人物往来社

- フ 藤田邦雄 1989 「中世土器素描」『北陸の考古学Ⅱ』 石川考古学研究会
- ミ 三浦純夫・久田正弘 1986 『剣崎遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- ヨ 横山勝栄・竹田和夫ほか 1987 『新潟県中世城館跡等分布調査報告書』 新潟県教育委員会
- 横山勝栄 1980 「郷土のあけぼの」『朝日村史』 朝日村教育委員会
- 横山浩一 1982 「佐賀県横枕における大甕の成形技術—現存する叩き技法の調査—」『九州文化史研究所紀要』第27号 九州大学九州文化史研究施設
- 横山貞裕 1972 「第七話 頼仁親王と河内神社」『村上郷土史物語』 村上商工会議所
- 吉岡康暢 1963 『鶴来町の古代中世遺跡』 鶴来高等学校
- 吉岡康暢 1982 「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」『庄内考古学』第18号 庄内考古学会
- 吉岡康暢 1989 『珠洲の名陶』 珠洲市立珠洲焼資料館
- 吉岡康暢 1989 「北東日本海域における中世陶磁の流通」『国立歴史民族博物館研究報告』19 国立歴史民族博物館
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

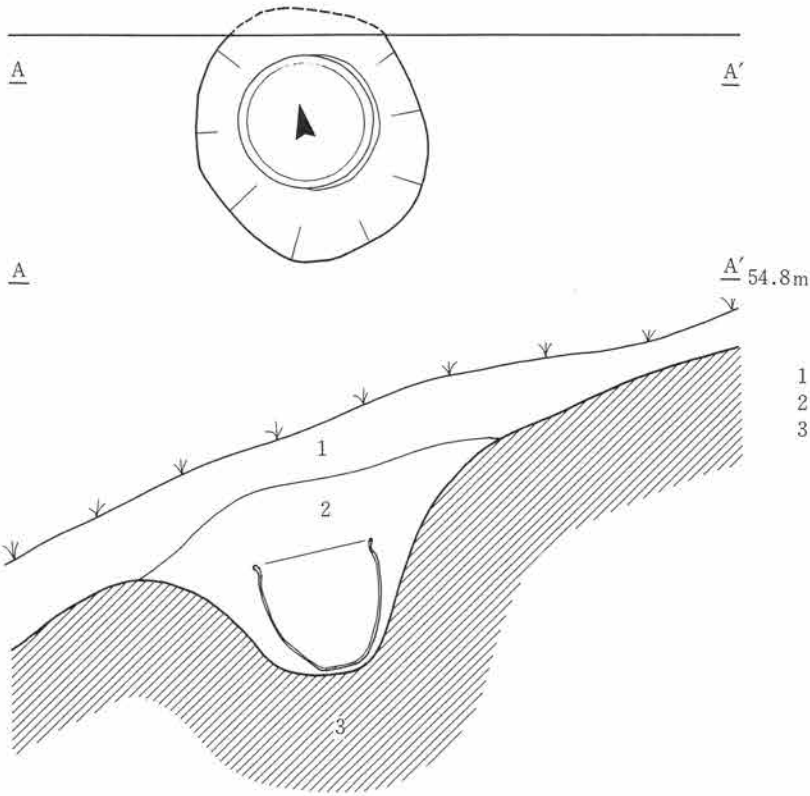


- 1 暗褐色土(表土)
- 2 黄褐色泥岩(地山)
- 3 黄褐色粘土(地山)

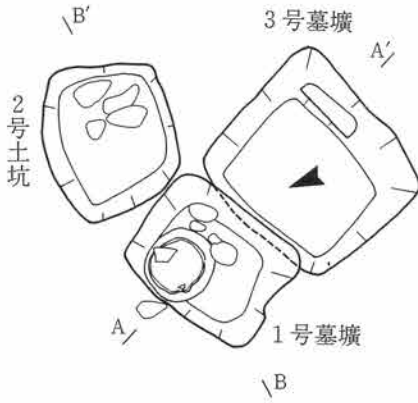
0 1:200 10m



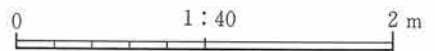
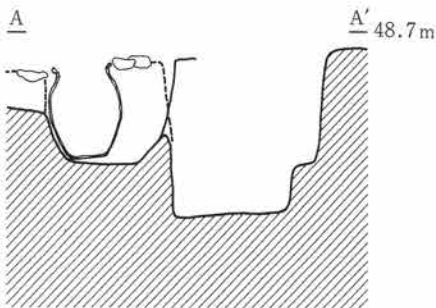
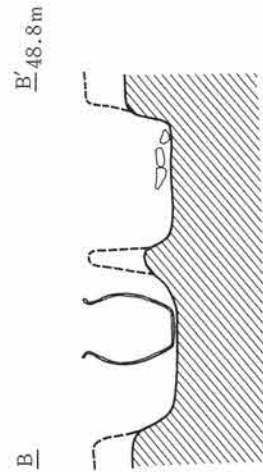
4号墓壙

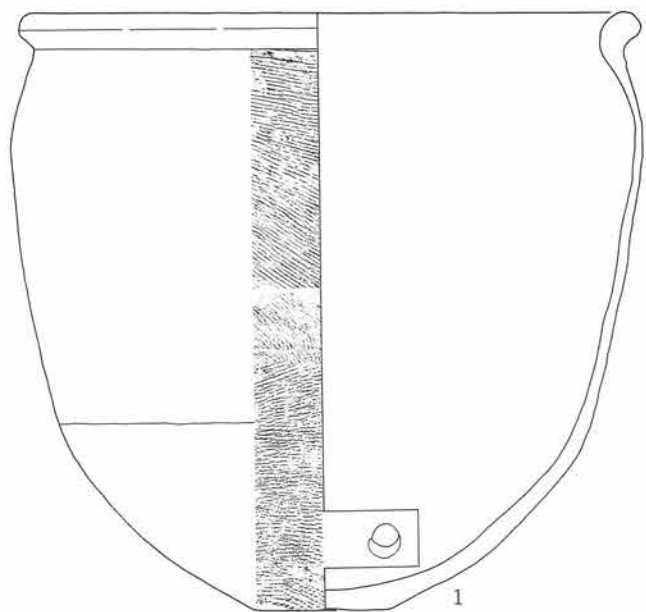


センター杭



幅杭

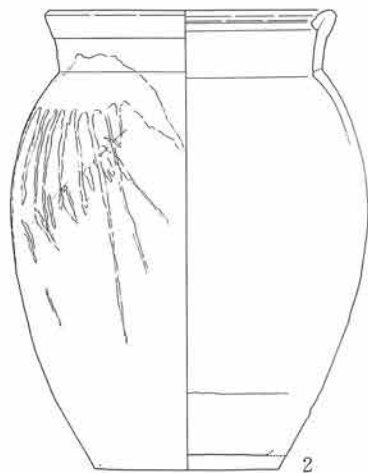




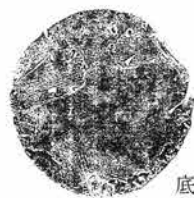
1



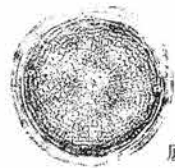
底部外面



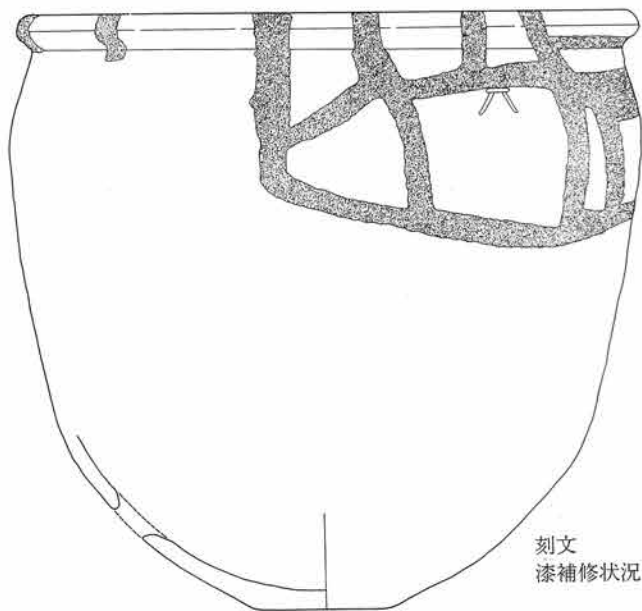
2



底部外面



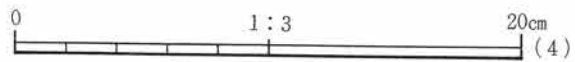
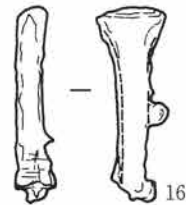
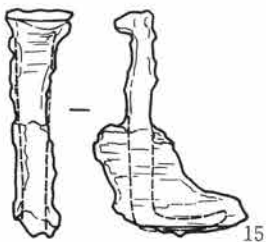
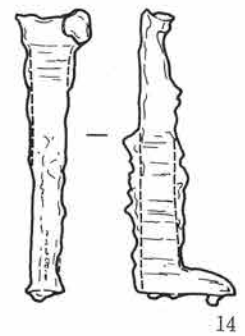
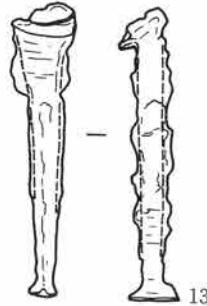
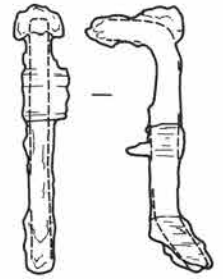
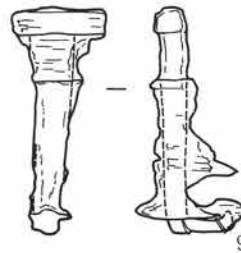
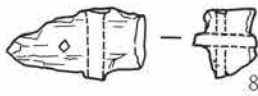
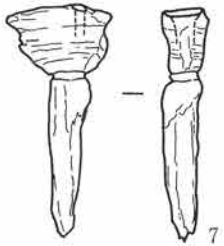
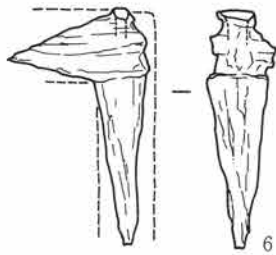
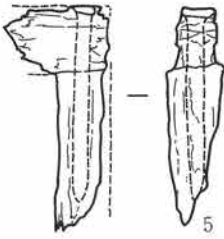
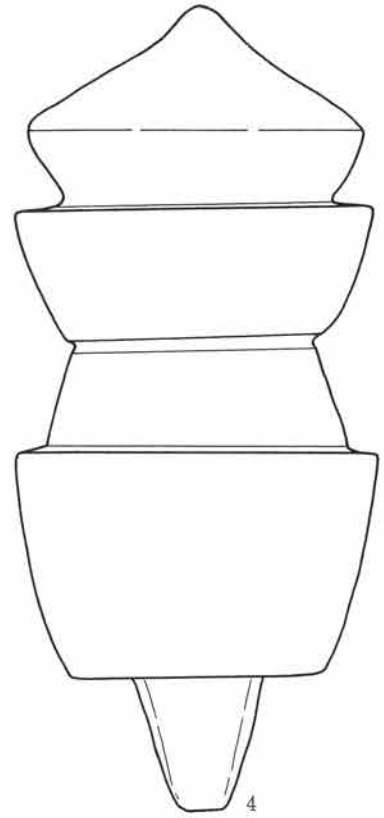
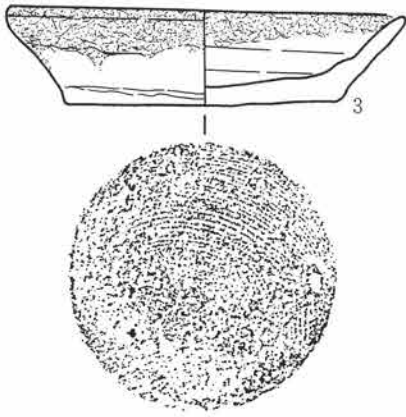
底部内面



刻文
漆補修状況

珠洲焼 大甕(1) 唐津焼 甕(2)

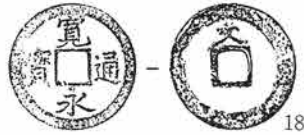
0 1:8 30cm



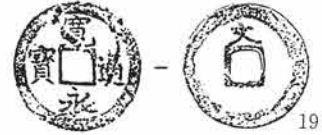
土師質土器 小皿(3) 石製品 宝篋印塔相輪部(4) 鉄製品 釘(5~16) 5~8は3号墓壙・9~16は4号墓壙より出土



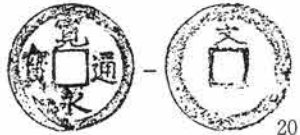
寛永通宝(背文「文」)



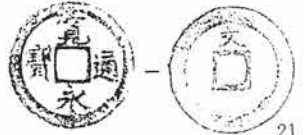
寛永通宝(背文「文」)



寛永通宝(背文「文」)



寛永通宝(背文「文」)



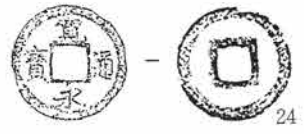
寛永通宝(背文「文」)



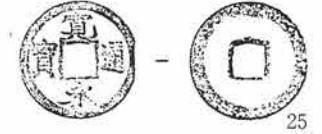
寛永通宝(背文「文」)



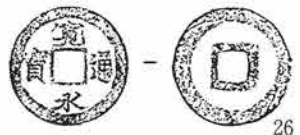
寛永通宝



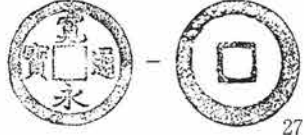
寛永通宝



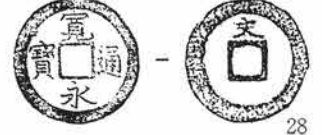
寛永通宝



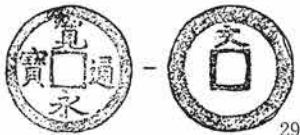
寛永通宝



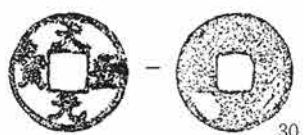
寛永通宝



寛永通宝(背文「文」)



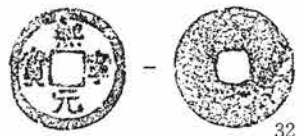
寛永通宝(背文「文」)



天聖元寶



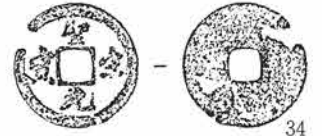
治平元寶(篆)



熙寧元寶



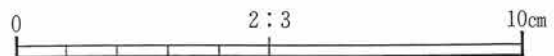
元豐通寶



聖宋元寶



永樂通寶



銭貨 寛永通宝(17~29) 宋銭(30~34) 明銭(35)

17~23は1号墓壙・24~29は3号墓壙・31~35は4号墓壙より出土



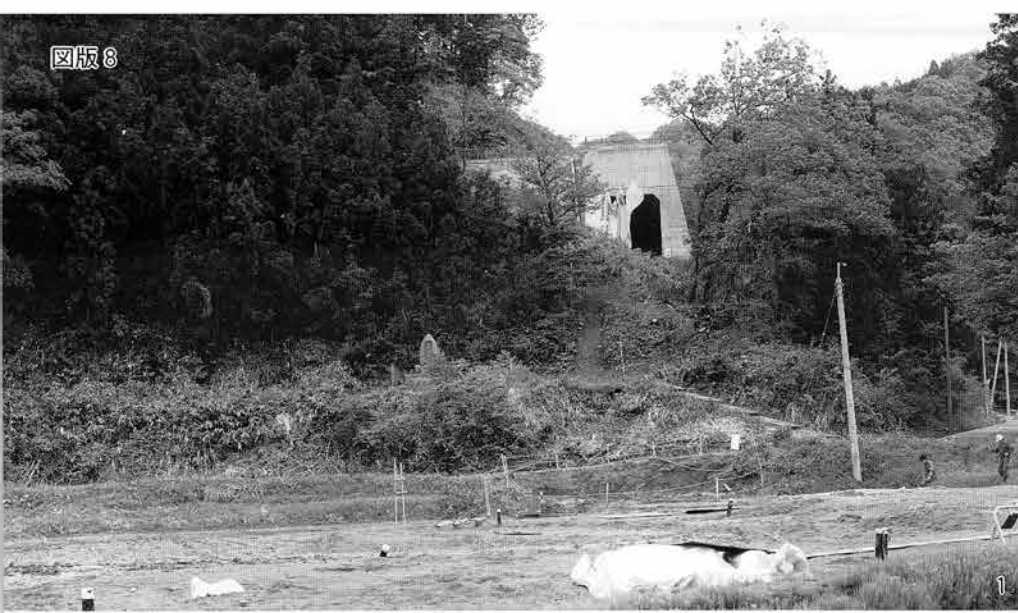
虫川城跡遠景 西から
1979年撮影



虫川城跡遠景 西から
1986年撮影



第一次調査地区近景
南から



1 第二次調査地区近景
西から



2 1 トレンチ壁土層断面
南から



3 第一次調査風景
西から



4 第二次調査風景
東から



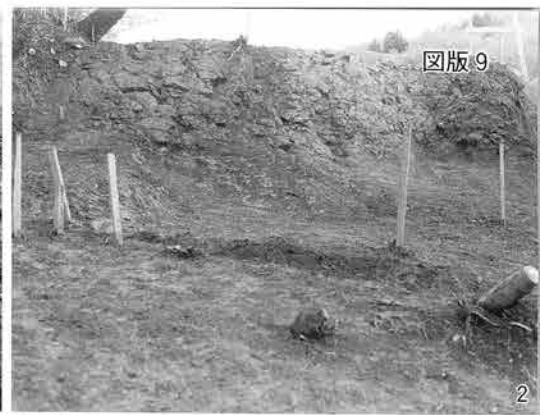
5 槽状郭調査前現況
北東から



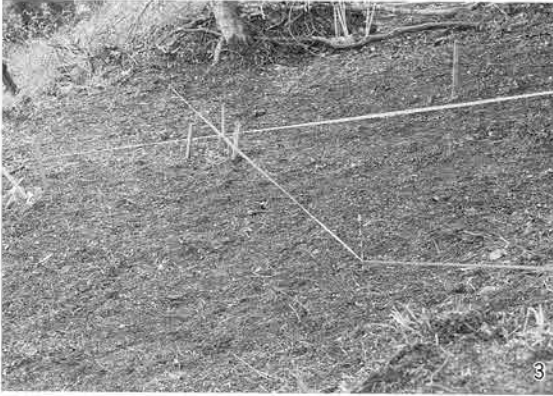
6 槽状郭草木刈払い
西から



1 槽状郭完掘 北から



2 槽状郭完掘 西から



3 帶郭1草木刈払い 東から



4 帶郭1完掘 北東から



5 1号墓遺物確認 南西から



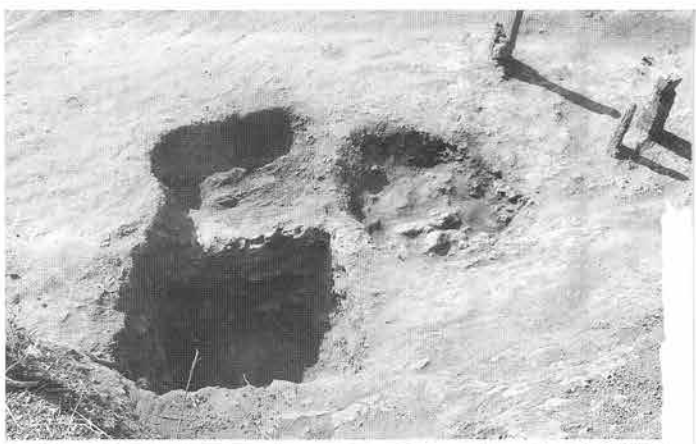
6 1号墓唐津焼検出 南から



7 下段削平地・1号墓
・2号土坑・3号墓
全景 東から



1



3



5



7



6

- 1 1号墓壇・2号土坑・3号墓壇 北西から
- 2 1号墓壇・2号土坑・3号墓壇完掘 東から
- 3 4号墓壇確認 南から
- 4 4号墓壇珠洲焼検出 南東から
- 5 4号墓壇完掘 南から
- 6 赤田家墓地五輪塔・板碑 北西から
- 7 赤田家墓地板碑拡大 西から



1

珠洲焼
大甕(1)
1:8



2

唐津焼
甕(2)
1:8

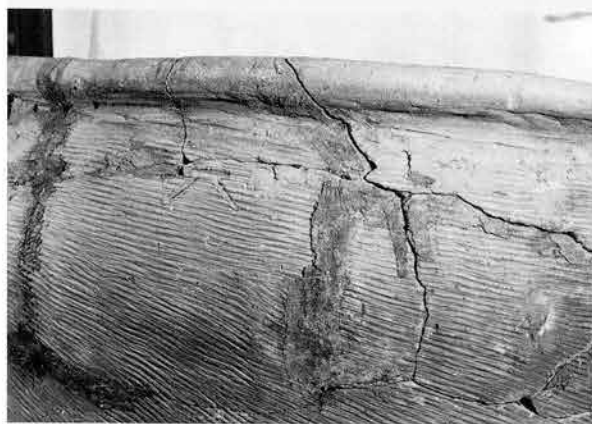


3

土師質土器
小皿(3)
1:2



石製品
宝篋印塔相輪部(4)
1:3



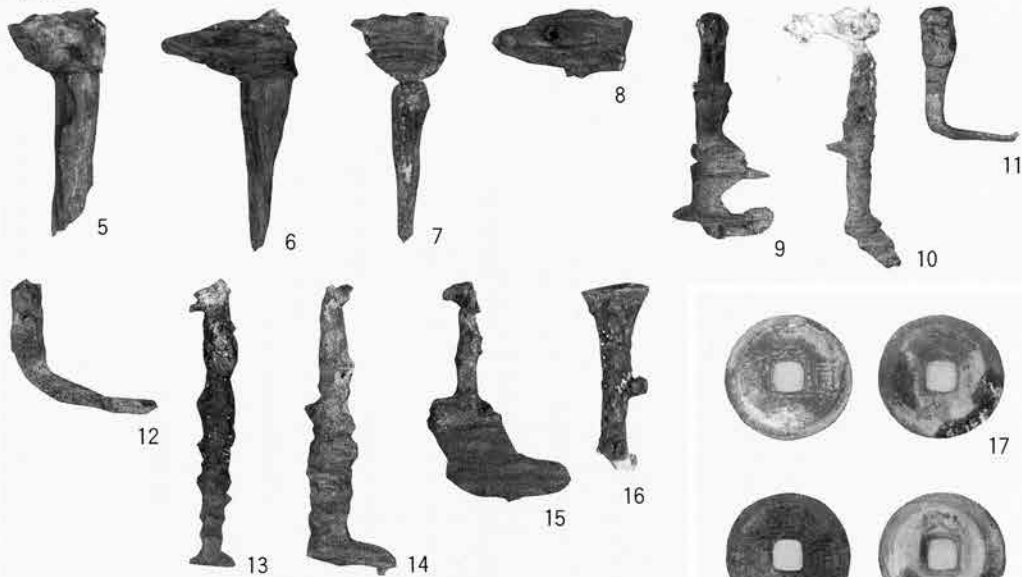
珠洲焼大甕(1)
補修部分・刻文



珠洲焼大甕
補修部分拡大

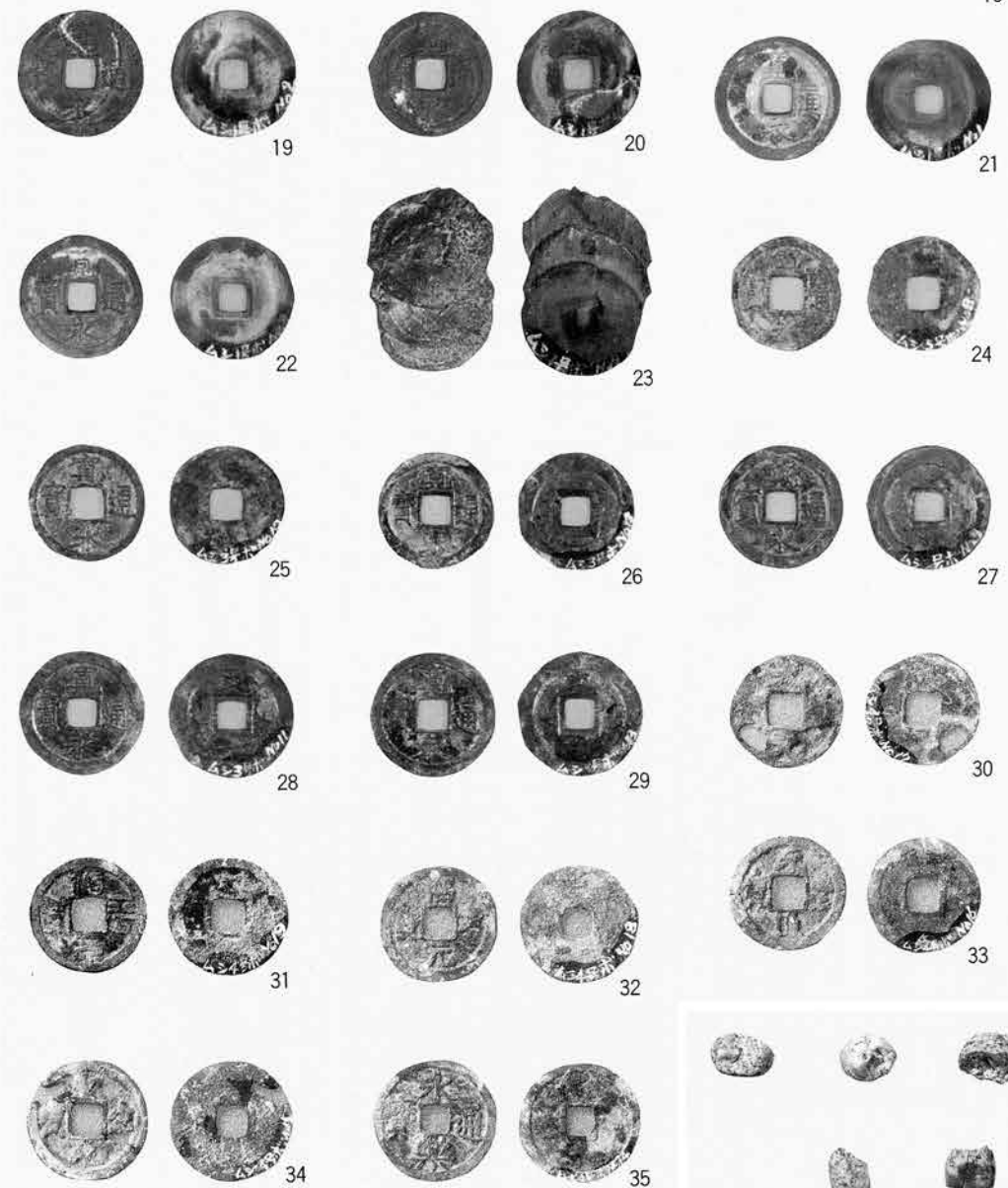


4



鉄製品
釘(5~16)
2:3

5~8は3号墓壙・
9~16は4号墓壙より
出土



銭貨

寛永通宝(17~29)
2:3

宋銭(30~34)
2:3

明銭(35)
17~23は1号墓壙
24~29は3号墓壙
30~35は4号墓壙より
出土

4号墓壙出土の歯
4:5



なか の やま 遺 跡
中 ノ 山

例 言

1. 本報告書は新潟県中頸城郡大潟町大字上小船津浜字中ノ山465番地1ほかに所在する中ノ山遺跡の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は北越北線の建設に伴い、新潟県が日本鉄道建設公団(以下、鉄建公団と略す)から受託して実施したものである。
3. 発掘調査は新潟県教育委員会(以下、県教委と略す)が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下、埋文事業団と略す)が平成4年度に実施した。調査面積は1,020m²である。
4. 整理および報告書にかかる作業は平成6年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたった。
5. 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教委が保管・管理している。遺物の註記記号は「中ノ山」として出土地点・層位等を併記した。
6. 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。作成した図面のうち既成の地図を使用したものについては、それぞれにその出典を記した。
7. 遺物番号は通し番号とし、挿図と写真図版の番号は一致している。
8. 引用文献は著者および発行年を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
9. 本書の記述は小池義人(埋文事業団調査課文化財調査員)、武田孝昭(同文化財調査員)、土橋由理子(同文化財調査員)が担当した。分担は第I章・第II章2・第III章1～3・第V章が小池、第II章1が土橋、第II章3が武田、第III章4が土橋・武田である。このほか、第IV章鉄滓の科学分析についてはバリノサーヴェイ株式会社に依頼した。本書の編集は小池が担当した。
10. 中ノ山遺跡については、1993年刊行の『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』に概要報告があるが、本書の記述ををもって正式な報告とする。よって、上記『年報』と本書とに齟齬のある点は、本書の記述をとるものとする。
11. 発掘調査においては、大潟町教育委員会から多大なご協力を賜った。大潟町大字上小船津浜の竹田誠二氏と善照寺には狐山遺跡採集遺物についてご教示を賜り、あわせて本誌掲載をご快諾いただいた。大字渋柿浜の五十嵐仁八氏には、中ノ山遺跡北西約100mの畑地に中世遺物が散布していたことをご教示いただいた。採集遺物は氏が保管している。ご協力・ご教示を下された方々に厚く御礼申し上げる。

目 次

第 I 章 序 説	63
1. 調査に至る経緯	63
2. 調査体制と整理作業	64
A. 調査体制	64
B. 整理および報告	64
第 II 章 遺跡の環境	65
1. 位置と地理的環境	65
2. 周辺の遺跡	67
3. 歴史的環境	69
第 III 章 中ノ山遺跡	71
1. 調査の方法	71
2. 層 序	72
3. 遺 構	72
4. 遺 物	74
A. 珠洲焼	74
B. 土師質土器	79
C. その他の陶磁器	81
D. 土 製 品	81
E. 石 製 品	82
F. 鉄 製 品	82
G. 鉄 滓	83
H. 銭 貨	83
I. 磔	84

第 IV 章 鉄滓の科学分析	89
第 V 章 ま と め	94
《要 約》	95
《参考・引用文献》	96

挿 図 目 次

第 1 図 中ノ山遺跡の位置	63
第 2 図 確認調査状況図	64
第 3 図 頸城平野北東部の旧地形	66
第 4 図 狐山遺跡採集の四耳壺	67
第 5 図 頸城平野北東部の中世遺跡	68
第 6 図 グリッド設定図	71
第 7 図 土層柱状図	72
第 8 図 中ノ山遺跡全体図	73
第 9 図 SK 2 実測図	74
第 10 図 出土遺物(1)珠洲焼	76
第 11 図 出土遺物(2)珠洲焼	78
第 12 図 出土遺物(3)土師質土器・土製品・石製品	80
第 13 図 出土遺物(4)鉄製品	83
第 14 図 出土遺物(5)銭貨	83
第 15 図 楕円礫のグリッド別重量分布	85
第 16 図 円礫のグリッド別重量分布	86

表 目 次

第1表	礫のグリッド別重量および点数一覧	86
第2表	珠洲焼・土師質土器観察一覧表	87
第3表	遺物のグリッド別点数一覧	88

図 版 目 次

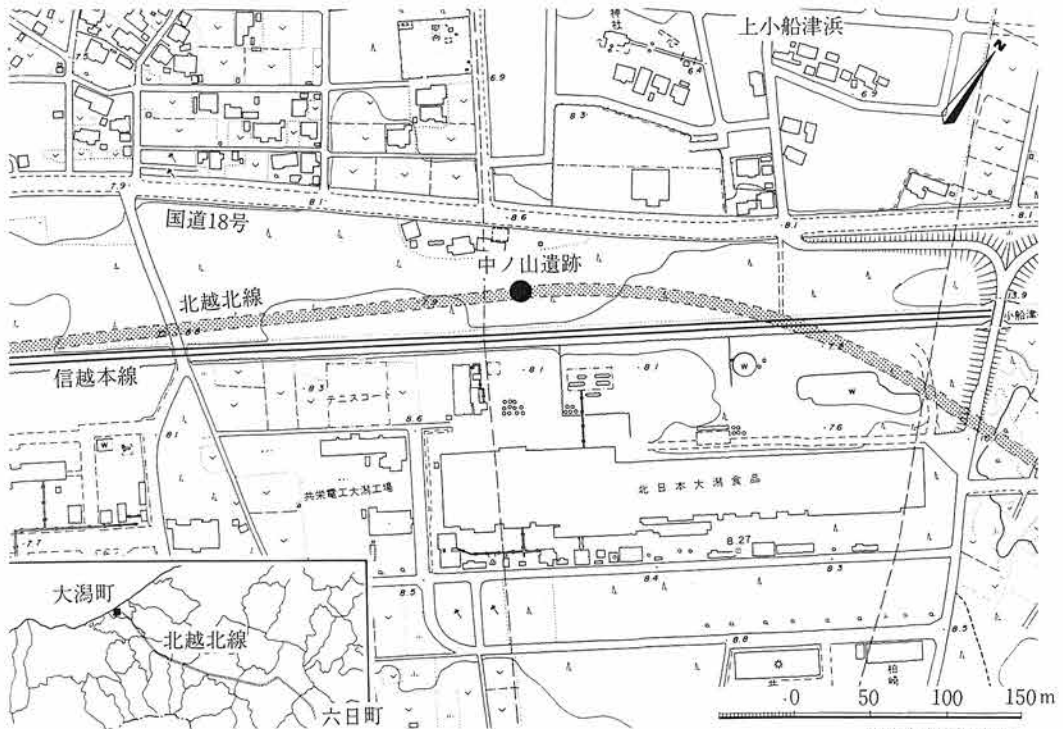
図版1	中ノ山遺跡周辺の景観(航空写真)
図版2	調査区域全景(確認調査後) 調査区域完掘状況 SK2 およびピット群
図版3	調査区域全景(遺跡発見時) 遺物包含層露出状況(遺跡発見時) 土層堆積状況(6B-18) 調査風景 SK2 SK2c土層断面 SK2b土層断面 SK2a土層断面
図版4	SK1完掘 狐山遺跡採集の懸仏 狐山遺跡採集の四耳壺押印 中ノ山遺跡周辺の土地利用状況(航空写真)
図版5	中ノ山遺跡出土遺物(1)
図版6	中ノ山遺跡出土遺物(2)
図版7	中ノ山遺跡出土遺物(3)
図版8	中ノ山遺跡出土遺物(4)
図版9	中ノ山遺跡出土遺物(5)
図版10	中ノ山遺跡出土遺物(6)
図版11	鉄滓の顕微鏡組織(1)
図版12	鉄滓の顕微鏡組織(2)

第I章 序 説

1. 調査に至る経緯

北越北線に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、昭和48年から区間ごとに分布調査等を実施して、鉄建公団と県教委が協議を重ねてきた。中ノ山遺跡が含まれる、浦川原・犀潟間の分布調査は昭和60年の8月に実施されたが、中ノ山遺跡は狐山遺跡隣接地であるが、北越北線が信越本線と並行する地点にあったためか注目されず、協議事項から欠落していた。

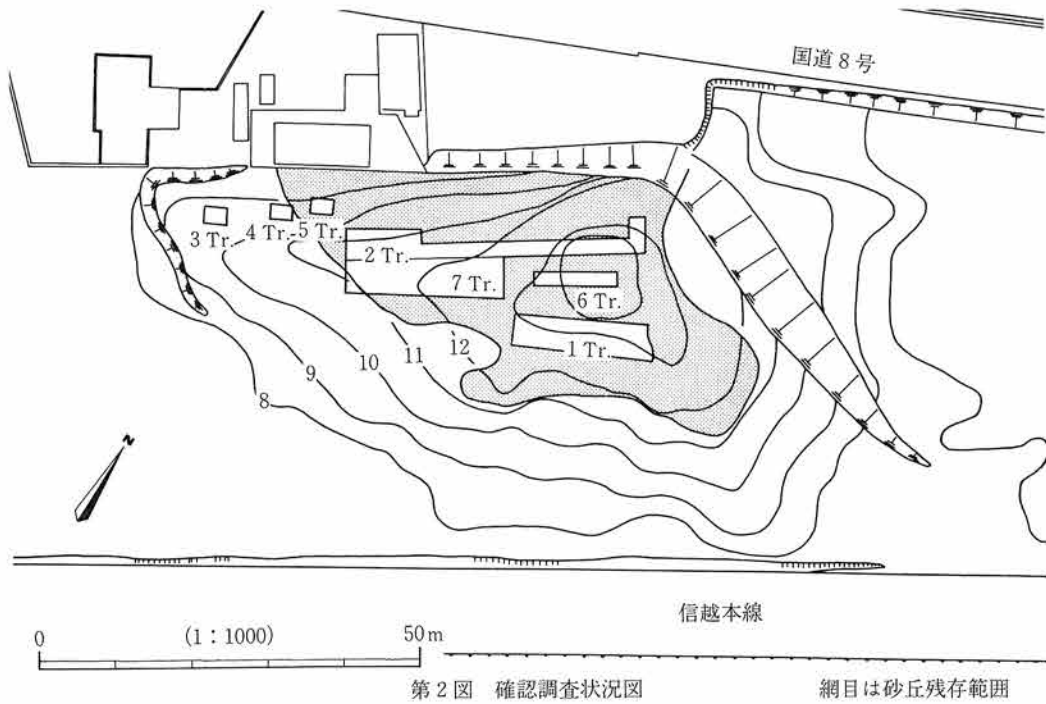
平成4年8月、地元住民から北越北線工事区域内で土器を発見したとの連絡があり、県教委が急遽踏査して中世の土器を採集した。県教委は続いて確認調査を行い、約1,000m²の範囲で発掘調査が必要である旨、鉄建公団に通知し、併せて文化庁あてに遺跡発見を通知した。この時点では、すでに砂丘の削平が進んでおり、遺跡が島状に取り残された状況であった。信越本線を挟んだ南方には狐山遺跡があり、かつて中世の陶器や懸仏などが採集されている。調査地点は中ノ山遺跡と呼称して狐山遺跡と区別するが、両者は同一の砂丘上にあり、不可分なものである。



第1図 中ノ山遺跡の位置

上越都市計画図大湯町1
平成元年7月測図

2. 調査体制と整理作業



第2図 確認調査状況図

網目は砂丘残存範囲

2. 調査体制と整理作業

A. 調査体制

調査期間	平成4年9月16日～10月1日
調査主体	新潟県教育委員会(教育長 本間栄三郎)
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 本間栄三郎)
管理	藍原直木 (専務理事・事務局長) 渡辺耕吉 (総務課長) 茂田井信彦(調査課長)
庶務	藤田守彦 (総務課主事)
調査指導	戸根与八郎(調査課調査第一係長)
調査職員	小池義人 (調査課専門員)・横田 浩(同)・荒川隆史(同)

B. 整理および報告

期間	平成6年11月～平成7年3月
主体	新潟県教育委員会(教育長 本間栄三郎)
整理・報告	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 本間栄三郎)

第II章 遺跡の環境

1. 位置と地理的環境

中ノ山遺跡は新潟県中頸城郡大潟町の海岸砂丘上に位置する。この砂丘は潟町砂丘と呼ばれ、上越市五智から柿崎町鉢崎にかけての日本海沿岸、約20kmにわたり分布している。砂丘は起伏に富んでおり、凸型斜面が海岸線に斜交してほぼ東西方向に並んでいる。砂丘の規模は平均で標高10m、幅1～1.5kmであるが、最も発達しやすい潟町～上下浜駅付近では標高40m、幅2.5～3.5kmである。潟町砂丘の背後には長峰池・朝日池・鶉ノ池・天ヶ池・蜘蛛池などの湖沼群が列をなし、さらに内陸には沖積平野の高田平野が広がっている。

潟町砂丘は、固結度の高い砂層から成る潟町砂層の上に、サラサラした砂の新砂丘砂層が重なる、という二段構造をしている。潟町砂層は第四紀更新世に形成され、およそ東西方向の砂丘列が並び、潟町砂丘の骨格部分を形成している。前述した凸型斜面や、湖沼群はこの砂丘列に沿って存在している。最上部を縄文時代前期～中期の土器を含む黒色腐植土層に覆われている。新砂丘砂層は、層中の縄文時代後期の土器や土師器を含む黒色帯によって、新砂丘砂層Ⅰ・Ⅱに分けられる。砂丘の形成時期は、出土遺物などから、新砂丘砂層Ⅰが縄文時代後期以前、新砂丘砂層Ⅱが鎌倉時代以降と推定されている〔高田平原団体研究グループ(以下、高田団研と略す)1980〕。新砂丘砂層は潟町砂層と沖積層を覆っているが、潟町砂層の厚く堆積している潟町・上下浜付近では欠如するか、薄く堆積しているにすぎない〔高田団研1965〕。

現在の潟町砂丘は豊かな松林に覆われているが、これは江戸時代に植林されたもので、植林前は単調な砂浜が続いているだけであった。また、海岸線の浸食が20世紀に入ってから1年に70cm以上の割合で進んでおり、砂丘の幅を狭めている〔長谷川1988〕。

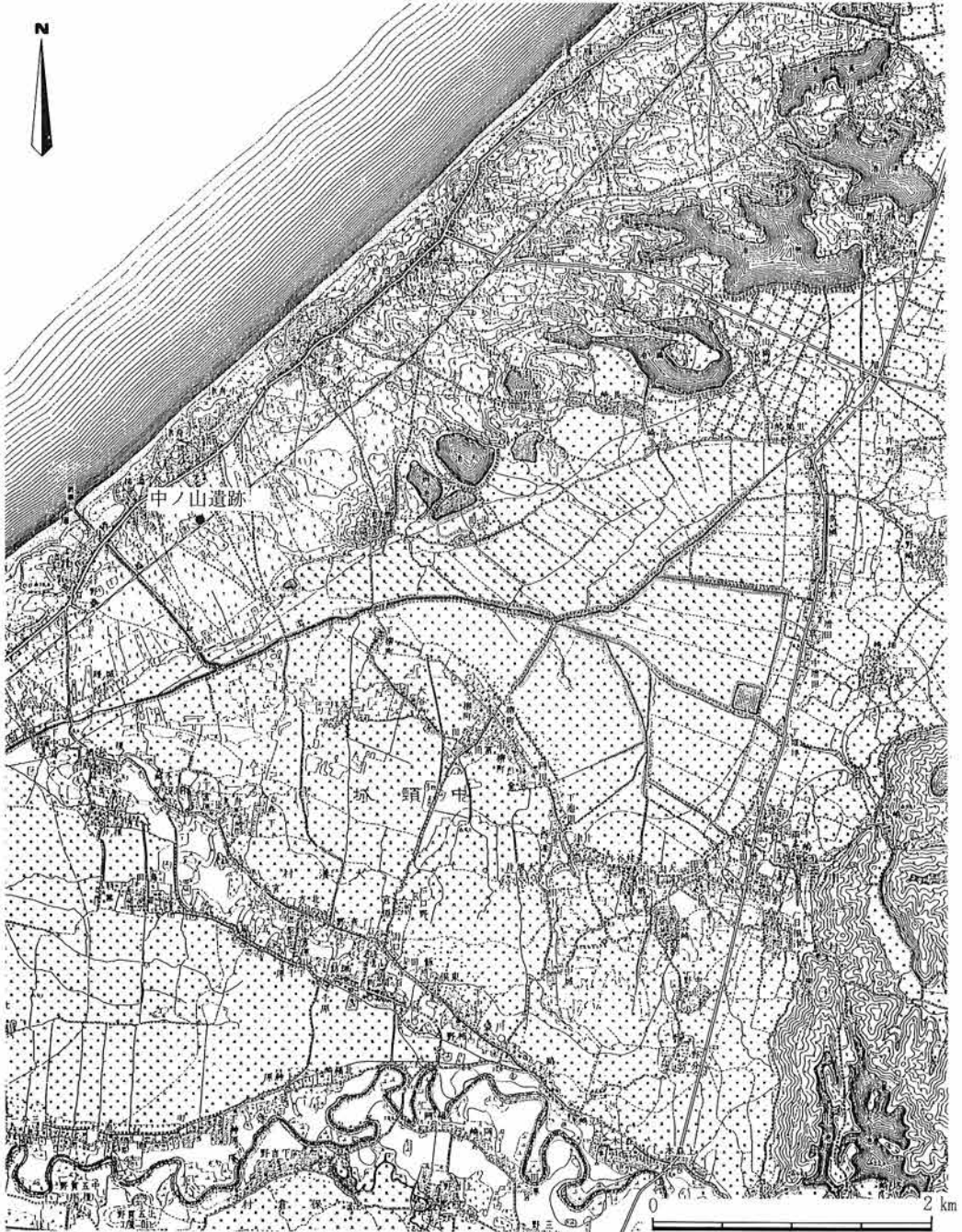
潟町砂丘に続く高田平野は、大潟と多くの湖沼が並ぶ、水はけの悪い湿地帯であった。その上、保倉川が激しく蛇行しながら流れ、しばしば氾濫を起こして周辺の地域に被害を与えた。そのため人々は水害を避けるために、保倉川の作った自然堤防上の微高地に集落を築いてきた。

江戸時代に入ると、この湿地帯を水田化するための土地開発が始められ、古代・中世には漁獲物や塩の中継交易地の役割を果たしていた大潟〔平野1988〕も、干拓されて水田となった。川普請も数多く行われ、新堀川などが開削された。保倉川も昭和初期に流路変更され、現在は水田の中に残る自然堤防が、かつての蛇行する保倉川の姿を偲ばせている。

今日の中ノ山遺跡は日本海海岸部から約650m、新堀川の東方約600mのところにあるが、新

1. 位置と地理的環境

堀川河口付近は市街化が進み、砂丘本来の地形は失われつつある。交通網も整備され、国道18号線とJR信越本線が、砂丘を分断するように海岸沿いに走っている。両者の間には信越本線の防砂林が帯状に存在し、中ノ山遺跡はこの松林中に位置している。標高は10~12m程度である。



第3図 頸城平野北東部の旧地形

大日本帝国陸地測量部
明治43年測図・大正3年発行
25,000分の1原図

る。明治43年測量の地形図(第3図)には、上小船津浜集落の南方に、信越本線を挟んで北西から南東にのびる標高10mほどの高まりが表現されている。これは新砂丘砂層の形成によるもので、信越本線の北側が中ノ山遺跡、南側が狐山遺跡に相当する。

2. 周辺の遺跡

潟町砂丘周辺の遺跡は古くから踏査され、昭和12年刊行の『新潟県史跡名勝天然記念物調査報告第七輯』〔斎藤1937〕には、潟町村地内の13ヶ所の石器時代遺跡が報告されている。その後、室岡博が昭和30年代から精力的に分布調査を行っており、主要な遺跡は『頸城地方の海と海底・海岸遺跡』〔室岡1972〕において、すでに網羅されている。

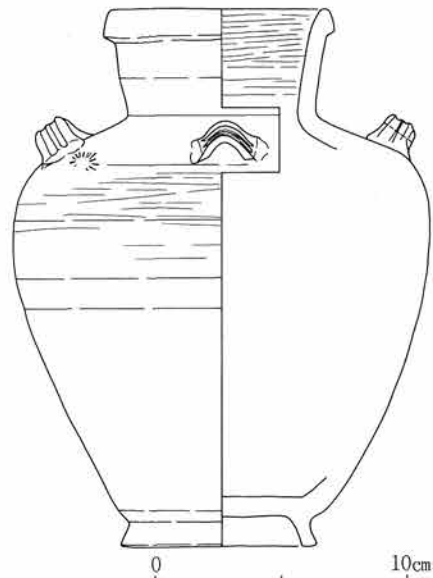
潟町砂丘および高田平野北東部の遺跡は立地条件上4種に分類される〔戸根1981〕。第一は後背湿地に面する砂丘内陸側の遺跡である。縄文時代中期・後期が主体を占め、鶉ノ池周辺を中心に濃密に分布している。最古の例は吉川町長峰遺跡の縄文時代早期の押型文土器であり、大潟町丸山遺跡では前期の羽状縄文系土器が出土している。なお、鶉の池周辺の後背湿地には埋没した砂丘が存在するためか、古墳時代以前の遺跡が点在する。

第二は海岸沿いの砂丘上の遺跡であり、は古墳時代～中世の遺跡が散在する。ただし、大潟町土底浜海岸遺跡・同町下小船津浜遺跡では海面レベル前後に縄文時代の遺物包含層が存在している可能性がある。前掲文献〔戸根1981〕では、潟町砂丘の遺跡を砂丘の堆積状況や地形でさらに7分類しているが、中ノ山遺跡は「(5)独立丘状の新期砂丘上の新期砂丘砂内の黒褐色砂バンドに遺物がふくまれるもの」に相当する。

第三は沖積地上の微高地に存在するものである。頸城村榎井周辺の旧保倉川自然堤防上は古代から中世の遺跡で占められるが、この他は吉川町樋田遺跡・頸城村水久保遺跡等が認められるに過ぎない。

第四は高田平野東側の丘陵と台地、およびこれらの谷底に立地するものである。平等寺川・吉川等に面したの丘陵裾には、現集落に重複して石塔・塚等中世遺跡が多数存在し、山間の坪野集落付近にまで続く。また、原之町周辺には時期は不詳だが、製鉄遺跡がまとまって分布している。

中ノ山遺跡周辺の中世遺跡は断片的な資料にとどまる。上小船津浜海岸遺跡では製鉄炉の検出が〔室岡1988〕、下小船津浜遺跡では備蓄銭約400点の出土



第4図 狐山遺跡採集の四耳壺

2. 周辺の遺跡



が報告されている〔小池1992〕。また、南接する狐山遺跡では、かつて瀬戸四耳壺(第4図、図版4)、懸仏(図版4)、人骨が納められた甕、五輪塔の火輪が出土している〔大場1991〕。

3. 歴史的環境

大潟町を含む頸城地方は古代より交通の要衝であり、越後の政治・経済の中心地として繁栄してきた。

古代の頸城地方について文献を見てみると、『国造本紀』に「久比岐国造 瑞籬朝御世、大和直同祖御戈命定_二賜国造_一」という、崇神朝における国造任命の記事が見える。これがそのまま史実であるとは言い難いが、頸城地方が古くから開けていたことは推測できる。また『続日本紀』大宝2(702)年3月17日条には「分_二越中国四郡_一属_二越後国_一」とあり、頸城郡がこの年に越後国に編入された〔米沢1980〕。さらに『倭名類聚抄』に「越後国 聖德太子御宇」とあり、明確な位置は不明ながら頸城郡に古代越後の国府が置かれていた。また同書には頸城郡にあった「沼川・都宇(都有)・栗原・原木(荒木)・板倉・高津・物部・五公(五十公)・夷守・佐味」の10郷が記されている。古代から現代までの土地の支配関係等の変化により地名が変化あるいは移動するため、中世文書の郷の範囲や現地名による地域比定は必ずしも正確な範囲を示すものではないが、現在では、おおむね沼川郷は糸魚川・能生付近、都宇郷は直江津付近、栗原郷は新井市栗原付近、板倉郷は板倉町付近、高津郷は上越市から三和村にかけて、物部郷は清里村付近、五十公郷は三和村・安塚町付近、夷守郷は頸城村・三和村付近、佐味郷は柿崎町付近に比定され、大潟町は夷守郷の一部とされる〔木村1984・山田1986〕。また、この「夷守」という地名から、頸城地方は畿内王権にとって、国造制・屯倉制・部民制確立以前の最前線基地であったのではないかとも考えられている〔桑原1986〕。

10世紀以降、寄進地系荘園が発展し荘園と国衙領が併存していくようになるが、一般的に国衙領は国衙周辺に集中し、交通の要地等、国の要衝に配置されたとするように、越後の荘保についても、直江津及び関川水系をおおう頸城地方の大部分は国衙領で、所在不明の保を除けば越後全体の半数近くの保が頸城郡にあり、阿賀北地方がほとんど荘園なのに対して、頸城地方で実在が明らかな荘園は佐味荘のみであった。この佐味荘は佐味郷と関連するが『吾妻鏡』文治2(1186)年3月12日条の「関東御知行国々内乃貢未済庄々注文」の中の「鳥羽十一面堂領預所大宮大納言入道家 佐味庄」という記事が史料上の初見であり、平安末期に成立した鳥羽十一面堂を本所とする荘園であったことがわかる。佐味郷については、『延喜式』に「越後国 駅馬 東海八疋、磐石、名立、本門、佐味、三嶋、伊神二疋、渡戸船三疋、 伝馬 頸城、吉幸、」とあり、佐味郷に駅が置かれていたとともに、日本海沿いに陸路が通じていたことを示している。

文治元(1185)年8月、越後は源頼朝の知行国に充てられ、実質的な支配権は途中北条氏に移っ

3. 歴史的環境

たものの、ほぼ鎌倉時代を通して将軍知行国、すなわち関東御分国として存続し、建武新政府のもとでは新田義貞に支配権が移り、室町時代には上杉氏が守護に任じられ、16世紀末までその支配が続いた。上杉家支配も終わりに近い、慶長2(1597)年に作成された「越後国郡絵図」(米沢上杉家蔵)は、文禄4(1595)年の検地をもとにつくられた中世から近世初頭の数少ない史料のひとつであり、現大潟町域を含む頸城郡の一部が現存している。これは、町村別に、御料所(上杉家の直轄地)と知行主の別、町村名、田の等級、本納高、縄ノ高、家数、人数などが記されている。この絵図の中で大潟町域は美守郷に属し、以下のような13町村が記載されている。

四屋浜村(四ツ屋浜)・行ノ浜村(犀潟)・おかふ山村(渋柿浜)・志ふ柿村(渋柿浜)・上小船渡村(上小船津)・下小船渡村(下小船津)・上土底浜村(土底浜)・下土底浜村(土底浜)・くとの町(九戸浜)・九頭はま(九戸浜)・雁子はま(雁子浜)・長崎村(長崎)・内雁子村(内雁子)(カッコ内は推定される現在の地名)

このなかの浜辺の村々は、本納(年貢)が縄ノ高(検地高)より多くなっており、田畑以外の生業をもっていたことがわかる。加えて江戸時代前期の「大湊中谷内大潟四度御竿入高帳」[桑原1991]には、家数・人数のほか、舟数・塩屋等も記載されており、おそらく中世においても海辺の村々は製塩・漁業を生業としたものと思われる。

頸城地方は、慶長3(1598)年に上杉景勝が秀吉により会津へ転封になった後、いく度か領主が変わり、幕藩体制確立期の混乱を見せるが、寛永元(1624)年、二代将軍秀忠の孫の松平光長が入封し、一応の安定を見せた。このころの大潟町域は潟町砂丘上に立地する下美守郷に属するところと、それ以外の大湊郷に属するところに分かれていたが、この大湊郷の人々によって、光長時代の寛永14(1637)年から延宝6(1678)年の間に、自然の流れに人の手を加えて排水路(潟川)を作り、さらに排水機能を高めるため保倉川に新たな流路を作るという方法で、旧大潟周辺に1万6,000石余の新田がつくられた。しかし、人為的につくった排水路(潟川)がうまく機能しなければ、干拓地が湛水してしまうため、たびたび大がかりな「浚普請」を続けなければならなかった上、延享4(1747)年の大洪水や、寛延4(1751)年の「宝暦地震」でも大潟は甚大な被害を受けた。そのため、新たに行野浜と渋柿浜の間を通り直接日本海に注ぐ排水路の開削が計画され、宝暦6(1756)年、工事に着工し、翌宝暦7(1757)年4月に完成した。これが新堀川である。しかし、完成直後の6月はじめ、暴風雨で新堀川の岸壁はすべて崩れ去り、延享4年以来、収穫がほとんど無い飢饉状態が続くこととなった。新堀川再開削は、それから約80年後の天保6(1835)年に行われ、この間の享和年間に潟町砂丘に松が植林され防砂に役立ち、開削は成功し日本海への排水が可能になった。

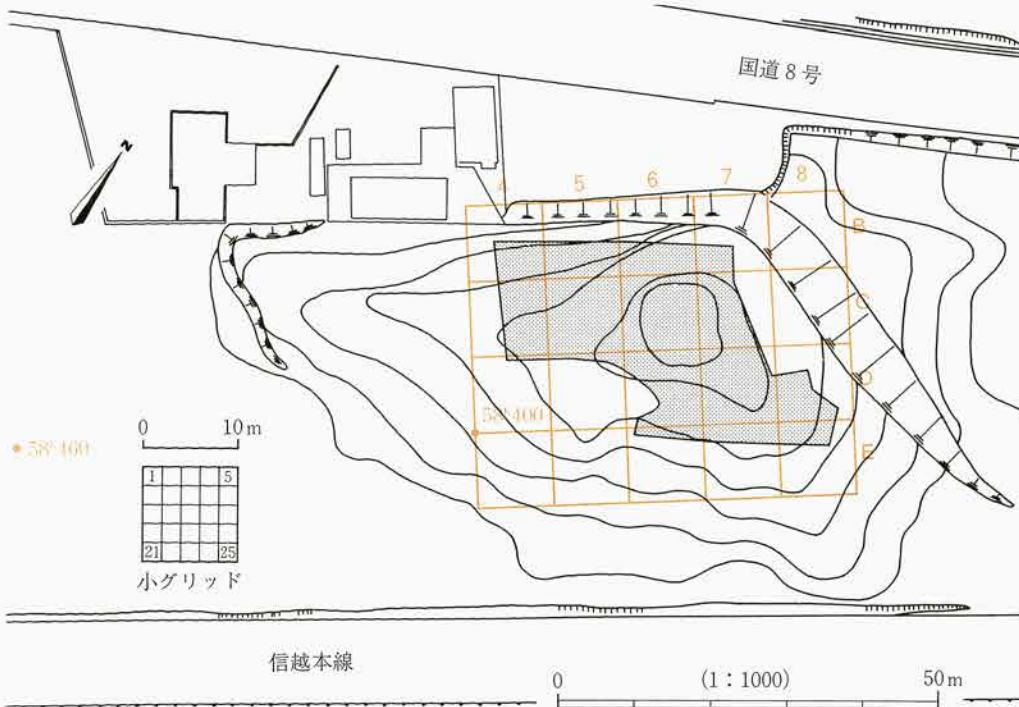
また、江戸時代には幕府が佐渡金山を天領としたことにより、御用金の輸送や、佐渡送りの通行などに利用したため、頸城地方を通る北国街道が会津街道・三国街道とともに佐渡路として重視された。このため、宿場のなかった黒井・柿崎間にも宿場がつくられることになり、万治3(1660)年に潟町宿が創設された。

第III章 中ノ山遺跡

1. 調査の方法

グリッドの設定(第6図) 遺跡内に打設されていた北越北線のセンターを用いて、これをグリッドの基準とした。58 K 400杭(x : 134,608.384, y : 16,224.519)と58 K 460杭(x : 134,568.540, y : 16,269.379)を結ぶ方向を基準線として58 K 400杭を起点に10mの方形を組み、これを大グリッドとした。このため、グリッドの長軸方向は真北から48度23分西偏している。大グリッドは長軸方向を算数字、短軸方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。大グリッドはさらに2m四方に分割して1~25の小グリッドとし、D5-2こように表記した。

調査の概要 発掘調査は平成4年9月16日~10月1日の間に実施した。砂丘地の発掘調査は乾燥によって掘り方の維持が困難であるため、水道を敷設して随時散水を行った。しかし、ランドシートは信越本線に飛散する危険性を考慮し、使用を控えた。狭い調査区域には、確認



第6図 グリッド設定図

1. 調査の方法

調査による深さ1m程のトレンチが7ヶ所残されていたため、地山に達するまで作業の障害となり、中央部を貫く砂層堆積状況の観察は不可能であった。調査はおおむね手作業で行ったが、表土除去作業に重機を、遺物包含層発掘の一部にベルトコンベヤを使用した。

2. 層 序

砂層の堆積は一様ではなく、地点によって違いが大きいものの、基本的に共通する層序が認められる。層序は地表から、I層：茶褐色砂、II層：淡灰褐色砂、III層：黒褐色砂、IV層：黄褐色砂、V層：暗黄褐色砂、VI層：黄褐色砂となり、中世の遺物は厚さ約20cmのIII層に含まれている。I～VII層は新砂丘Ⅱに対比されるものであろう。発掘調査ではVII層上面を最終的な遺構確認面としたが、VII層上面は地表面と異なって、北に向かって傾斜している。なお、湯町砂層の分布は認められない。

3. 遺 構

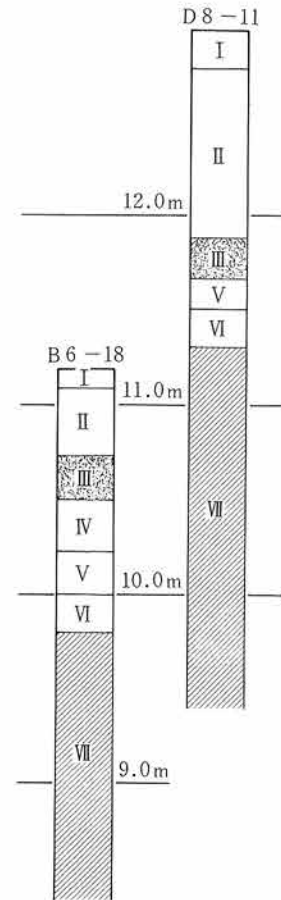
遺構は調査区域の西半に集中しており、44基のピットと2基の土坑が検出された。すべてIII層中から掘りこまれたものと考えられるが、VII層上面で遺構の確認を行った。ここでは遺物が出土している遺構についてのみ説明する。

SK1 (第8図、図版4)

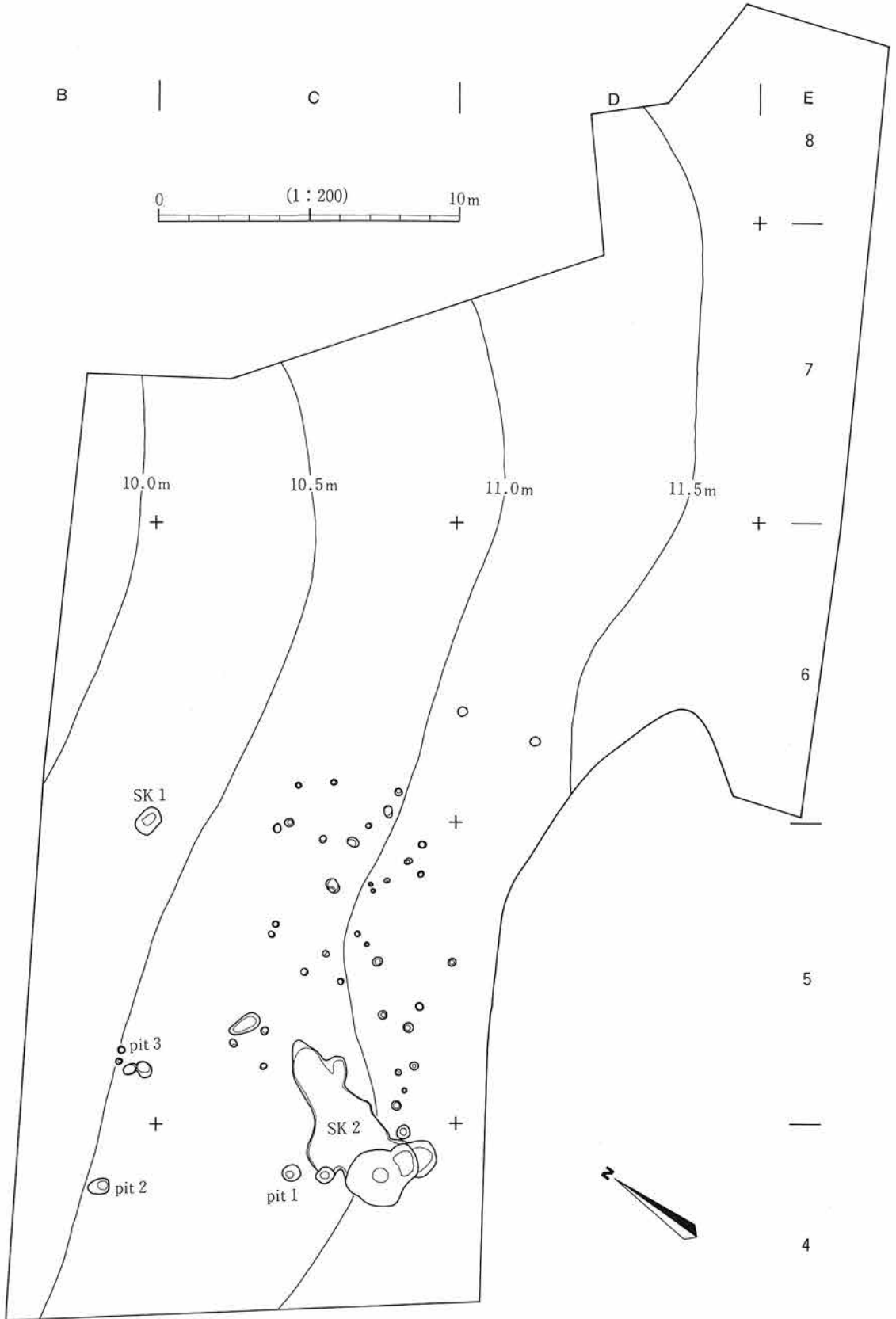
B6-21付近に位置する隅円長方形の土坑である。長径92cm、短径67cm、深さ約50cmを測る。覆土から珠洲焼壺胴部片2点(第11図18ほか)が出土している。

SK2 (第9図、図版2・3)

C4・5に位置する土坑群である。覆土断面には切りあいが認められるため、分割して北からSK2a・b・cと称する。SK2aおよびSK2cがSK2bを切り込んだ重複関係にある。SK2a・b西縁とSK2c底部付近には焼土を含む土層が堆積している。SK2aおよびSK2bの底面はいくぶん硬化し、淡く赤化している。SK2cの覆土から、珠洲焼壺片1点(第10図10)・珠洲焼壺または甕の胴部片1点(第11図35)・陶製円盤1点(第12図53)・釘2点(第13図65ほか)・鉄滓1点(図版8-74)が出土している。

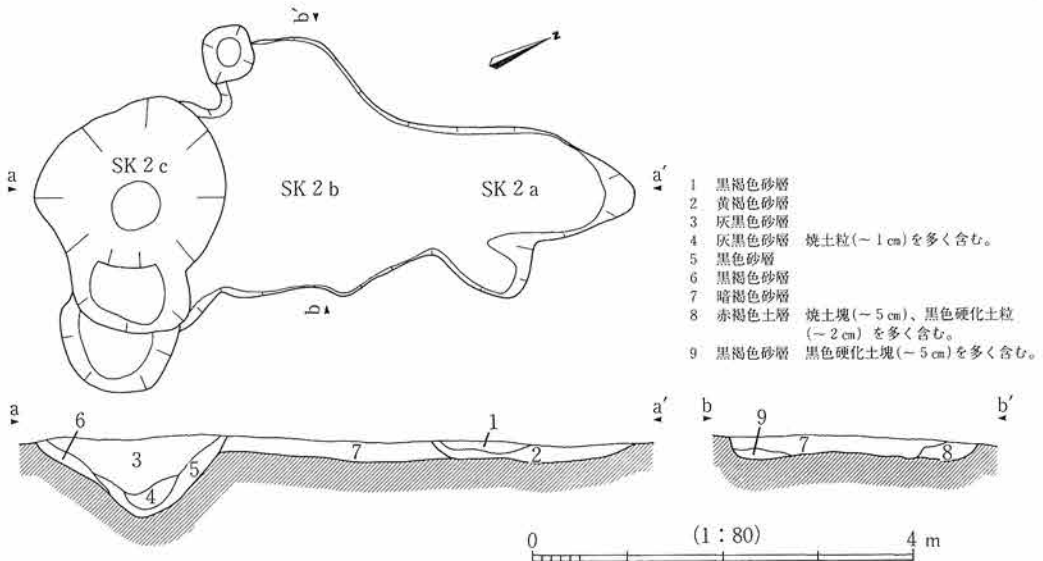


第7図 土層柱状図



第8図 中ノ山遺跡全体図

3. 遺 構



第9図 SK 2実測図

pit 1 (第8図)

C 4-15に位置する。径約60cm、深さ約70cmのピットである。珠洲焼壺胴部片1点が出土している。

pit 2 (第8図)

B 4-22に位置する。長径約70cm、深さ約50cmのピットである。鉄滓片が1点出土している。

pit 3 (第8図)

B 5-22に位置する。径25cm、深さ約20cmのピットである。用途不明の鉄製品片が1点出土している。なお、C 5-20・25およびC 6-15に位置する6基のピットは、方形柱穴列を構成している可能性があるが、ひとつの遺構として説明することを控える。

4. 遺 物

A. 珠洲焼(第10・11図、図版5・6)

珠洲焼は出土した遺物の大半を占める。すべて破片で、完形に復するものはないが、甕、壺、鉢の基本三種と、瓶子がある。認識可能な個体数は、甕10点、壺10点、鉢24点、瓶子1点である。このほかに個体の認識の不可能な甕あるいは壺の体部破片が92点ある。

甕(1-3)

1の口縁は短く外反し、端部を丸く収める。頸部外面は粘土帯を接合した際の籠状器具と丸棒状器具の痕が残る。体部外面には指頭圧痕がある。内面には円形押圧痕が見られるが規則性

はない。

2はくの字状に短く外反した口縁部片である。口縁端面は平直にナデられている。外面屈曲部には屈折の際に用いた丸棒工具の痕が明瞭に残る。

3は口縁部が短く、屈折が緩いものである。内端は丸みをもち、外端は横ナデによって稜が作り出される。

壺(4~10)

4は小破片のため形状を知りえないが小壺であろう。内外面ともロクロナデによって整えられている。

5は口縁部が外反し、ナデにより外端が厚く膨らむ。口縁部内面と体部外面には降灰釉がかかる。

6は頭部が強く屈折する広口のものである。鋭くくびれた頸部が、外反する口縁部へと続く。口縁部は丁寧に横ナデされ、端部を角状に作り出す。

7は口縁がわずかに外反し、端部が外方に引き出されている。

8は口縁外端が引き出され、その下端は強くナデられ、断面が三角状につくられている。口縁端面と体部外面に降灰釉がかかる。

9は肩部片で、丸みをもって張り出す形をしている。内面に円形押圧痕が明瞭に残る。叩き目は上半が水平方向に、下半が矢羽状に打たれる。外面には降灰釉がかかっている。

10は肩部片である。内外面ともロクロナデで、内面は篋状器具の痕が著しい。外面上部に降灰釉がかかる。

甕および壺の体部・底部破片(11~23)

いずれも外面は叩き目である。叩き目は平行叩き目と矢羽状叩き目の2種類に大別できる。平行叩き目については条痕の密度の違いで、さらに細別できる。3cmあたり15~18条のもの、9~10条のもの、7~8条のもの、の3分類である。量的には矢羽状叩き目のものは5点にすぎず、残りはすべて平行叩き目である。平行叩き目の中では9~10条のものがもっとも多く見られる。

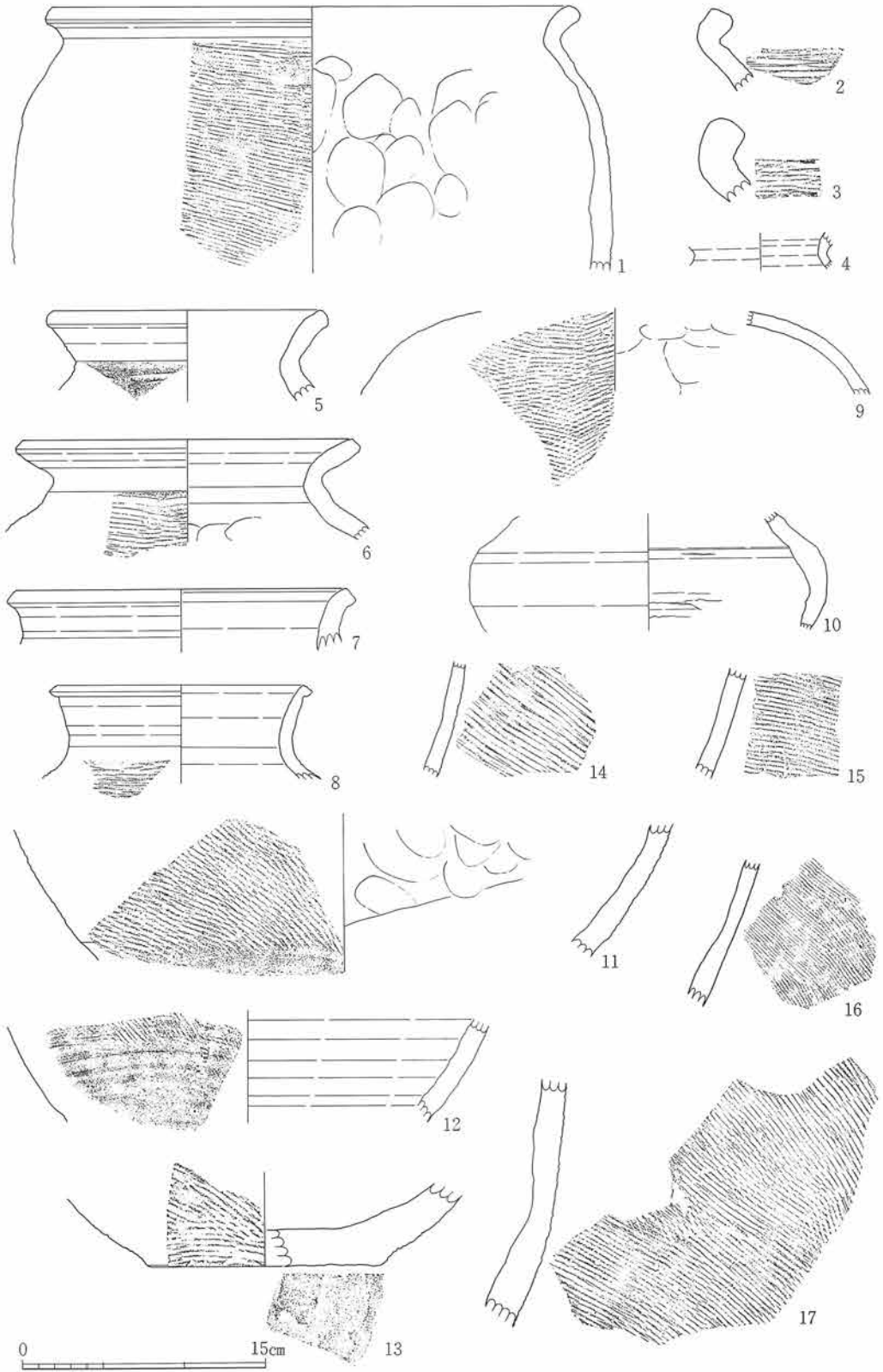
11の内面は、横ナデ後に左から右及び下から上への押圧痕が見られる。外面は右下がりの叩き成形を行った後、下部を横ナデしている。

12は内外面ともロクロナデで、内面には凹凸が目立つ。外面上端の叩き目は浅い。破損面とその周辺にスス状の炭化物が付着しており、修復した可能性もある。

13の底面は砂底で、周縁のみ平滑にナデられる。外面の叩き目は体部では右下がりであるが、底部では水平となる。

14は内面に明瞭な押圧痕が認められる。焼成堅緻で器厚が比較的薄い。

15は内面の押圧痕の上に横ナデが施されている。



第10图 出土遺物(1) 珠洲焼

16は押圧痕により、内面の凹凸が著しい。外面の叩き目は細かく、3cmあたり17条である。焼成堅緻で、器厚は比較的薄い。

17の内面は押圧痕の上に横ナデが見られる。外面上半部に接合痕が残る。

18は外面矢羽状叩き目である。内面は押圧痕の後、ナデられている。

19・20は底部付近の破片と思われるが、19は叩き目が浅く、不明瞭である。内面下部には粘土帯接合による膨らみがみられる。19は内面の押圧痕の上に横ナデが施されている。

21は内面の押圧痕の上に、多方向のナデが認められる。外面左下には器壁が一部剥落し、底部成形時の叩き目が見える部分がある。

22は外面下端に接合痕があり、それより下は急激に厚みを減じ、叩き目が水平に転換する。内面は押圧痕の上にナデが見られる。

23の外面は、3cmあたり14条の細かな叩き目である。内面には横ナデが施されている。

片口鉢類(24~35)

24は体部がやや張りをもって直線的に開き、口縁基部からは弱く立ち上がる。口縁端部は丁寧なナデによって内削ぎに面取りされている。片口部分には片口作出の際の指頭痕が内外面に認められる。おろし目には8条1単位の櫛歯状原体が用いられている。おろし目の始点付近は明瞭に凹む。口縁部の残存度は7分の1強で、直径約30cmと推定される。

25は破損面に漆接ぎの痕跡が見られる。内面はよく摩滅している。おろし目はかすかに残る程度であるが原体数10条1単位で幅約3cmである。

26はおろし目をもたない素文である。内外面ともロクロナデで、その痕跡が鋭く篋状器具を用いていると思われる。

27は口縁部でやや内彎し口縁端部で平直に面を取り鋭い稜をもつ。おろし目の有無は不明である。

28は体部が直線的に立ち上がり口縁部に近づくにつれ厚みを減じつつ外側に若干開く。口縁端部はナデの稜が明瞭である。内面のおろし目は10条以上である。

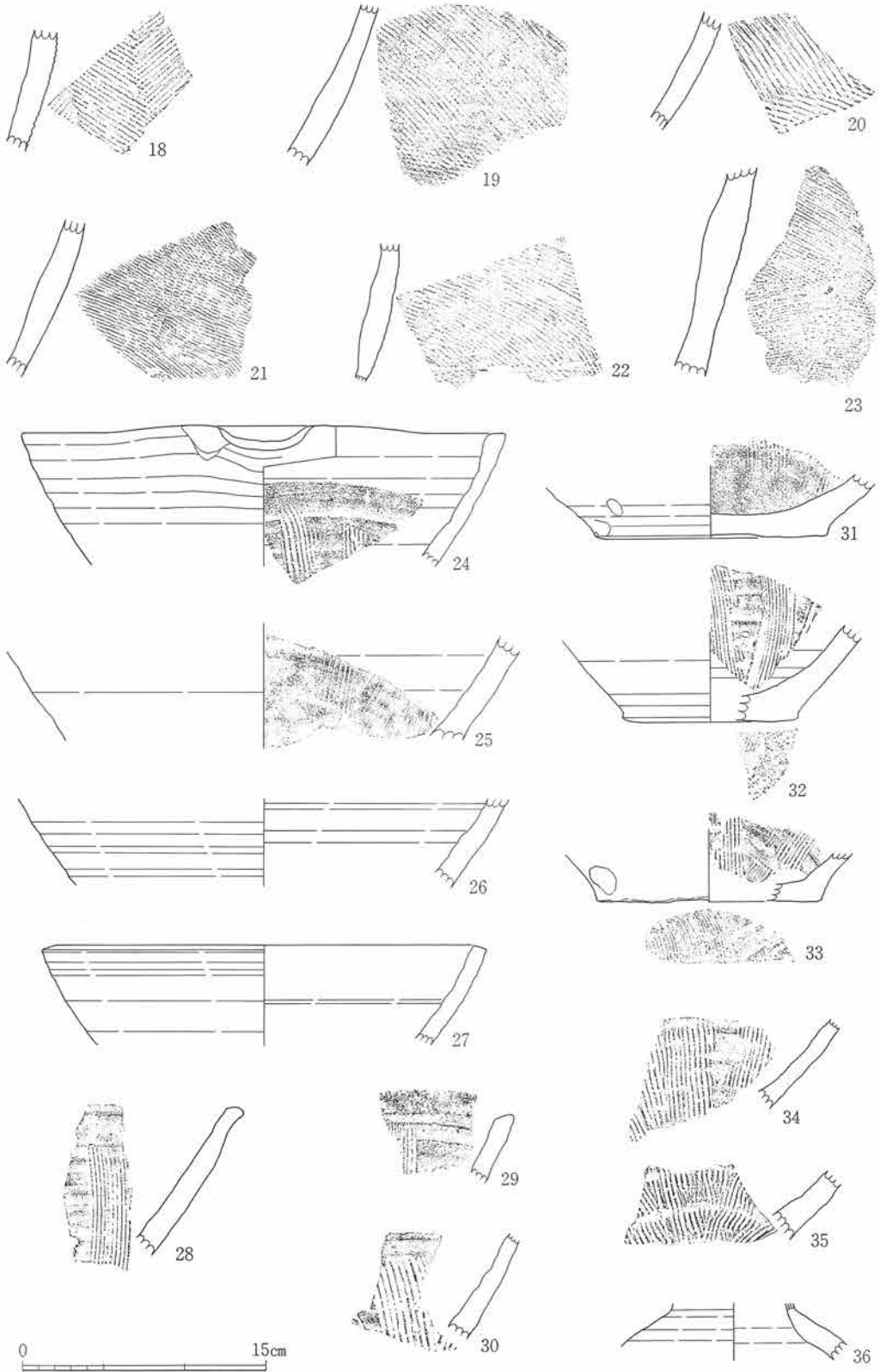
29は口縁端部の面が内傾し、内外面とも丸くなっている。おろし目の1単位と全体の条数は不明。おろし目の始点付近は明瞭にくぼむ。内外面にスス状の炭化物がわずかに付着し補修した可能性がある。

30は、外面の一部にスス状の炭化物が付着している。おろし目は特に深く、原体数9条1単位で幅約3.3cmである。

31は底面の静止糸切りのあと、周縁部に篋ケズリが施されている。底部外周はナデによってくぼみ、指頭痕が認められる。内面にはひだ目が明瞭に残る。おろし目は10条1単位の原体を使用している。

32の内面のおろし目は、原体が10条1単位で幅約2.4cmである。体部外面はロクロナデで、

4. 遺 物



第11図 出土遺物(2) 珠洲焼

明瞭な稜線を2本残す。底部は中心部を除き、ていねいにナデられている。底部下縁には器体を持ちあげた際の指頭圧痕が残る。

33は、底面に静止糸切り痕および板状圧痕を残し、周縁はナデによる「はみ出し」が見られる。内面には原体が12条1単位で幅約2.8cmのおろし目が見られる。底部下縁に器体を持ち上げた際の指頭圧痕が残る。

34の内面は摩滅しており、原体が11条1単位で幅約3cmのおろし目がある。

35も外面の一部にスス状の炭化物が付着する。おろし目は内面一面にあり、原体の条数は確認できない。内面は摩滅している。

瓶子(36)

頸部の厚さは5mmであるが、肩部では肥厚し1.3cmほどになる。

B. 土師質土器(第12図、図版6)

土師質土器は皿の小破片が17点ある。底部に回転糸切り痕を止めるものは認められず、口縁成形と判断できるものはない。形態を復元できたのは図示した9点のみで、形態の違いから5分類した。

a類(37・38) 口縁部と体部の境界付近に浅い凹みを持ち、そこから外開きに立ち上がる形態である。器面調整は体部内面から口縁部外面まで横ナデである。胎土・焼成とも良好で、器厚は比較的薄手である。口径は他の類型に比べて大きく、13cmを越える。

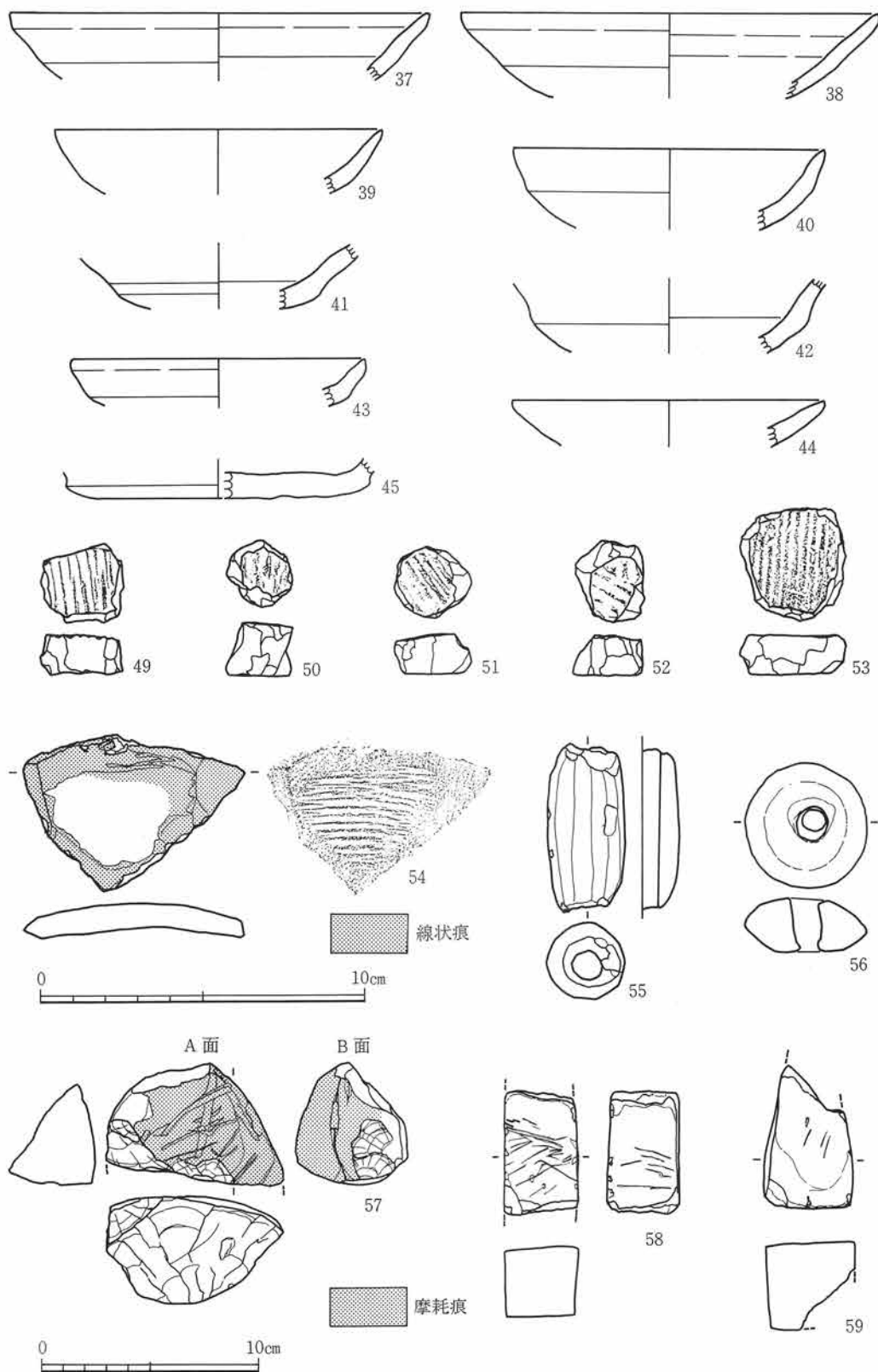
b類(39・40) 体部から口縁部にかけて彎曲しながら、外面に弱い稜をもって立ち上がる形態である。器面調整は体部内面から外面稜まで横ナデである。39は胎土・焼成とも良好で、色調は黒褐色である。丁寧な横ナデにより仕上げられている。40の胎土には石英等の砂粒が少量含まれ、焼成は並である。

c類(41・42) 体部外面に明確な稜を持ち、口縁部が外反する身の浅い形態である。器面調整は内面から稜の上までが横ナデである。41は胎土・焼成とも不良である。42は胎土が精良であるが、焼成は不良である。

d類(43) 体部外面に明瞭な稜を持ち、そこから短く口縁部が立ち上がるものである。胎土・焼成とも良好である。丁寧な作りで、口唇部に稜をもつ。

e類(44) 他のものと比べ器高が低く、体部から口縁部が直線状に開く形態である。器面調整は現存する部分に関しては、内外面とも横ナデである。胎土に角閃石、石英などを多く含む。焼成は不良である。

以上のもののほかに、底部片が1点ある(45)。わずかに残る体部から、立ち上りの緩やかな形態であったと推定される。器面調整は、内面に底部の円周に沿ったナデ調整、外面の底部外周に凹線状の強い横ナデ調整が認められる。胎土に石英・角閃石を少量含む。



第12図 出土遺物(3) 土師器土器・土製品・石製品

C. その他の陶磁器(図版6)

青磁、備前系・瀬戸系の陶器が少数ある。

青磁は鎗蓮弁文碗の体部下半破片1点(図版6-46)がある。蓮弁は細身である。淡緑色の釉がかかる。備前焼は体部片が4点あり、1点(47)には菱形のスタンプ文がある。瀬戸焼は天目茶碗の底部付近の破片1点(48)がある。内面と体部に透明な黄緑色の釉がかかる。

D. 土製品(第12図、図版7)

陶製円盤(49-53)

5点出土した。すべて珠洲焼の甕、あるいは壺の体部片の周囲を丁寧に打ち欠いて、径2-3cmほどの円盤状に仕上げている。49-52では、焼きが堅緻な色調灰色の破片が用いられているが、53では焼成不良で色調茶褐色の破片が用いられている。51のみ、稜線が著しく摩耗している。

転用研磨具(54)

1点が表面採集されている。珠洲焼の甕の体部片を素材としている。素材となった破片は焼成が不良で、色調は茶褐色である。表面の周縁部を機能面として利用している。左上には研磨により、稜線ができています。大きさは幅101.90mm、重さ89gである。

土錘(55・56)

3点が表面採集されている。形態は2点が円筒状、1点が算盤玉状である。55は円筒状のもので、両端をわずかに欠損している。大きさは現存長78mm、最大径36mm、孔径12mm、重量86gである。孔の太さが一定で、中央部においても食い違いがみられず、両端部破損面には粘土の接合痕が観察される。このことから、丸い棒状工具に粘土帯を巻きつけ、長軸方向のナデ調整をしたあとに、棒を引き抜いて成形したと推定される。

56は裏面に平らな面をもつ算盤玉状のもので、大きさは最大径38.60mm、重量24gである。孔は断面形が円錐形で、径は7.20-9.55mmである。裏面側の孔の入り口には粘土が引き込まれたようになっている。表面は丁寧なナデ調整で仕上げられている。成形方法は、始めに粘土塊で孔のない原形を作り、生乾きのうちに平らな所に置いて、錐状の工具で表面から穿孔し、続いて裏面からも穿孔して完成させたものと推定される。

羽口(図版8)

4点ある。そのうち1点は表面採集品である。すべて破損した小片であり、復元して図示できるものはない。

E. 石 製 品(第12図、図版7)

研磨痕のある礫(57)

A・B面に研磨痕が認められ、両面の接点には、明瞭な稜線ができています。A面には、左下から右上、あるいは右上から左下にかけて、擦痕が残されています。B面には被熱による剝離面があります。C面は破損面です。現存長56.00mm、幅81.50mm、厚さ50.00mm、重量223gです。砂岩製。

砥石(58・59)

2点出土した。58は一端を欠損しているが、一方が厚く、他方は細く絞り込まれた形をしている。横断面形はほぼ正方形である。作業面はほぼ正方形である。作業面は正・裏・両側面である。現存長43.50mm、重量40.0g。59は両端を欠損しているが、ほぼ直方体を呈する。作業面は正・裏・両側面である。現存長22.40mm、重量27.0g。2点とも凝灰岩製。

F. 鉄 製 品(第13図、図版7)

鉄製品は21点、総重量230gが出土した。保存状態が悪く、いずれの製品も錆化し、非常に脆くなっている。器種を判断できたの14点の内訳は、鏝9点、釘4点、鈎状鉄製品1点である。器種不明の7点は、小穴がある円盤状鉄製品1点を除く6点が、鏝の一部と推定される角柱状の鉄製品である。

鏝(60~63)

60は鈎部分の屈曲がほかの3点とは異なり緩やかである。横断面形は長方形である。片端部を欠損している。残存長89.50mm、重量20.0g。

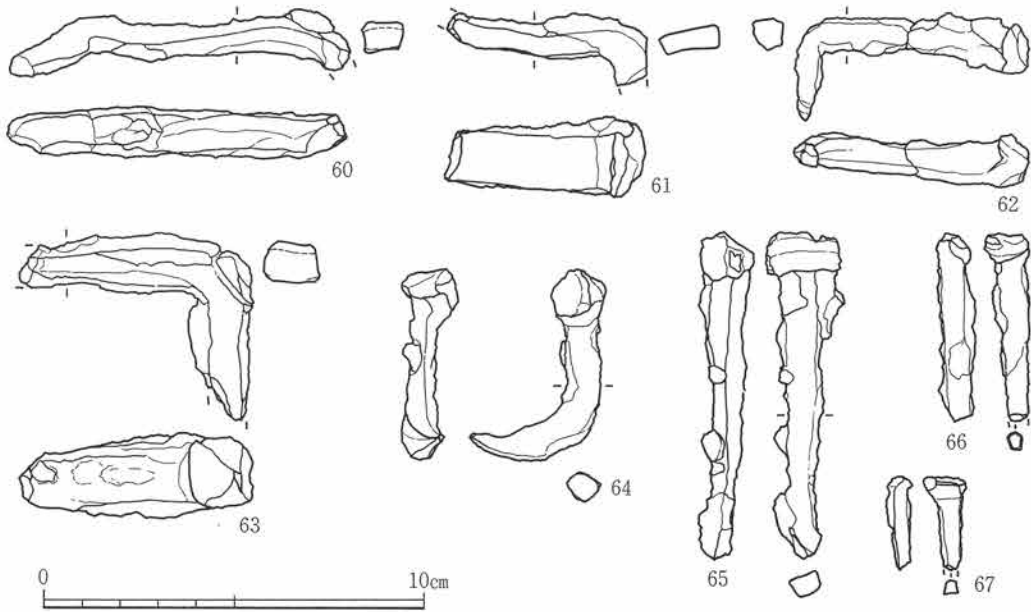
61~63は鈎部分が直角に曲げられている。61は片端部を欠損している。断面形は長方形である。現存長61.50mm、重量60.0g。62は片端部を、鈎状になる部分の付け根のところで欠損している。断面形は不定型な六角形である。表面の一部に木炭片が付着しているのが観察された。現存長61.50mm、重量9.0g。63は両端部を欠損している。断面形は扁平な長方形である。現存長53.00mm、重量22.0g。

鈎状鉄製品(64)

角柱の頭部を折り曲げて皿部を作り出している。釘の先端部が折れ曲がったのかもしれない。現存長50.50mm、重量8.00g。

釘(65~67)

すべて頭部を折り曲げて皿部を作り出している。65はSK2cから出土した。横断面形は長方形で、頭部に近づくほど扁平になる。長さ86.20mm、重量16.0g。66は先端部を欠損している。横断面形は不定型な六角形である。現存長49.50mm、重量6.0g。67は皿部の端と先端部を欠損



第13図 出土遺物(4) 鉄製品

している。横断面形は方形である。現存長24.50mm、重量2.0g。

G. 鉄 滓 (図版8)

包含層では18点、計563gが出土した。そのほかに、Pit 2で1点2gが、SK 2cで1点88gが出土している。このほか、鉄滓ではないが、フィゴの羽口に付着していたと思われる多孔質の鉾滓が29点、計217gある。

H. 銭 貨 (第18図、図版7)

唐銭1点、宋銭2点がある。唐銭は66の開元通宝(鑄造年代780~975年)で、試掘調査の際に2トレンチから出土した。69は熙寧元宝(同1068~1077年)で包含層からの出土である。70は治平元宝(同1064)で、表面採集品である。



第14図 出土遺物(5) 銭貨

I. 礫(図版9・10)

調査区のほぼ全域から礫が出土した。礫は搬入された海岸漂着石あるいは川原石で、大きさや形の点から二つに大別される。おそらく礫は斜面の下方にむけて廃棄されており、利用された時点の位置を保っていないものと思われる。

(1) 礫の特徴

第1類 扁平楕円礫

大きさは長径2cmのものから10cmのものまでであるが、長径7～8cmのものが主体である。形は一様に扁平な楕円形を呈する。水磨が著しく、表面に光沢をもつものも多い。全体の3分の1程度が赤化している。石質は安山岩を主体として、チャート、玉髓などがある。総重量は38,094gである。

第2類 剝落のある円礫・石核および剝片

もとは円礫であったと思われるが、ほとんどのものが原形をとどめないほどに割れている。割れの原因の主なものには被熱である。赤化している礫は全体の8割程度で、煤が付着しているものもある。礫の大きさは原形をとどめている最大のもので、長径25cmである。石質は安山岩が主体である。整理するにあたり、破損状態の違いでこれらを4分類した。

a：剝落のある円礫 大きさは、長径約20～25cm、厚さ約10～15cmである。7点あるが、1点を除きすべてが赤化している。被熱により、表面のクレーター状の火はじけが生じたり、帯状に煤が付着しているものがみられる。総重量38,040g。

b：残核 石器では石核部分にあたる割れた礫で、ネガティブな割れ面をもつ。総量は72点、96,717gで、そのうち65点、77,167gが被熱している。

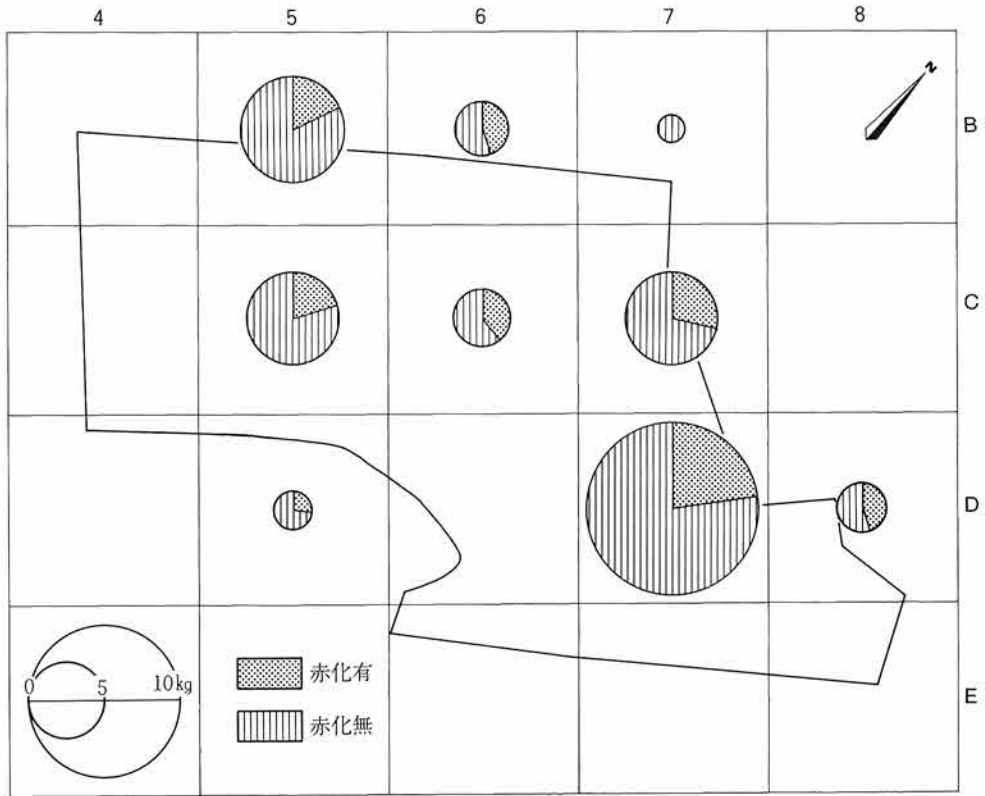
c：背面に礫面をもつ剝片で、剝片Aとする。残っている礫面は、すべて円礫面の一部である。総量は192点、21,787g、そのうち赤化しているものは173点、17,077gである。

d：礫面をもたない剝片で、剝片Bとする。総量は108点、1,950g、そのうち赤化しているものは104点、1,850gである。

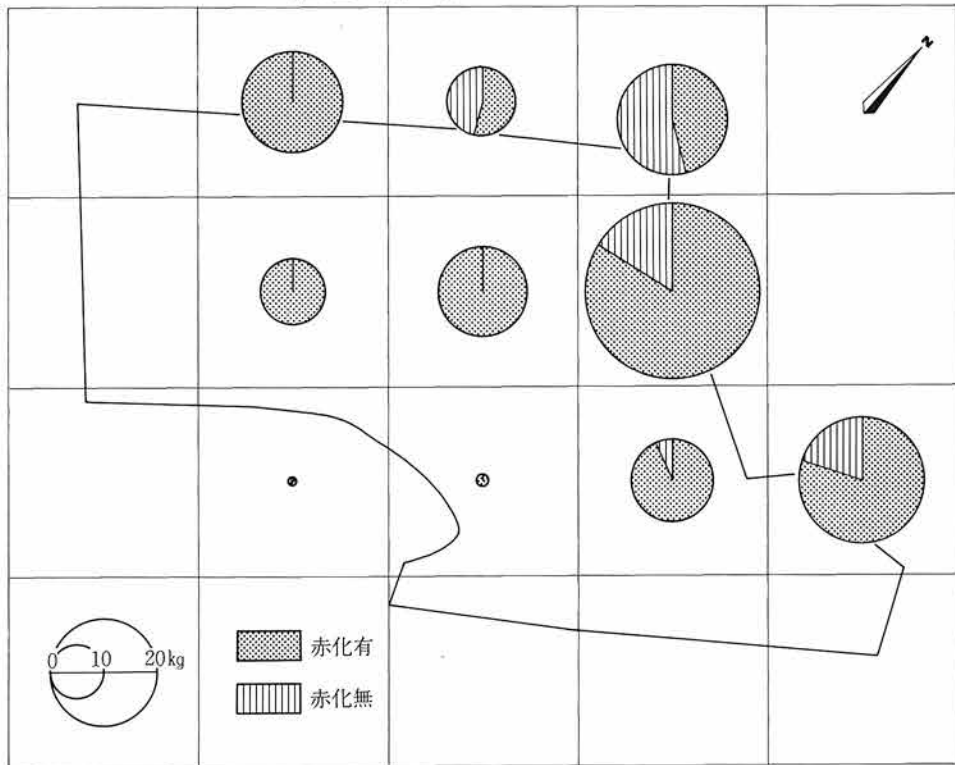
(2) 分布状況

礫総体の分布は北東側の区域に偏っているが、分布状況に差違が認められる。第1類はD7グリッドに最も多く分布し、全重量の約25%にあたる9,172gが出土しているが、各グリッドで密度にばらつきがある。第2類は、27,250gが出土したC7を中心に、調査区の北東側に多く分布しており、第1類に較べてばらつきが小さい。

なお、これらの礫が調査区内の特定の地点に集中したり、一定の区画を形成している状況はみられなかった。



第15図 碟第1類のグリッド別重量分布



第16図 碟第2類のグリッド別重量分布

4. 遺 物

第1表 礫のグリッド別重量および点数一覧

単位g。()内は点数。

グリッド	赤化	第1類	第 2 類			
			剥落のある円剥	残 核	剥 片 A	剥 片 B
B4	有	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	無	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
B5	有	956(9)	110(1)	16,260(13)	2,400(52)	390(16)
	無	4,384(96)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
B6	有	1289(13)	6,060(1)	0(0)	760(9)	230(15)
	無	1,562(22)	6,340(1)	0(0)	0(0)	0(0)
B7	有	0(0)	3,740(1)	5,160(3)	830(3)	80(9)
	無	1,433(13)	0(0)	9,500(3)	1,950(4)	0(0)
C5	有	999(15)	0(0)	8,150(10)	3,590(32)	410(19)
	無	3,834(55)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
C6	有	1,177(9)	15,930(2)	700(2)	410(4)	4(1)
	無	1,850(23)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
C7	有	1,422(14)	0(0)	26,480(16)	350(7)	420(23)
	無	3,502(44)	0(0)	4,130(1)	1,080(6)	80(3)
D4	有	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	無	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
D5	有	539(6)	0(0)	227(2)	477(6)	316(21)
	無	1,510(18)	0(0)	0(0)	590(4)	0(0)
D6	有	0(0)	0(0)	2,330(1)	20(1)	0(0)
	無	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
D7	有	2,086(18)	5,860(1)	4,100(7)	4,610(40)	0(0)
	無	7,086(87)	0(0)	0(0)	1,060(4)	0(0)
D8	有	1,155(9)	0(0)	13,760(11)	3,630(19)	0(0)
	無	1,391(13)	0(0)	5,920(3)	30(1)	20(1)

第2表 珠洲焼・土師質土器観察一覧表

器種 珠：珠洲。甕／壺：甕あるいは壺の体部片・底部片。

胎土 英：石英、長：長石、角：角閃石 白：白色粒子、黒：黑色粒子、海針：海綿骨針。

礫 () 内の数値は礫の大きさを示す。単位はmm。

No	種 別	胎 土	色 調	焼 成	出土地点
1	珠 甕	英	灰色	並	C5
2	珠 甕	長 海針 礫 (1~2)	灰色	並	B5
3	珠 甕	英 礫 (1.5)	灰色	並	B6
4	珠 壺	英	灰色	堅	pit1
5	珠 壺	英 白 礫 (3)	灰色	堅	B5
6	珠 壺	英 礫 (1.5)	白灰色	並	B5
7	珠 壺	英 海針 礫 (1~1.5)	白灰色	並	D7
8	珠 壺	英 白 海針	暗灰色	堅	B5
9	珠 壺	英 海針	灰色	堅	C5
10	珠 壺	英	灰色	並	SK2c
11	珠 甕／壺	英 海針 礫 (0.5~1)	灰色	並	1Tr
12	珠 甕／壺	英 礫 (1)	灰色	並	D7
13	珠 甕／壺	英 白 海針 礫 (0.5~1)	灰褐色	並	1Tr
14	珠 甕／壺	英 白 海針	灰色	堅	D8
15	珠 甕／壺	英 黒	白灰色	堅	D7
16	珠 甕／壺	英 礫 (1~3)	灰色	堅	1Tr
17	珠 甕／壺	英 海針 礫 (3~5)	灰色	並	D7
18	珠 甕／壺	英 礫 (0.5~1)	白灰色	並	SK1
19	珠 甕／壺	英 白 黒	暗灰色	並	2Tr
20	珠 甕／壺	英	灰色	並	D8
21	珠 甕／壺	英 海針 礫 (2)	灰色	堅	B5
22	珠 甕／壺	英 礫 (1~5)	灰色	堅	B5
23	珠 甕／壺	礫 (0.5~2)	暗灰色	並	D7
24	珠 片口鉢	海針 礫 (2~4)	灰色	並	D8
25	珠 片口鉢	英 海針 礫 (1)	灰褐色	並	1Tr
26	珠 片口鉢	英 白 礫 (1~5)	赤褐色	並	B5
27	珠 片口鉢	白 礫 (5)	灰色	並	D7
28	珠 片口鉢	英 白 海針	灰褐色	不良	D7
29	珠 片口鉢	英 海針 礫 (3)	灰色	不良	D7

4. 遺 物

No	種 別	胎 土	色 調	焼 成	出土地点
30	珠 片口鉢	英 海針	灰色	並	D5
31	珠 片口鉢	英 海針	灰褐色	不良	D5
32	珠 片口鉢	英 白 礫 (1~3)	暗灰色	並	C5
33	珠 片口鉢	英 海針 礫 (1)	灰色	並	D8
34	珠 片口鉢	英 礫 (1)	暗灰色	並	B7
35	珠 片口鉢	英 海針	灰褐色	並	SK2c
36	珠 瓶子	英	白灰色	並	C7
37	土師質皿	英	明黄褐色	良好	pit2
38	土師質皿	英	明褐色	良好	表面採集
39	土師質皿	英	黒褐色	良好	表面採集
40	土師質皿	英 礫 (0.5)	明黄褐色	並	D7
41	土師質皿	英 礫 (1.5)	明褐色	不良	B5
42	土師質皿	英	明黄褐色	不良	B6
43	土師質皿	英	黒褐色	良好	C5
44	土師質皿	英 角	明黄褐色	不良	表面採集
45	土師質皿	英 角	明黄褐色	並	D5

第3表 グリッド別遺物点数一覧

砥：砥石、磨：研磨痕のある礫、円：陶片円盤、転：転用研磨具、錘：土錘、釘：釘、鏝：鏝、板：円盤状金具、?：器種不明。「鉄滓」・「多孔質の鋳滓」の項の()内は重量(g)を表す。

グリッド	石器	土師質皿	土製品	羽口	銭貨	鉄 製 品	鉄滓	多孔質の鋳滓
B5	砥1	6	円1	2	0	釘1・鏝2	4(210)	14(100)
B6	0	1	0	0	0	釘1・鏝16・鈎1・?2	1(60)	0(0)
B7	0	0	0	0	1	0	0(0)	0(0)
C5	砥1	2	円1	0	0	鏝4・板1・?1	(158)	10(75)
C6	0	0	0	0	0	0	0(0)	0(0)
C7	磨1	0	0	0	0	0	1(19)	0(0)
D5	0	1	1	1	0	釘1・鏝2	0(0)	0(0)
D6	0	0	0	0	0	0	0(0)	0(0)
D7	0	1	円1	0	0	0	7(16)	3(34)
pit2	0	2	0	0	0	0	0(0)	0(0)
表面採集	0	4	転1・錘3	1	1	0	1(10)	0(0)

第IV章 鉄滓の科学分析

本章の科学分析は、(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団がパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、報告を受けたものである。なお、分析調査報告は、パリノ・サーヴェイ株式会社が大澤正巳氏およびTACセンターから調査報告と分析作業の協力を得たものであり、実質的な調査報告は大澤正巳氏によってなされている。

1. 概 要

- (1) 出土鉄滓は、鍛冶炉の炉底に堆積形成された碗形状鍛冶滓である。鍛冶行程は、鉄器製作時での折り返し曲げ鍛接時高温作業で派生された鍛錬鍛冶滓に分類される。これに羽口破片の共伴があって、当遺跡内で鍛冶工房の操業があった事が想定できる。
- (2) 鉄滓の鉱物組成は、白色粒状結晶のヴスタイト(Wustite: FeO)主体であるが、一部に白色多角形結晶のマグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)が少量晶出し、これに淡灰色盤状結晶のファイヤライト(Fayalite: 2FeO・SiO₂)、基地の暗黒色ガラス質スラグなどが加わって構成される。
- (3) 鉄滓の化学組成は、鉄分多くガラス質成分や随伴微量元素の低減された鍛冶滓傾向を明瞭に示す成分系であった。また、矽鉄特有元素の二酸化チタン(TiO₂)は0.04~0.22%、バナジウム(V)0.001~0.012%と低く、かつ酸化マンガン(MnO)が0.01~0.06%と激少傾向は、鍛冶素材は処女鉄ではなく、廃鉄器の再生鍛冶の可能性を示唆するものと考えられる。

2. 調査方法

2-1. 供試材

表1に示した3点の鉄滓が調査試料である。

表1 供試材の履歴と調査項目

符号	試料	出土位置	外 観 特 徴	計 測 値		調 査 項 目		
				大きさ(mm)	重量(g)	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	化学組成
N-1	鉄滓	B5グリッド 第1黒色砂Ⅲ層	ルツボ底状の曲面を有し砂の付着がみられるもの	65×50×17	84	○	○	○
N-2	鉄滓	B5グリッド 第1黒色砂Ⅲ層	赤褐色の弱いもの	53×40×25	75	○	○	○
N-3	鉄滓	B6グリッド 第1黒色砂Ⅲ層	赤褐色の強いもの	40×55×15	59	○	○	○

2. 調査方法

2-2. 調査項目

- (1) 肉眼観察
- (2) 顕微鏡組織

鉄滓は水道水で十分に洗浄乾燥後、中核部をバークライト樹脂に埋め込み、エメリー研磨紙の#150, 240, 320, 600, 1000と順を追って研磨し、最後は被研面をダイヤモンドの 3μ と 1μ で仕上げた。光学顕微鏡による観察を行った。

- (3) ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成の同定を目的として、ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136度の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡試料を併用した。

- (4) 化学組成

鉄滓の分析は次の方法を採用している。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第1鉄(FeO)：容量法。

炭素(C)、硫黄(S)：燃焼容量法、燃焼赤外線吸収法。

二酸化硅素(SiO_2)、酸化アルミニウム(Al_2O_3)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K_2O)、酸化ナトリウム(Na_2O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO_2)、酸化クロム(Cr_2O_3)、五酸化燐(P_2O_5)、バナジウム(V)、銅(Cu)：ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)：誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果

- (1) N-1：鉄滓(鍛錬鍛冶滓)

① 肉眼観察

楕円形状の小型椀形滓のほぼ完形品である。表面は小豆色を呈し、滑らか肌を有するが側面近くで $10\times 15\text{mm}$ 面積の表皮剝離があって、その直下は黒色ガラスが含有される。裏面は砂粒混じりの炉壁粘土を付着する。一部に木炭痕($10\times 18\text{mm}$)を深く残す。全体に緻密的で比重は大きい。

② 顕微鏡組織

図版1の①～③に示す。鉱物組成は白色粒状結晶のヴスタイト(Wustite： FeO)と淡灰色盤状結晶のファイヤライト(Fayalite： $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)と基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。鉄器製作時の折り返し曲げ鍛接作業で排出された鍛錬鍛冶滓の典型的晶癖である。

③ ビッカース断面硬度

図版1の③に白色粒状結晶の硬度測定¹⁾の圧痕写真を示す。硬度値は493 Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値は450~500 Hv¹⁾なので、当白色粒状結晶はヴスタイトに同定できる。

④ 化学組成

表2に示す。全鉄分(Total Fe)は51.88%に対して金属鉄(Metallic Fe)が0.21%、酸化第1鉄(FeO)60.43%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)6.72%の割合である。また、ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)31.49%で、このうち、塩基性成分(CaO+MgO)2.91%を含む。一方、砂鉄特有元素の二酸化チタン(TiO₂)0.22%、バナジウム(V)は0.012%と低値である。更に他の随伴微量元素のうち、酸化マンガン(MnO)も0.06%は少なく、五酸化燐(P₂O₅)0.19%、硫黄(S)0.01%など低値であった。なお、銅(Cu)は0.004%のレベルであって、鍛冶原料の鉄素材は、砂鉄系ではあるが、恐らく出来たての処分鉄ではなくて、一定鈍度を保った鉄器の破損品などのスクラップ材だったと想定される。廃鉄器の再生鍛冶作業であろうか。

(2) N-2：鉄滓(鍛錬鍛冶滓)

① 肉眼観察

表皮は小豆色で、流動状滑らか肌を有する。荒鉄(製錬生成鉄で表皮スラグや捲込みスラグ、また、炉材粘土などの不純物を含む原料鉄)の成分調整で排出された製錬鍛冶滓らしくもみえて2段形成である。

裏面は灰色を呈し、浅く反応痕と木炭痕を残す。側面には数点の気泡を發して鉄錆がみられ、破面は気泡少なく緻密質であった。

② 顕微鏡組織

図版2の①~⑧に示す。鉍物組成はヴスタイトを大量に晶出する。その代表例を①に提示した。ただし、外観は流動状の高融点傾向がみられた様に②~⑤には白色多角形結晶のマグネタイト(Magnetite: Fe₃O₄)の折出が局部的にあった。また、⑥は底部の晶出するファイヤライトの結晶である。これも鍛錬鍛冶滓の鉍物相に分類される。

③ ビッカース断面硬度

図版2の⑦にヴスタイト結晶の、また⑧にはファイヤライト結晶の硬度測定¹⁾の圧痕写真を示す。前者の硬度値は、498 Hv、後者で698 Hvであった。それぞれは文献硬度値に即する値となっていて、それぞれ目標鉍物相に同定できた。

④ 化学組成

表2に示す。前述鉄滓N-1よりも鉄分は増加し、ガラス質成分、随伴微量元素らは減少傾向にあり、鍛冶作業の中間行程にて排出された滓に想定された。すなわち、全鉄分(Total Fe)は57.07%、ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)23.50%、二酸化チタン(TiO₂)

3. 調査結果

0.14%、バナジウム(V)0.002%、酸化マンガン(MnO)0.05%であった。

(3) N-3：鉄滓(鍛錬鍛冶滓)

① 肉眼観察

偏平椀形状の鍛冶滓である。表裏共に赤褐色鉄錆に覆われ、顆粒状肌に木炭痕を残す。裏面は中央突起部は二次的に欠落し、側面はガラス質スラグを僅かに付着する。該品も緻密質で比重は大きい。

② 顕微鏡組織

図版1の④～⑧に示す。鉱物組成は大きく成長した白色粒状ヴスタイト主体で、僅かの粒間隙間に極く微量のファイヤライトが晶出し、暗黒色ガラス質スラグが埋める。鍛錬鍛冶最終段階での排出滓となる。

③ ビッカース断面硬度

図版1の⑧に凝集ヴスタイトの硬度測定の写真を示す。硬度値は472 Hvであった。この白色結晶はヴスタイト文献硬度値の450～500 Hvの範疇に収まって、ヴスタイトと同定される。

④ 化学組成

表2に示す。顕微鏡組織の観察で判った様に、鉄分の増加は著しく、ガラス質成分や随伴微量元素の低減は大きいものである。全鉄分(Total Fe)は67.47%、ガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)7.91%、二酸化チタン(TiO_2)0.04%、バナジウム(V)0.001%、酸化マンガン(MnO)0.01%などであった。

化学組成の純度の上がり具合からみて、該品は鍛錬鍛冶も折り返し曲げ鍛接時の最終段階での排出滓とみてよからう。

4. まとめ

中世(14世紀～15世紀代)に比定される中ノ山遺跡から、鍛冶工場の稼働が想定できる鉄滓の検出があった。この鉄滓は、鉄器製作時における折り返し曲げの高温鍛接作業で排出される鍛錬鍛冶滓に分類された。更に、この鍛冶に供された鉄素材は、製鉄炉で生産された直後の荒鉄系の処女鉄ではなくて、廃鉄器などのスクラップ材と考えられる。

その理由は、鉄滓中から砂鉄特有元素の二酸化チタン(TiO_2)があまり検出されず、かつ、他の随伴微量元素(MnO: 0.01～0.306%)も低減化傾向にあった。中ノ山遺跡の隣接する吉川町の古代・中世に属する遺跡から出土した鉄滓は25以上が調査されている²⁾。それらは砂鉄(酸性砂鉄)を始発原料として、荒鉄の成分調整の精錬鍛冶から鉄器製作の鍛錬鍛冶までの一貫体制のとら

れた鉄滓であった。

これに対して、今回調査の鉄滓は鍛錬鍛冶滓であったが、従来の成分系とは異なって、前述した如く廃鉄器再生の鍛冶の可能性を示唆するものであって、ここに中世鍛冶の新しい姿が抽出された訳である。表3にその成分系の相違を提示しておく。

表2-1 鉄滓の化学組成

試料番号	全鉄分	金属鉄	酸化第1鉄	酸化第2鉄	二酸化珪素	酸化アルミニウム	酸化カルシウム	酸化マグネシウム	酸化カリウム	酸化ナトリウム	酸化マンガン	二酸化チタン
	Total Fe	Metallic Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	Na ₂ O	MnO	TiO ₂
N-1	51.88	0.21	60.43	6.72	22.96	3.98	2.00	0.91	0.980	0.664	0.06	0.22
N-2	57.07	0.06	59.19	15.73	17.43	2.90	1.01	0.73	0.982	0.448	0.05	0.14
N-3	64.47	0.08	67.30	21.56	5.82	0.76	0.53	0.42	0.292	0.090	0.01	0.04

表2-2 鉄滓の化学組成

試料番号	酸化クロム	硫黄	五酸化燐	炭素	バナジウム	銅	造滓成分	造滓成分	TiO ₂
	Cr ₂ O ₃	S	P ₂ O ₅	C	V	Cu		Total Fe	Total Fe
N-1	0.009	0.01	0.19	0.17	0.012	0.004	31.494	0.607	0.004
N-2	0.006	0.03	0.24	0.09	0.002	0.006	23.500	0.412	0.003
N-3	0.005	0.02	0.22	0.12	0.001	0.004	7.912	0.112	0.001

表3 中ノ山遺跡出土鉄滓の特質

	一貫体制排出滓 (吉川町：樋田遺跡・高沢入遺跡鉄滓)			廃鉄器再生排出滓 (中ノ山遺跡鉄滓)
	製錬滓	精錬鍛冶滓	鍛錬鍛冶滓	鍛錬鍛冶滓
全鉄分(Total Fe)	34.8 ~ 56.1 %	55.6 ~ 56.5 %	49.81 ~ 61.1 %	51.88 ~ 67.47 %
二酸化チタン(TiO ₂)	6.35 ~ 9.53 %	3.66 ~ 4.52 %	0.23 ~ 0.72 %	0.04 ~ 0.22 %
バナジウム(V)	0.25 ~ 0.41 %	0.24 ~ 0.35 %	0.029 ~ 0.03 %	0.001 ~ 0.012 %
酸化マンガン(MnO)	0.28 ~ 0.56 %	0.14 ~ 0.18 %	0.04 ~ 0.17 %	0.01 ~ 0.06 %

注：① 日刊工業新聞社『焼結鉍組織写真および識別法』1968.

②-(1) 大澤正巳「高沢入遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『高沢入遺跡』(新潟県中頸城郡吉川町高沢入遺跡発掘調査報告) 吉川町教育委員会、1988.

②-(2) 大澤正巳「樋田遺跡出土の鉄滓。 鑄鉄片の金属学的調査」『樋田遺跡』(第二次発掘調査概報) 吉川町教育委員会、1990.

②-(3) 大澤正巳「古町B遺跡出土鉄滓の金属学的調査」(古町B遺跡発掘調査報告書) 吉川町教育委員会、1992.

第V章 ま と め

1. 狐山遺跡との関連について

第Ⅱ章2で前述したように、中ノ山遺跡に隣接する狐山遺跡では、寺院跡等の存在を推察させる遺物が発見されているが、遺跡の性格については不明な点を多く残している。明治43年測図の地形図(第3図)では、信越本線を挟んで北西から南東方向にのびる標高10m前後の高まりが表現されており、これが中ノ山遺跡・狐山遺跡に相当する。中ノ山遺跡は、名称が異なるものの狐山遺跡に連続するものであり、発掘調査は狐山遺跡の資料を補綴してその内容をいくらか明瞭にするものと思われたが、中ノ山遺跡では墳墓あるいは寺院に直接関連する遺物の出土はなく、調査区域は鍛冶工房を含む集落域の一部と推察される。なお、中世の遺物は国道18号を越えて北西方向に広く散布しており、集落は小高い砂丘地に限定されているわけではない。遺物の内容が異なることは、ふたつの遺跡の分断を示すものではなく、集落とその周縁の宗教的な場という土地利用の違いと考えられる。狐山遺跡採集の瀬戸四耳壺(第4図)は高台の一部にのみ欠損があるもので、かつて出土した遺物から類推すれば、おそらく経塚や墳墓の埋納物であろう。経塚や墳墓は寺院の存在を必ずしも意味するものではないが、これらは中世に存在した瑞天寺などの密教寺院との深い関わりの中で残された遺物であろう。

2. 製鉄関係遺物と製鉄遺跡について

出土遺物の総量は調査面積が狭小なために少ないが、内容は多岐にわたる。珠洲焼は、吉岡康暢氏の編年観(吉岡1982)におけるⅣ・Ⅴ期に相当し、実年代は14世紀から15世紀代に置かれるものと考えられる。このほかの遺物の年代も珠洲焼のそれとおおむね一致するものであろう。中ノ山遺跡では、居住生活にかかわる遺棄物のほか、鉄生産に直接関係する多数の鉄滓と羽口が出土している。このほか、剥落のある円礫・石核および剥片が多数あり、これらも鉄生産に直接関係する遺物と思われる。石核と剥片は、被熱度の高い円礫が破碎して形状変化したものであり、この三者は本来同一のものである。煤状の付着物が認められるものもあるが、具体的な被熱状況は不明である。一方、扁平円礫は赤化している比率が低く、前述の礫とは明らかに識別されるものである。なお、錠・釘などの鉄製品については、建築物を構成していた部材の固定等に利用された可能性があるので、短絡に鉄生産と結びつけることを控える。

頸城平野北東部において、製鉄関係の遺物・遺構が出土している例は、大潟町上小船津浜海岸遺跡〔新潟県埋蔵文化財包蔵地カード〕、同町蜘蛛ヶ池遺跡〔戸根ほか1981〕、吉川町樋田遺跡〔室岡ほか1990, 1991〕、同町古町 B 遺跡〔秦ほか1992〕、同町八幡遺跡〔関ほか1987〕、同町高沢入遺跡〔関ほか1988〕、頸城村青野南畑 A 遺跡〔小林ほか1989〕であり、これまで発掘調査された古代～中世の遺跡が概ねこれに該当する。新潟県埋蔵文化財包蔵地カードによれば、善照寺西方の上小船津浜遺跡に製鉄炉検出の記載があるものの、上小船津浜海岸遺跡と混同しているらしく、除外しておく。製鉄関係遺物の年代は、樋田遺跡・高沢入遺跡が平安期、古町 B 遺跡・青野南畑 A 遺跡が古代から中世、蜘蛛ヶ池遺跡が中世から近世である。中世に置かれるのは上小船津浜海岸遺跡・八幡遺跡と中ノ山遺跡であり、上小船津浜海岸遺跡では製鉄跡 1 基の検出のほか、鉄滓・青磁・瀬戸・銭貨もあった〔新潟県埋蔵文化財包蔵地カード〕とされているが、鉄滓は科学分析がされておらず、どの工程で排出されたものか不明である。製鉄の工程は、原料の砂鉄や鉱石から含有金属を抽出する製錬、製錬された鉄から不純物を除去する精錬鍛冶、製品の素材および製品に加工する鍛錬鍛冶に大別され、これに古い鉄製品の再生・混和や炭素量の調節などの過程が加わる。中ノ山遺跡の鉄滓は廃鉄器の再生および再生素材の加工に伴う鍛錬鍛冶滓と分析されており、SK 2 は製鉄炉そのものではないが、それに関係する遺構と考えられる。また、仮に上小船津浜海岸遺跡の炉が製錬および精錬に関わるものとすれば、海岸の砂鉄を起点とする製鉄システムの中で、中ノ山遺跡の鍛錬鍛冶を考えることも可能となるであろう。

3. む す び

大潟町域の集落景観は、「慶長越後国絵図」の作成時以来、大きな変化がなく現在に至っている。海岸沿いにはしる旧北陸道北側には、築造時期が不明であるものの、土塁状の土手をめぐらせた浜集落跡が残存しており（図版 4）、中世以来の浜集落の様態を止めている。

中世末期から近世初期の浜集落は、「慶長越後国絵図」および「大澁中谷内大潟四度御竿入高帳」における村高・村明細など〔桑原1988〕によって、漁業・製塩を主たる生業としていたことが知られている。このことは、第Ⅱ章 3 で前述している。中ノ山遺跡・上小船津浜海岸遺跡・下小船津浜海岸遺跡〔小池1992〕は、これら史料の時期を遡る資料であり、浜集落の形成過程を知ることができる遺跡群である。中ノ山遺跡の鉄滓は、おそらく副業として行われていた製鉄で残された遺物であり、零細な農地と海浜に拠った、中世浜集落の生産活動に製鉄という新たな要素を加えるものである。

要 約

前述のまとめと巻末の報告書抄録をもって要約にかえる。

引用・参考文献

- ア 網野善彦・石井 進・福田豊彦 1990 『沈黙の中世』 平凡社
- イ 家田順一郎・小林義広 1989 『青野南畑・諏訪北畑 B 遺跡』 頸城村教育委員会
- ウ 宇野隆夫・前川要ほか 1993 『珠洲大畠窯』 富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学会
- オ 大潟町史編さん委員会 1983 『ふるさと大潟町』 中頸城郡大潟町
- 大潟町史編さん委員会 1988 『大潟町史』 大潟町
- 大澤正巳 1988 「高沢入遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『高沢入遺跡』 吉川町教育委員会
- 大澤正巳 1990 「樋田遺跡出土の鉄滓、鋳鉄片の金属学的調査」『樋田遺跡第二次発掘調査概報』 吉川町教育委員会
- 大澤正巳 1991 「金属学的の調査」『樋田遺跡第三次発掘調査概報』 吉川町教育委員会
- 大澤正巳 1992 「古町 B 遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『古町 B 遺跡発掘調査報告書』 吉川町教育委員会
- 大場厚順 1988 「中世の宗教」『大潟町史』 大潟町
- 小川敏夫 1979 「西飯食町遺跡と瓦碗作陶の一所見」『古代文化』 Vol. 31
- 小川裕久・服部実喜ほか 1984 『葺屋敷遺跡 日本国有鉄道鎌倉駅舎改築に伴う鎌倉市小町所在遺跡の調査』 鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会
- 小野 昭・桑原陽一ほか 1998 『丸山遺跡発掘調査報告書』 大潟町教育委員会
- カ 川越俊一・井上和人 1981 「瓦器作成技術の復元」『考古学雑誌』 第67巻第2号
- キ 木村宗文 1984 「文献から見た古代・中世の頸城地方」『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会
- ク 桑原正史 1986 「中央集権国家の建設と蝦夷」『新潟県史』 通史編1 原始・古代 新潟県
- 桑原 久 1988 「領主と人々の生活」『大潟町史』 大潟町
- コ 小池義人 1992 「新潟県大潟町下小船津浜遺跡採集の土器」『北越考古』 第5号 北越考古学会
- サ 齋藤秀平 1937 『新潟県史跡天然記念物調査報告』 第七輯 新潟県
- (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1993 「中ノ山遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』
- 坂井秀弥 1985 「頸城平野古代・中世開発史の一考察—頸城村を中心として」『新潟史学』 18 新潟史学会
- 坂井秀弥・金沢道篤 1986 『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ 新井市坪ノ内館跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥・金沢道篤・田辺早苗 1987 『国道116号埋蔵文化財調査報告書 三島郡出雲崎町番場遺跡』 新潟県教育委員会
- ス 鈴木郁夫 1979 「地形分類図」『新潟県上越地域土地分類基本調査 柿崎』 新潟県農地部農村総合整備課
- セ 関 雅之・本間信昭 1987 『八幡遺跡』 吉川町教育委員会
- 関 雅之・本間信昭ほか 1988 『高沢入遺跡』 吉川町教育委員会
- タ 高田平原団体研究グループ 1965 「高田平原北部の第四系—高田平原の団体研究・そのV—」『新潟大

- 学教育学部高田分校 研究紀要』第九号 新潟大学教育学部高田分校
- 高田平原団体研究グループ・米山団体研究グループ・妙高団体研究グループ 1972 「上越の地質とくに米山・妙高山・高田平野の生い立ち一」『新潟県の自然』第2集 新潟の自然刊行委員会
- 高田平原団体研究グループ 1980 「高田平野の第四系とその形成史—新潟県の第四系・そのX X IV一」『新潟大学教育学部高田分校 研究紀要』第25号 新潟大学教育学部高田分校
- 高橋 保・高橋保雄 1988 『北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書Ⅲ 立ノ内遺跡』新潟県教育委員会
- 高野武男・米山正次ほか 1988 「自然編 地形・地質」『頸城村史』頸城村史編さん委員会
- ト戸根与八郎ほか 1981 『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 蜘蛛池遺跡』新潟県教育委員会
- ナ直江津町 1954 「海岸線の移動」『直江津町史』直江津町役場
- ニ新潟県 1987 『新潟県史』通史編2 中世
- ハ橋本久和 1987 「中世土器の製作技法ノート(1)」『中世土器の基礎研究』日本中世土器研究会
- 長谷川正 1988 「地形・地質」『大潟町史』自然編・歴史編 大潟町史編さん委員会
- 秦 繁治・小林義廣ほか 1992 『古町B遺跡発掘調査報告書』吉川町教育委員会
- 服部実喜 1985 「鎌倉市域出土の中世土師質土器—所謂かわらけの編年を中心に—」『中世土器の基礎研究』日本中世土器研究会
- ヒ平野団三 1988 「頸城村と旧大潟の古代・中世の汀線」『頸城村史』頸城村史編さん委員会
- 平野団三ほか 1989 『上越後の懸仏と経塚供養塚出土品展—平安・鎌倉・室町—』上越市立総合博物館
- ミ宮 榮二・山田英雄ほか 1986 『日本歴史地名体系15 新潟県の地名』平凡社
- ム室岡 博 1972 『頸城地方の海と海底海浜遺跡』上越市立総合博物館
- 室岡 博・関 雅之ほか 1989 『樋田遺跡発掘調査概報』吉川町教育委員会
- 室岡 博・戸根与八郎ほか 1990 『樋田遺跡第二次発掘調査概報』吉川町教育委員会
- 室岡 博・戸根与八郎ほか 1991 『樋田遺跡第三次発掘調査概報』吉川町教育委員会
- 室岡 博 1988 「原始・古代」『大潟町史』大潟町
- ヤ矢田俊文 1990 「中世後期越後国の集落に関する二つの課題」『かみくひむし』80 かみくひむしの会
- 山田英雄 1986 「国郡制の成立・整備」『新潟県史』通史編1 原始・古代 新潟県
- ヨ吉岡康暢ほか 1977 『珠洲法住寺第3号窯』石川県教育委員会
- 吉岡康暢 1977 「加賀・珠洲」『世界陶磁全集』3 日本中世 小学館
- 吉岡康暢 1981 「中世陶器の生産と流通」『考古学研究』第27巻第4号 考古学研究会
- 吉岡康暢 1982 「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」『庄内考古学』第18号 庄内考古学研究会
- 吉岡康暢 1983 「珠洲系陶器の暦年代基準資料」『石川考古学研究会々誌』第26号北陸の考古学 石川考古学研究会
- 吉岡康暢 1988 「北東日本海域における中世窯業の成立」『国立歴史民俗博物館研究報告』第16集 国

立歴史民俗博物館

- 米沢 康 1980 「大宝2年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』32-6 信濃史学会
ワ渡辺正親 1988 「郷土開発への努力」『大潟町史』大潟町史編さん委員会





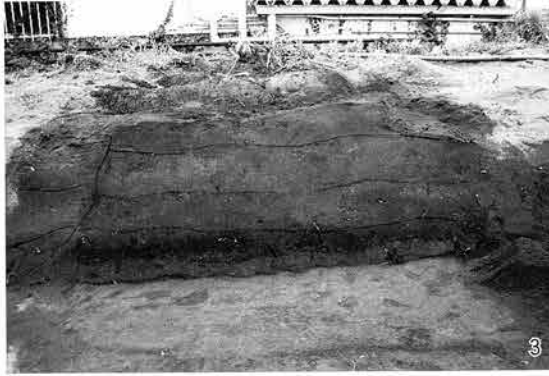
調査区域全景
(確認調査後)
北東から



調査区域完掘状況
南西から

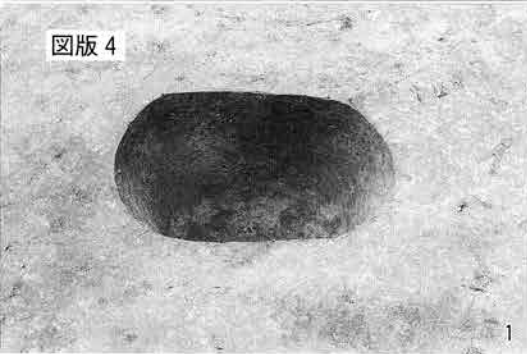


SK2 およびピット群
南西から



- 1 調査区域全景
(遺跡発見時)
北東から
- 3 土層堆積状況
(6B-18)
南から
- 5 SK2 北から
- 7 SK2b土層断面
北から

- 2 遺物包含層露出状況
(遺跡発見時)
北東から
- 4 調査風景
南西から
- 6 SK2c土層断面
西から
- 8 SK2a土層断面
西から



1 SK1完掘 南から



3 狐山遺跡採集の四耳壺
(善照寺蔵)



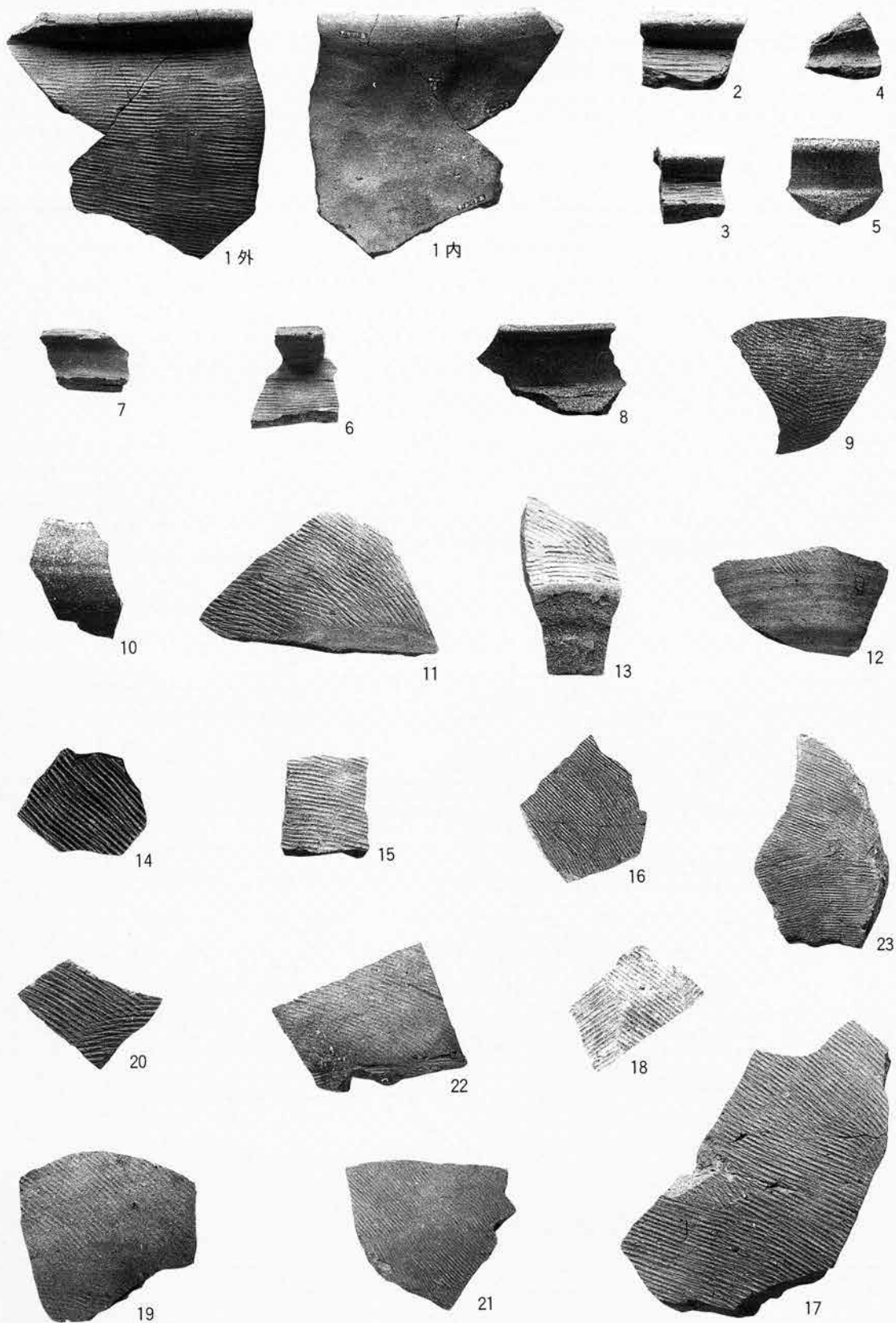
2 狐山遺跡採集の懸仏
(竹田誠二氏蔵・光背等は増補)

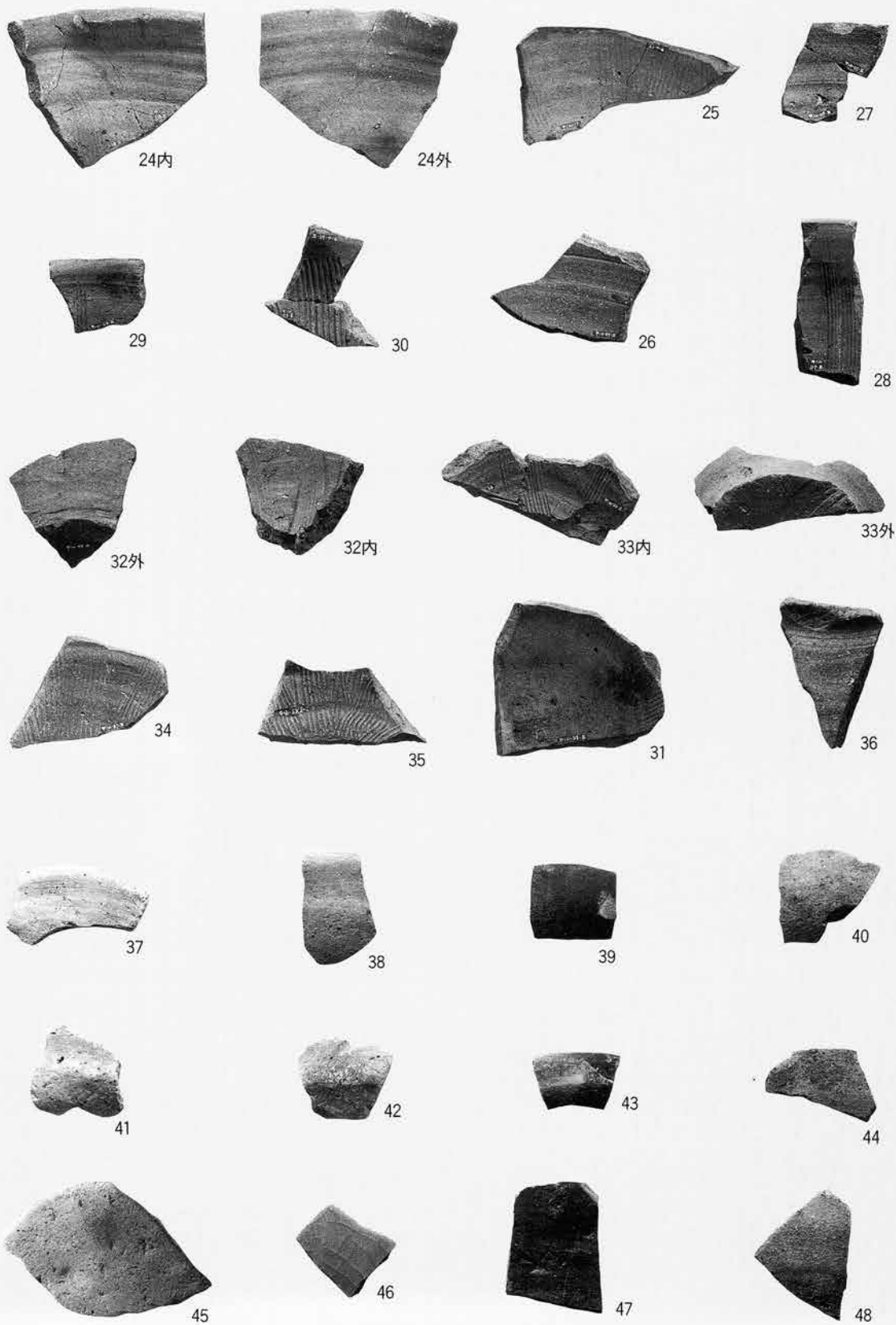


4 四耳壺押印

中ノ山遺跡周辺の土地利用状況 国土地理院発行 1946年10月米軍撮影







24~36(1:4)
37~48(1:2)



49



50



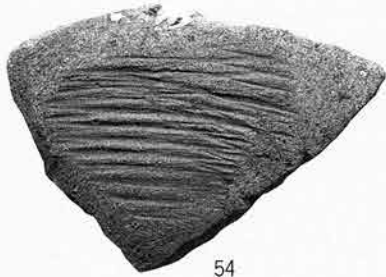
51



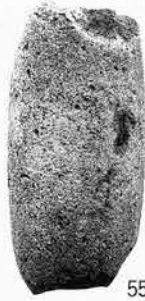
52



53



54



55



57 a



56



58



59



57 b



60



61



62



63



64



67



66



65



68

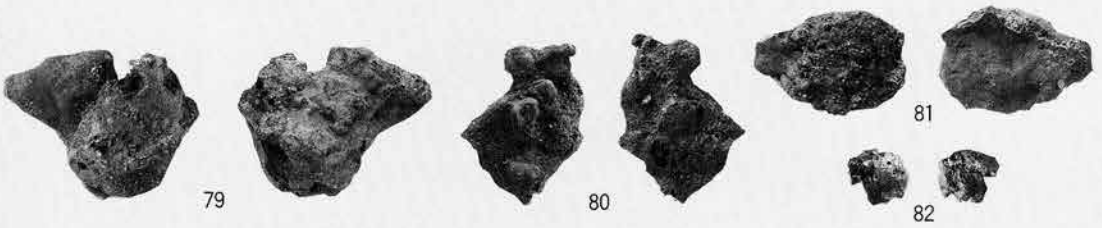
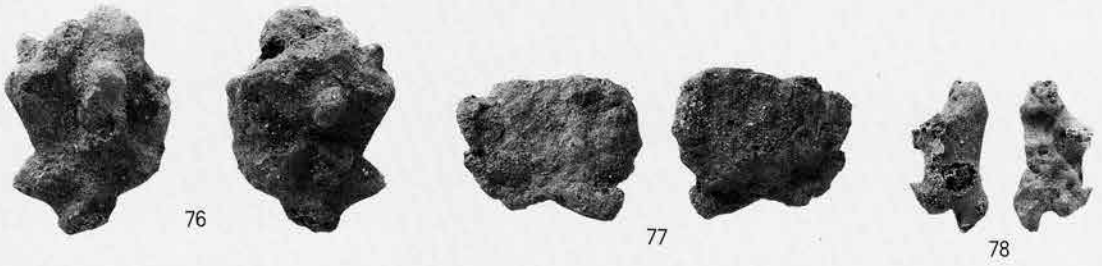
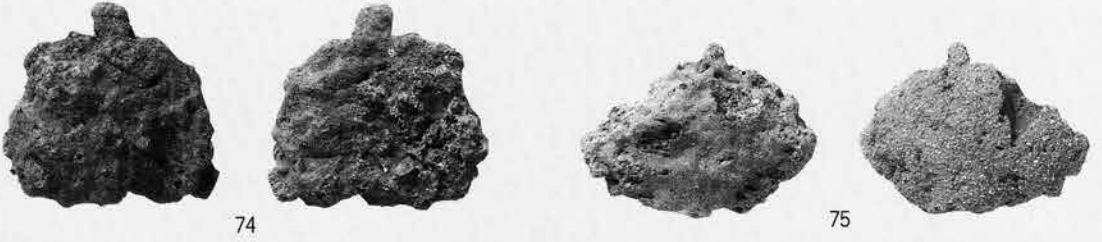


69

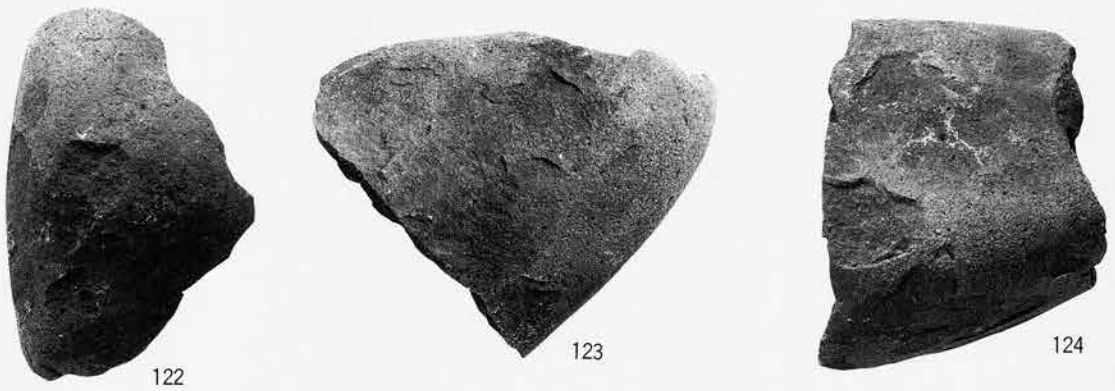


70

49~53(1:2) 54・55・57(2:3)
58~67(1:2) 68~70(1:1)





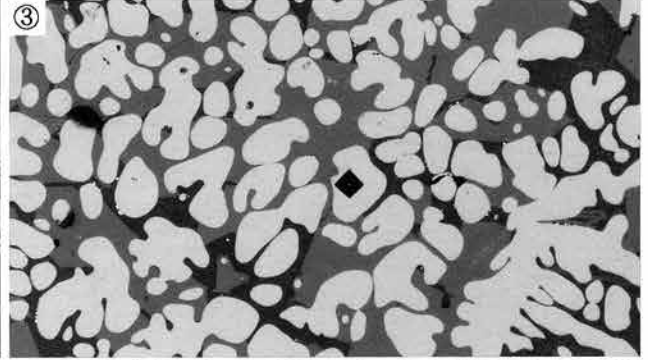
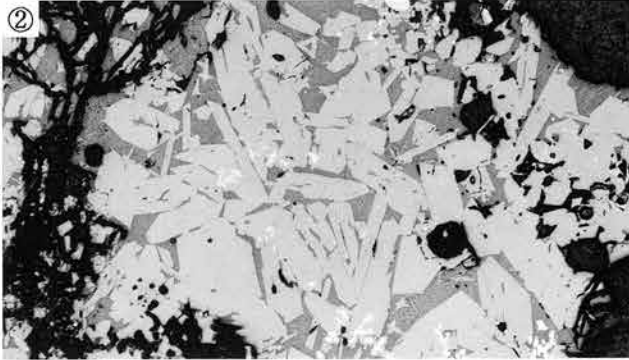
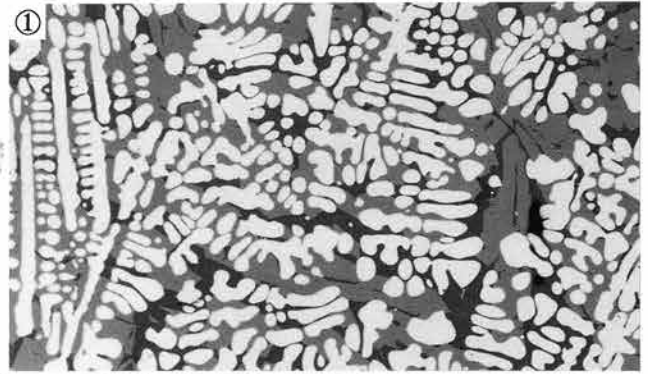


(1) N-1
B5グリッド出土
鍛錬鍛冶滓

- ①×100 平均組織
Wüstite+Fayalite
- ②×100 椀形滓底部組織
Fayalite 主体
- ③×200 硬度圧痕
Wüstite: 493 Hv
荷重100g

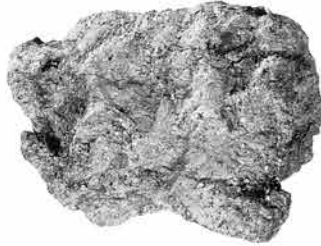


外観写真 1/1.5

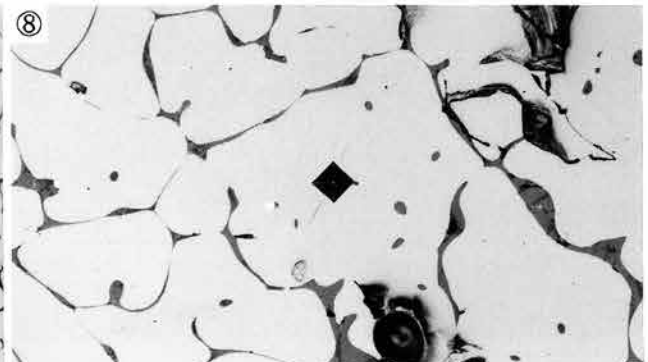
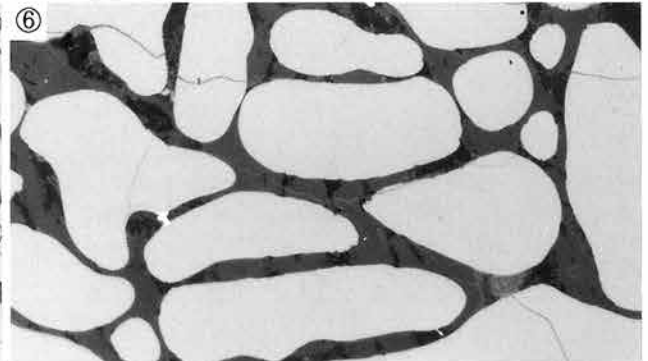
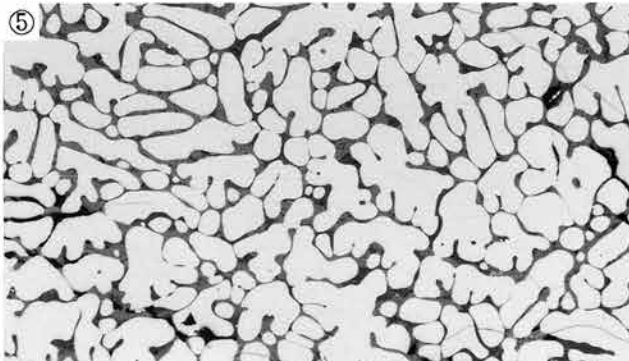
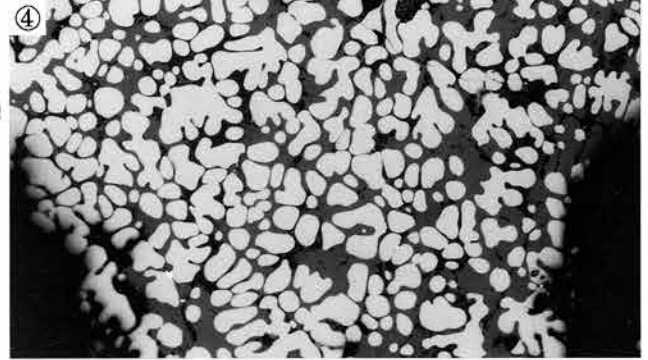


(2) N-3
B6グリッド出土
鍛錬鍛冶滓

- ④⑤×100 ⑥×400
Wüstite 凝集
- ⑦×100 Wüstite 凝集
- ⑧×200 硬度圧痕
Wüstite: 472 Hv 荷重200g



外観写真 1/1.2



(3) N-2
B5グリッド出土
鍛錬鍛冶滓

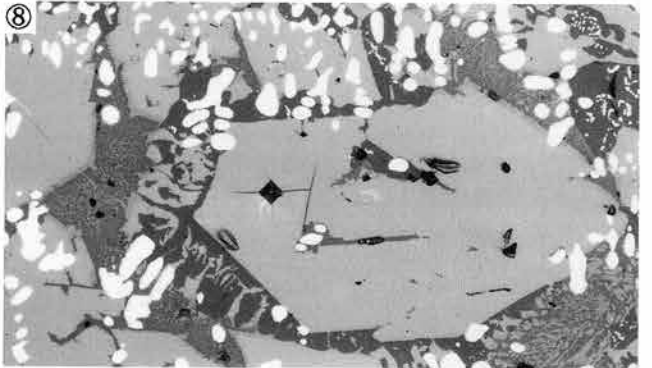
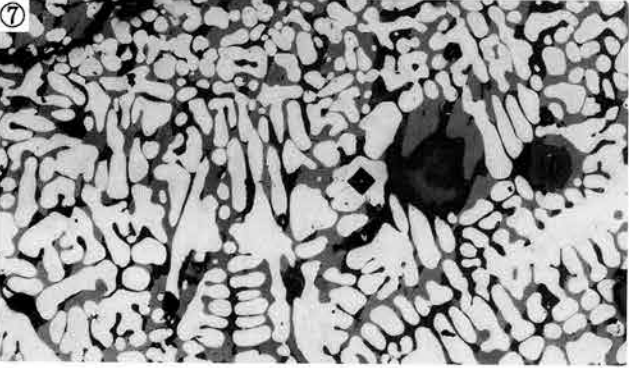
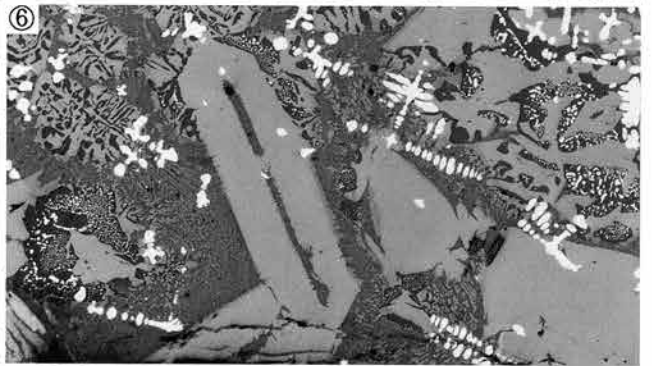
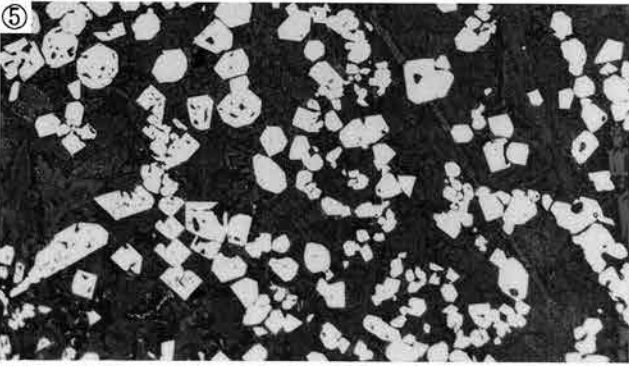
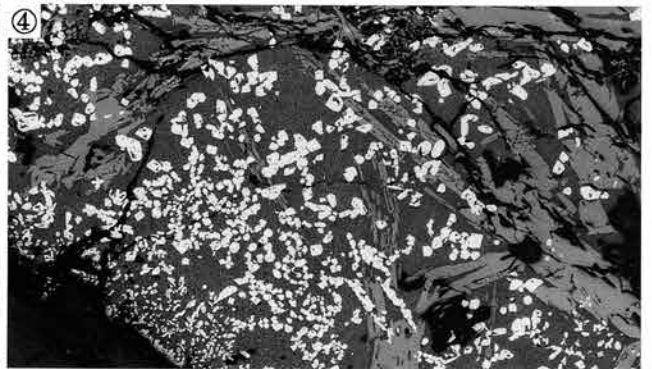
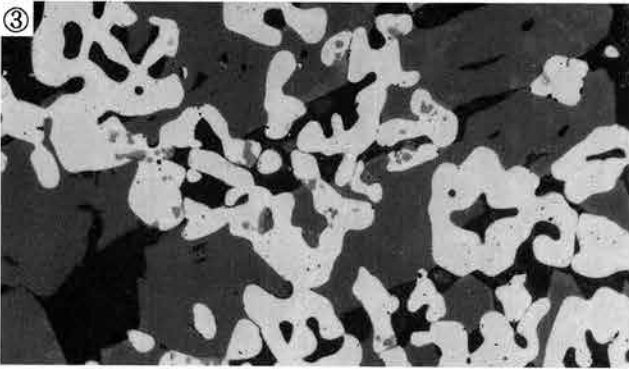
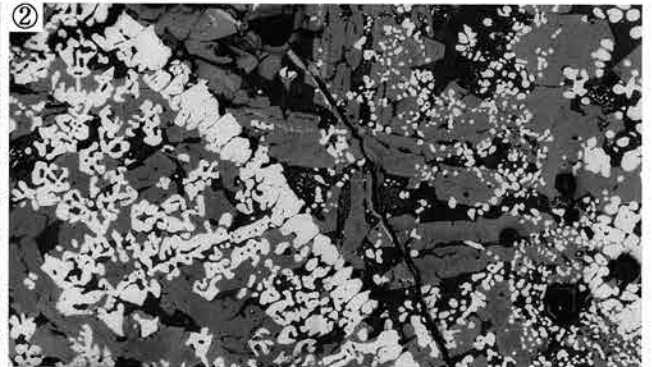
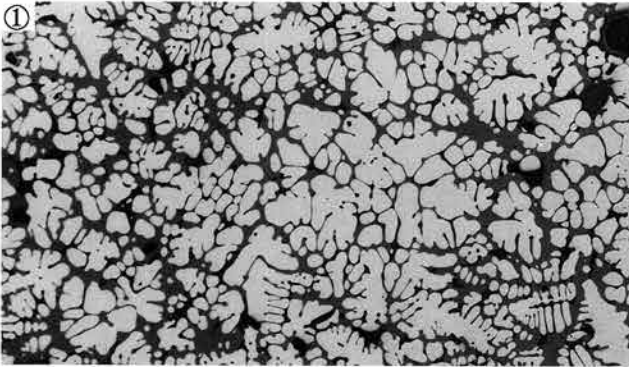
- ①×100 平均組織 Wüstite+Fayalite
- ②④×100 ③⑤×400 滓底部側極部組織
Magnetite+Fayalite
- ⑥×100 底部端部 Fayalite
- ⑦⑧×200 硬度圧痕
- ⑦ Wüstite: 498 Hv 荷重100 g
- ⑧ Fayalite: 698 Hv 荷重100 g



表側

裏側

外観写真 1/1.2



報告書抄録

書名	みやだいら むしかわじょう なかのやま 宮平遺跡・虫川城跡・中ノ山遺跡							
副書名	北越北線関係発掘調査報告書							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第69集							
編著者名	[宮平遺跡] 高橋保雄・戸根与八郎・佐藤正知・木村康裕							
	[虫川城跡] 高橋保雄・戸根与八郎・唐沢至朗							
	[中ノ山遺跡] 小池義人・土橋由理子・武田孝昭							
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒951 新潟県新潟市一番堀通町5923-46 TEL 025-223-5642							
発行年月日	1995年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宮平遺跡	新潟県東頸城郡蒲川原村 大字横川字宮平240番地 ほか	15-522	30	37度 9分 27秒	138度 25分 6秒	19880718～ 19880927	2,628	北越北線建設
虫川城跡	新潟県東頸城郡蒲川原村 大字虫川字古城1510番地 1ほか	15-522	19	37度 9分 5秒	138度 27分 6秒	19790424～ 19790428 19860519～ 19860605	168 317	北越北線建設
中ノ山遺跡	新潟県東頸城郡大潟町大 字上小船津浜字中ノ山46 5番地ほか	15-542	37	37度 12分 52秒	138度 19分 3秒	19930916～ 19931001	1,020	北越北線建設
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宮平遺跡	集落跡	平安・中世	掘立柱建物跡5棟 井戸6基・土坑12 基・溝5条	土師器127点・須恵 器27点・珠洲焼11点 縄文時代石器12点		集落の一部を調査した		
虫川城跡	城跡・墓地	中世・近世	郭2か所・墓壇3 基・土坑1基	唐津焼甕1点・珠洲 焼甕1点・寛永通宝 15枚・中国銭6枚・ 鉄釘23点・歯16点		墓壇1基は甕棺墓、1基 は骨壺墓		
中ノ山遺跡	遺物散布地	中世	土坑2基 ビット44基	珠洲焼・土師質土器・ 鉄製品・鉄滓 羽口・銭貨・砥石		鍛冶工房跡そのものの検 出はないが、鉄生産に関 わる遺跡		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第69集

北越北線関係発掘調査報告書

みやだいら むしかわじょう なかのやま
宮平遺跡 虫川城跡 中ノ山遺跡

平成7年3月25日印刷
平成7年3月31日発行

新潟県教育委員会
財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒951 新潟市一番堀通町5923-46
電話 (025) 223-5642
FAX (025) 228-1762
印刷 長谷川印刷
新潟市小針1-11-8
電話 (025) 233-0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第69集 『宮平遺跡 虫川城跡 中ノ山遺跡』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	中ノ山遺跡 北緯	3 7 度 1 2 分 5 2 秒	3 7 度 1 2 分 4 8 秒